２５歳までの私の人生

長く掲載し続けてきた「私の人生」の続篇で、「０～２５歳」の期間について、２０２１年7月から２０２２年１０月にブログ掲載したものだ。この年齢時期のことは、それ以前の２０１０年代にも時々書いていたが、それらは加筆してこの新たな連載に組み込んだ

２５歳までというのは、四半世紀の区切りということもあるが、２５歳になるころ、私には結婚・就職・沖縄生活スタートという人生上の区切りとなる出来事が集中し、それまでの幼少期・学生生活とは大きく異なる歩みを始めた年である。ということで、「２５歳までの私の人生」について、書き綴ったのである。

それ以降については、すでに「私の人生１」として、２５歳から４５歳のことをまとめた。今後、おそらく「私の人生2」（４５～６５歳)、「私の人生３」（６５～８５歳）としてまとめることになるだろう。

２０２２年１１月

目次

Ⅰ　幼少期　5

1.「出身地は」と聞かれれば、「岐阜」と答えるが
2. 生育地（岐阜県羽島郡柳津村）
3. 治水　稲作と紡績工場
4. 祖父母の時代（２０世紀前半）
5. 父の若き日
6. 母の若き日
7. 父母の結婚と出産
8. １９４０年代後半から５０年代の生家あたりの動向
9. 血を見るだけで「卒倒」した私
１０. 地域行事と地域の激変スタート
１１. 切り紙　折り紙　幼児期の遊び
１２. 家族のお出かけ　鉄棒、登山、海水浴、相撲・野球観戦、スキー
１３. 食べ物の思い出
１４. 履物の思い出
１５. 住と動物の思い出
１６. 親戚の家にお泊り　「お経」
１７. 低学年期のいくつかの思い出
１８. 低学年期の遊び
１９. そろばん
２０. 家業手伝い
２１. 音楽
２２. 写生・版画　学級委員　子ども郵便局
２３. 学校風景いろいろ　賞状　運動会　学芸会　米軍ヘリ
２４. 映画　テレビ　地図　ケンカ
２５. いじめられた私
２６. そのころの家族
２７. 高度経済成長へと時代が激変するなかでの私周辺

Ⅱ　中学高校時代　３０

２８．私立中学受験・入学
２９．遠距離通学など生活の激変
３０．生活激変へのとまどいと身体症状
３１．中学生時代　授業　部活
３２．伊勢湾台風
３３．生徒会長
３４．友だちつくり
３５　小説の乱読
３６　仏教　水練会
３７　社会激動　生家周辺の変化　家業を継ぐのではなく、離農し進学就職することへ
３８　競争原理の典型として点数原理の学校が、若者子どもをおおい始めたころ
３９　反抗期・親子分離　高校入学　下宿生活
４０　仏教体験
４１　受験体制下の「うっぷん晴らし」的事件のなかでの「模範生」
４２　教師いじめ　音楽・オンチ
４３　高校２年生へ　物理
４４　若い教師との出会い
４５　クラス作り　私の世界の転換の始まり
４６　学園祭
４７　施設改善の実現　大きなドラマへのスタート
４８　「看板」が「実」を伴い始める　クラスのすごい「団結力」
４９　授業改革の取組みへ　私の人生で初めての授業
５０　授業料値上げ情報が入る
５１　ほぼ全生徒全クラスが参加していく
５２　施設改善や授業料値上げをめぐる生徒会と学校側
５３　動きは新学年になっても続く　生徒会長の私へのまなざし
５４　教師たち　他校生徒とのつきあい　演劇
５５　受験準備
５６　進路　恋と失恋
５７　寂しさ　友情　恋
５８　寂しさ解消へのアプローチ　自己否定　自力と他力

Ⅲ　大学時代　５９

５９　自己否定と自信（過剰）　大学入学

６０　大学１年生　自治委員　下宿アパート　生活費
６１　（続）大学１年生　クラスなど
６２　大学２・３年生
６３　大学３年生のころ　五者協議会　進路選択
６４　大学３年生　日常生活　交際など
６５　４年生　教育実習　大学紛争の始まり
６６　大学紛争のピーク
６７　大学院入学試験
６８　卒業論文制作

Ⅳ　大学院生活　６９

６９　大学院生活スタート　高校非常勤講師になり損ねる　家庭教師と生活費
７０　スポーツ　健康状態
７１　院協活動
７２　修士時代の学習研究活動
７３　大学院時代の授業の話の続き
７４　修士論文執筆
７５　（続）修士論文執筆
７６　全生研常任委員になる
７７　研究者としての役割・居場所の確保
７８　恵美子との出会い
７９　恵美子といっしょに生活し始める
８０　沖縄との出会いと就職活動
８１　沖縄初訪問　就職活動　宮古での結婚パーティ
８２　難航する就職話　結婚式
８３　急転直下　就職決定　沖縄行
８４　岐阜の生家

Ⅰ　幼少期

１.「出身地は」と聞かれれば、「岐阜」と答えるが

しばしば「どこの出身ですか」と聞かれる。

「生まれたところは、岐阜県ですが、中学から外へ出たものですから、それほど長くはいませんでした。今では、沖縄に住んだ年を通算すると、三十数年にもなるし、本籍も沖縄に移しているので、ほぼ沖縄出身になってしまいました。」と答える。

顔つきから判断して、私が沖縄生まれ育ちで、恵美子がヤマト生まれ育ちだと思われることがしばしばだ。実は恵美子は宮古生まれ育ちなので、逆だ。そして、私がウチナ―ヤマトグチめいた話し方をするからでもある。１９９０年代初め、愛知県の中京大学で授業をしていると、沖縄出身の学生が私の所に来て、「先生は沖縄出身ですか」と尋ねたことがあった。

私が執筆した論文などのなかで特定の地域に焦点をあてて書いたものでは、９５％以上が沖縄だ。愛知が１％ぐらい。岐阜は、卒業論文で恵那を書いたが、１％にもならない。

さらに「岐阜のどこですか」と聞かれることがある。岐阜でも、飛騨と美濃では自然・文化・人々が全くといっていいほど異なるし、同じ美濃でも、西と東の違いは大きい。卒論で書いた恵那は東で、私が生まれ育った羽島は西だ。現在の交通の便で言うと、両者の間に名古屋があると言っていいほどだ。

美濃の南西部に羽島がある。戦後しばらくまでは、羽島郡として１０余りの町村で構成されていた。その一つが私が生育した柳津（ヤナイヅ）村である。

２．生育地（岐阜県羽島郡柳津村）

私が生まれた地域のことを書こう。

私は、１９４６年（昭和２１年）１０月１２目、岐阜県羽島郡柳津村に生まれた。市町村合併した現在は、岐阜市柳津町となっている。「それはどのあたりですか」と聞かれると、輪中（わじゅう）地帯で、新幹線岐阜羽島駅と東海道線岐阜駅とを結んだ直線でいうと、その中間と答えてきた。

今では、海岸まで数十 km も離れているが、「縄文海進」期には、海岸線あたりだったようだ。今でも、海抜は数メートルだ。木曽川･長良川が運んできた土砂がつくってきた三角州地帯に属する。それだけに土地は大変肥沃ではあるが、洪水対策が大変で、「水との闘い」の歴史が続いてきた地域である。

柳津に隣接する北側には、歴史的に著名な東大寺の茜部荘園がある。戦国時代に木下藤吉郎（豊臣秀吉）が一夜にして城を建設したという話が伝えられる墨俣城（別名一夜城）も近くにある。柳津という地名が示すように「津＝港」が

あったようである。

江戸以前は、葦が生い茂る湿地帯のようだった。江戸期の新田開発の流れにのって、かなりの人々が移住してきた（させられてきた）ようだ。美濃山間部の郡上あたりから移住してきたという話を聞かされた記憶がある。そして、洪水対策として、地域を堤防で囲むたくさんの「輪中」が作られていったという。川の両岸に沿って堤防が作られるのだが、それは逆に集落や農地を取り囲む堤防になるので、「輪」の「中」になるわけだ。

江戸期の美濃地域は、大名がいず、小藩、幕府直轄領、隣の尾張藩領が混じり合った地域であった。そうなったのは、戦国時代に織田・豊臣・徳川など覇権を握った勢力と対抗した勢力が、美濃では有力であったためと聞かされた。対抗勢力は明智光秀で有名な土岐氏系統、斎藤道三で有名な斎藤氏系統などのようだ。江戸期に徳川御三家の一つの尾張藩の隣国になったので、対抗勢力がでてこないように、美濃を小さく分割したようだ。

さらに尾張と美濃の境界になる木曽川の堤防の高さが、尾張側に比べて美濃側は１mほど低くさせられたともいわれる。したがって、同じ木曽川の下流で洪水の危険がありながらも、もっぱら美濃側のみに危険を集中させ、その結果として輪中が美濃側につくられたようである。

柳津地域は、尾張藩の直轄領となり、松枝輪中のなかにあった。この輪中には、隣の笠松町地域の一部も含まれており、輪中のなかでは大きな方である。この輪中の北側には加納輪中があり、確か輪中のなかでもっとも北側に位置するはずである。

木曽川・長良川・揖斐川の三川の下流域にできた輪中であるが、川の流れは頻繁に変わったようである。本曽川もかつては、柳津の北側、現在の境川あたりを流れていたが、最終的には尾張と美濃を隔てる現在の水路に落ち着いたようである。

３．治水　稲作と紡績工場

輪中域の治水は大変な事業であったが、江戸幕府はその事業を薩摩藩に命じた。外様有力大名の薩摩藩の力を弱める意図があったようである。この土木事業も一因となって財政的危機に陥る薩摩藩は、琉球王国からの砂糖を中心にした収奪などによって回復をはかり、幕末から明治にかけて「活躍」するのである。

今、私が住む沖縄と生地の岐阜との不思議な「縁」であろう。輪中地帯には、治水事業をした薩摩藩士たちを「薩摩義士」として感謝する碑もあるが、その「向こう側」に存在する沖縄に思いは及ばない。

毎年のようにあった洪水は、明治の大治水工事以降減ったらしいが、それでもその備えは日常的に行われていた。近くの堤防には、治水・防災用具や食糧などの非常時用の「倉庫」があったことを覚えている。

１９６０年代に入ってまもないある年に、北側の加納輪中が水につかり、私たちが住む南側の松枝輪中との境目になる堤防の「切り合い」の対立があり、父が出かけていったことを記憶している。結果的に、生家のある地域一帯が床下浸水となり、床上まで行かんばかりであったが、大人たちは、輪中を横切って走る名鉄電車竹鼻線の線路を切って、水を下のほうに流して、床上浸水を免れたようだ。家のなかを水が流れるさま、道が水でえぐられていて危険を感じたこ

となどを記憶している。

輪中は、全く平らであり、集落以外は水田ばかりで、視界をさえぎる物はなく、我が家から数キロ離れた木曽川の堤防まで見通せた。もともと純農村であり、米主体の農業が行われていた。小学生のころまでは、二毛作で麦も作られていた。そして、養蚕が盛んであった。河川敷は桑畑であり、あちこちの家で養蚕がおこなわれていた。養蚕農家の家に泊まると、蚕のザワザワという音で眠れないこともあった。

農業以外には、この地域は繊維産業が戦前からかなりあった。戦後も岐阜紡績と太洋紡績という二つの大きな工場があった。とくに繊維景気の時期、大変な活況を呈していた。地域には、紡績の下請け仕事など繊維産業を自宅で営む家もあった。

太洋紡績は生家の近くにあり、経営者は遠い親戚にあたる。今は、この場所はジャスコ柳津店になり、また岐阜紡績跡地はイトーヨーカ堂となり、郊外型巨大スーパーが立地している。

この二つの紡績工場には、おそらく１０００人を越す「女工さん」が全国各地からきて働いていた。とくに東北と九州が多かった。岐阜県立羽島高校柳津分校という定時制があり、午前・午後・夜間と、工場の勤務シフトに対応した三部制の授業をしていた。この学校の教育実践は、当時かなり著名であったようだ。この女工さんたちが、盆と正月に帰省するのだが、その折に服を新調する。その「女工さん」相手に婦人服仕立業をしていたのが、私の両親であり、「浅野洋装店」という看板を出していた。私の父親は、全国各地出身の女工さんと接客する中、各地の言葉がわかったので、女工さんの信頼を得ていたようだ。

４．祖父母の時代（２０世紀前半）

今回は、祖父母の時代について書こう。まず父方の祖父母。明治期に生まれ育った祖父母だが、祖父は私の生家のすぐ近くの本家で生育しただろう。この本家は、私の生家周辺では、なぜか「ほんけ」ではなく「ほんや」とよんでいる。

祖父「九市（くいち）」は明治生まれだろうが、曽祖父「九右衛門」は明治以前生まれのようだ。農業を中心とする家業であったが、それだけでは不足だったのか、もう一つの仕事として屋根葺き職人をしていたと聞いている。どなたかの連帯保証人になって、借金の肩代わりをさせられ、大変苦労したとのこと。私の父親からそのことを聞かされてきた。そのためか、父は大変な倹約家であり、その「文化」が私にまで染み付いている。

私の生家あたりの集落は「本郷」というが、昔から現在まで変わらない。１００戸内外だったろうか。もっと多かったかもしれない。そこに、地主が数戸あった。その家だけ敷地が高く、洪水の時も水がはいらないようにしてあった。屋敷の周りには木々が生い茂り蔵もあって立派だった。地主以外は、自作、小作、自小作の農家であった。我が家の本家、つまり祖父の家もその類であったようだ。

明治に入って、苗字をつけることになって、集落のほとんどが「奥村」を名乗ったが、私の一族だけは「浅野」姓だった。

曽祖父母は私が生まれる前に亡くなっていたし、どんな人であったかの話も聞いていない。祖父母は、私が子ども時代まで存命で記憶が残っている。祖父は怖そうだったが、小さな子どもには優しかった印象がある。祖母は、会いに行

くと、いつも飴玉をくれ、本家の縁側でひなたぼっこをしている印象がのこっている。

母の実家は、私が生まれ育った柳津から南西に１０キロ近く離れた小熊輪中にあった。長良川沿いである。母方の曽祖父母のことは、全く聞いていない。母方の祖父母はともに、私の１０代まで存命であったが、祖母についての記憶は薄い。祖父「神田想吉」は、祖父母４名の中で私にとってはもっともかかわりが深い。我が家の家業が忙しい盆正月前、夏休み冬休みということもあって、小学校中学年までは、しばしば長期に泊まり、従兄弟たちとよく遊んだし、祖父にはいろいろとかかわってもらったが、そのことは後に書くことになろう。

祖父は、１８９１年の巨大地震である濃尾地震の際にケガをして、その時できた額の傷跡を見せてくれた。彼は熱心な浄土真宗の信者であり、朝晩の「お勤め」（仏壇の前で経典を読む）を欠かさなかった。私もそれに付き合わせられた。正座なので、しびれる足の記憶が残っている。

家業は、このあたりのどこの家も同じ水田稲作農業だ。

５．父の若き日

父（浅野周作）は、大正７年（１９１８年）生まれである。父の兄弟姉妹は、私の記憶にあるのは父を含めて六人。他に幼児期になくなった男子、一〇代に台湾に働きに行って、亡くなった男子がいたという。合計八人となるが、早逝した方を除くと、父は３番目である。当時は、長男が家を継ぎ、次男以降はどこかに働きに出るのが普通であった。父も高等小学校卒業後、岐阜市北部のゲートル（脚絆）製造業者の住み込み「小僧」になる。父に将来希望は何だったか聞くと、大工だったという。

※　母方の叔父は、大阪のクリーニング業の「小僧」になり、戦後、それを職業とし、２０００年代まで続けていた。

父は、「小僧」時代に縫製を経験したことが、戦後になって婦人服仕立て業を始めるきっかけになったようだ。兵隊検査では不合格になったようだ。日中戦争の時代なので、大半の対象者が合格する時だ。しかし、３０人ばかりの同級生のなか、二人だけ不合格だったとのこと。「土踏まず」が形成されない扁平足で、長時間歩行ができないという身体上の理由と聞いている。加えて、身長は低く鳩胸だった。縫製という仕事柄、前かがみ姿勢が多く猫背にもなっていた。私もその流れを引き継いでいそうだ。

父は、軍隊に行かない代わりに、生家から東へ電車を乗り継いで行く各務ヶ原の中島飛行機に徴用され、飛行機製造にかかわったようだ。各務ヶ原は、航空関係の基地や産業が長く続いたところだ。戦争直後、米軍の大規模な海兵隊が基地を置いていた。後、沖縄に移ってきたのである。その後も、自衛隊の基地や航空産業が重要な位置を占める所である。

父は徴用に出ていたが、戦中は長い間肋膜炎で寝込んでいたとのことだ。私の身体の弱さの面は、父の流れなのだろうか。父はそれでも、８０代後半まで存命で、長寿といえるだろう。

戦争中は、身体のことで苦労したようだが、結果的に戦争に直接かかわらず、生き延びることができたといえようか。

父の弟は、中国大陸の戦争に動員され、危機一髪の体験を私にもよく話してくれた。父の妹の配偶者は、海軍の戦艦でボイラーを炊く業務に従事し、その自伝を書いている。戦後は、国鉄機関車の「かまたき」業務をしていた。この二人の叔父・義叔父は、いろいろと話を聞かせてくれた。

６．母の若き日

私の母は、大正８年（１９１９年生ま）生まれだ。兄弟姉妹は、女５人男２人の７人で、母は６番目だった。母の弟とは、姉弟の結びつきが強く、弟が９０歳ころに亡くなるまで、親しい関係を続けていた。弟は、海軍の航空通信兵で、沖縄戦のさなか、沖縄とも交信したとのことで、沖縄に特別の思いをもち、戦後しばしば沖縄訪問をしている。先にも書いたが、大阪のクリーニング業の「小僧」経験があったので、それをもとに、戦後、岐阜の市街地にクリーニング店を開業し、途中で場所を変えたが、６０年余り営んできた。柳津の私の生家は、クリーニングの取次所もしていた関係もあって、日常的に叔父は通ってきた。母だけでなく、生家の家族の世話をよくしていただいた。

母は、高等小学校卒業後、紡績工場の女工となる。当時はごくありふれた例のようだ。

子どものころから、身体が強く、小学生時代に郡の陸上競技大会で３位に入ったことを自慢にしていた。「自分が強い」ことを誇りにし、いってみれば強者であることにアイデンティティをもっていた。父はよく涙を流したが、母は「男らしくない」と愚痴っていた。私の姉の死の折も、「私は泣かない」と語っていた。「泣きたい気持ちがあるなら、泣いてもいいのに」と私は思った。

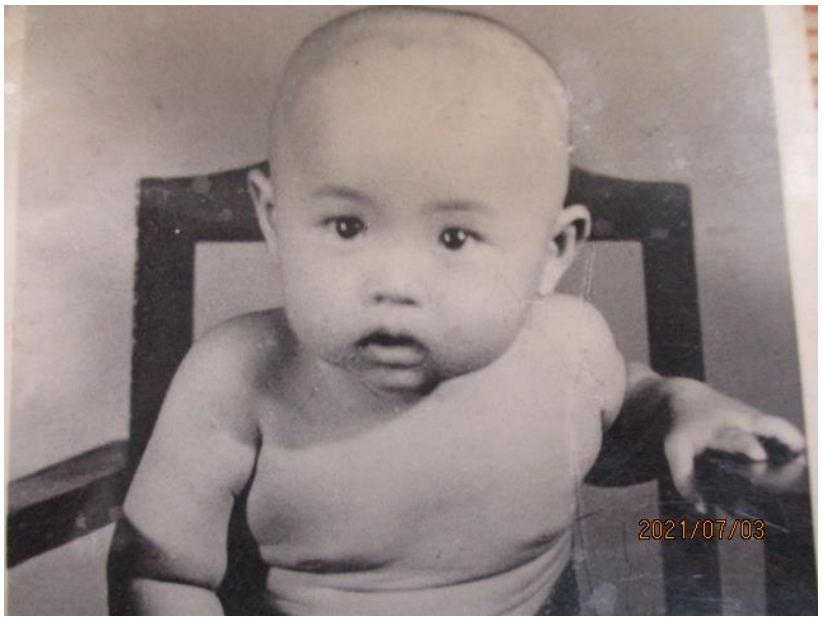
ともかく気が強く、自分より「下」の者、「弱い」者に対して、指示命令をすることが多く、指示された「下」「弱」のものは、従うしかなかった。私自身も中学時代ころまでは、そんな状態だった。弟である叔父にも指示の言葉を続けていた。叔父は、それを受け入れているようでいて、実際は姉である母の面倒を見ているように、私には見えた。

母には「力」信仰があり、自分の実績を自慢することがしばしばだった。「下」「弱」者にはお金や温情を与えれば、「言うことをきく」という信念めいたものもあったようだ。だから、弱音を吐くことが嫌いだし、他者に依存することが嫌いだった。依存することは負けることだと思っていたようだ。だが、自分がかなわないと感じる「強い」ものには従い、その人を褒めることがよくあった。習い事の師匠などをよく誉めていた。とはいっても、その人を嫌いになると、否定的な呼び方に変わる。そんなことで、敗北とか間違いとかを受け入れることができないタイプだった。また、弱いという否定的事実に向き合うことも下手だった。

そんな彼女にとって、「思うとおりにならない強者」には、夫である周作、そして、本家の二代にわたる当主がいたが、相手がいない時に、グチを聞かされた。私も、中高年になると、「思うとおりにならない強者」の仲間に入ったようだ。

目下（めした）と見なされた「子分」格の者を従えることが多く、姉夫婦や叔父がそうであったと、母本人は思っていたが、目下と思われた人が、本心でそう思っていたとは考えにくい。

そして、同等対等の仲間を作るのが下手で、旅仲間とか趣味仲間がいたように思うが、いつのまにか、その存在が見えなくなった。



７．父母の結婚と出産

父と母は１９４２年結婚した。当時の主流であった見合いでなく、親決め婚といってよいものだろう。当時、その形も多かったようだ。なかには、親戚どうしが相談して決める、親戚同士の結婚が結構見られた。従兄妹の結婚もみられた。母も、弟の叔父と相談して、私を従兄妹と結婚させるという約束を、私の幼少時にしていたと、聞かされた。

父と母の結婚の場合、事前に父は内密裡に母を見に行って、OK したと語るが、母は結婚式当日が父と初対面だった。

戦争中なので、軍隊にも行けない父とのカップリングを、母は、時代状況の中「仕方がない」とあきらめていたと語っていた。

結婚と同時に、本家から徒歩２～３分の所に親から譲ってもらった数十坪の土地に新居を立てた。敷地の土地は低く、後の床下浸水の際に、家のなかを汚水が流れる立地だった。また、自家消費のための米をつくるための水田三反をもらって、父は「新家（しんけ）（あらや）」として、分家した。

縫製業のようなものを行うつもりだったろうが、父が徴用にでかけ、病気にもなったので、本格的には戦後になったと思うが、戦中生活についての話は聞いていない。

私の記憶がかすかに残る１９５０年ごろには、婦人服仕立て業を本格化させていたようだ。紙に「ミシン屋」と書いて、店の窓ガラスに貼り付け看板にしていた記憶が残っている。当時ミシンは家庭用のものではなく業務用が一般的で、ミシンがあること自体が、宣伝文句になったのだ。そのミシンは、「シンガーミシン」だった。

その後、「浅野洋装店」という看板を出したが、いつごろだったろうか、記憶に残っていない。

この周辺での戦禍の話は聞いていない。岐阜の都市部に空襲があり、生家のある柳津の上空を爆撃機が飛んでいった話を聞いたことがある。私の記憶に残っているのは、生家の前の道路を、大八車を引っ張って移動する人々だ。食糧の買い出しなのだろうか。

１９４４年　姉の出生。戦中の栄養不良の時代で、身長が１３０㎝そこそこで、図抜けて低く、父母は不憫に感じていたようだ。しかし、戦後の医療体制が整わないころだったので、身長を伸ばす治療ができなかったことを残念がっていた。

１９４６年１０月１２日　私の出産。自宅出産で、産婆がきたとのこと。生まれてすぐに「おしっこ」を産婆さんにかけたという話をきかされた。体重は３７５０グラムで大きい方だった。

私が生まれたころ、女性一人が数人以上を生む多産から１～３人という少産に移る時期だった。父母に兄弟姉妹が多

かったため、従兄妹数が両系あわせて３０名を越すが、年代ごとに少産傾向が出てきた。父母がどうやって、「家族計画」を進めたかについては、話を聞いていない。

写真は、満１歳ごろの私

８．１９４０年代後半から５０年代の生家あたりの動向

私の乳幼児期の時代動向をおおまかに押さえておこう。

私が生まれた１９４６年１０月は、戦争のなかで生じた出生数の激減が終わり、ベビーブームのスタート時点となる。小学校の学級での番号つけが誕生日順になされていたが、１９４６年は、１０月から人数が激増することをよく示していた。その前と後では、数に大きな開きがあったのだ。

ベビーブームを１９４７年からだとする把握をよく見かけるが、細かく言うと、１９４６年１０月ごろからだ。これが沖縄になると、もう少し遅れ、１９４７年の春ごろからになる。１９４７年生まれの恵美子は、沖縄のベビーブームのスタート地点生まれなのだ。

※　余談　私の誕生日が１０月１２日なので、周りから「寝正月」だとよく冷やかされた。当時、正確な知識がなく「１０月１０日（とつきとおか）」を言葉通りに信じている子どもが多かったのだろう。

それにしても、妊娠出産の条件を狭めた戦争が終わって、ある程度の期間を経て、大量の人々が戦場や植民地などから帰り、食糧確保ができ、妊娠出産が本格化するのは、１９４６年以降であった。

また戦後、想像を絶するインフレがあったが、そのころどのように切り抜けたかの話については父母から聞いていない。

戦後復興から１９５０年代に入るころ、朝鮮戦争景気があった。その後、繊維景気など好景気がいくつもあって、１９５０年代末から高度経済成長へと移っていく。戦前戦後を生き抜いた私の親たちの世代は、戦後復興から経済成長へのこの時期を忙しく駆けていく。繊維産業の盛んな私の生地の柳津は、そうした経済状況をストレートに表した地域でもあった。直接の戦禍がなく、農村であり食糧確保でも有利であったようだ。

人口４０００人の柳津村に大きな紡績工場が二つもでき、大量の「女工さん」の全国各地からの転入により、若年女性比率がきわめて高い人口構図を示していく。１９５０年代に入って、隣の旧佐波村と合併する。提灯行列があった記憶が残っている。その後、旧佐波村域には岐阜教育大学（現在岐阜聖徳学園大学）が設置された。

私の生家は、婦人服仕立て業を始める。他の親戚も、農業に携わる人が多かったが、次男三男の家は、農業以外の仕事を色々と始める。クリーニング業を始めた叔父、国鉄機関士になった義叔父のことは書いたが、軍隊から復員した叔父は、三重県の山間部の開拓に携わる。その後を継いだ従兄弟は、いまでは大規模養鶏業を営んでいるが、戦後かなりの期間いろいろと苦労したようだ。小学生のころ、一度遊びに行ったが、そこで、食べたスイカがとても美味しく、巨大なものを一個平らげて、しばらく動けず、横になっていた記憶がある。美味しいものがない当時、滅多に出会えない

ごちそうだった。

当時の食事は、麦飯が多かったが、時々さつまいも混じりのご飯だった。それにみそ汁がついていた。おかずは、大根など一品が多かった。同じ大根のおかずを２～３日間、食べ続けた記憶がある。肉料理は滅多になかった。魚は、イワシ、サンマ、フナなどが、週に一回あればいい方だった。

９．血を見るだけで「卒倒」した私

３～４歳以前の記憶は、たいていの人は少ないか、ない。私も大変少ない。少ないなかで、私の体をめぐっての二つの「事件」だけは覚えている。いずれも何歳の事かはわからない。３歳か４歳かだろう。

一つは、左手の薬指の爪の根元をミシンで「縫った」ことだ。父の仕事場にあるミシンで遊んでいて、爪の根元を針で２～３往復させてしまった。糸はついていなかった、と思う。その時は泣き叫んだだろうと思うが、記憶ははっきりしない。しかし、いまでも縫った跡があり、根元の肉が変形し、伸びてくる爪も変形している。７０年間変わりなく、変形した爪が伸びてくる。

もう一つは、これまた仕立て仕事に使う小刀で遊んでいて、手のひらを傷つけ、手のひらに血がたまってしまった。この血がたまった記憶だけが鮮明だ。

その後が大変だった。血を見るたびに、「卒倒」状態、もしくは、それに近い状態になった。近所の子どもたちとエビガニ（アメリカザリガニ）をとる遊びが流行っていたが、カエルを捕まえて、地面に強くたたきつけて気絶をさせてエビガニを引き寄せる餌にする役目が出来なかった。学校の理科や生物の授業で、血の話になると「もうダメ」で、うつ伏せになって、教師の話が聞こえないようにしていた。

健康診断のための検血で５ccの血液を取るだけで、気分が悪くなり、しゃがみ込んでしまう事態が何回あったろうか。確率でいうと５０％。２０代ぐらいになると、看護師さんに事前にそういう「くせ」があることを予め伝え、ベッドを「準備」してもらったこともある。実際、そのベッドでしばし休んだことがある。

「卒倒」するときは、いくつか条件がある。急激に寒くなるなどの温度変化。空腹。睡眠不足。そうした条件がある時に、針とか刃物をみると、完璧に条件がそろう。笑い話のようなのは、床屋で「卒倒」した時のことだ。空腹・睡眠不足の冬のある日、床屋に入った。ひげそりのためにかみそりをあてた途端に「卒倒」。床屋もびっくりだろう。

人間ドックでは、朝食をとらずに検血するので、これまた心配だった。注射器を絶対に見ないように、工夫してのぞむのは当然だった。でも、３０代後半以降になると、ようやく少なくなってきた。「卒倒」を完全に「卒業」したのは４０代になってからだ。

だから、将来進路を考える際には、医療関係は最初から最後まであり得なかった。私が、けんかもなかなかできない「平和主義者」なのは幼少時からだが、これらの体験が『原点』になっているようだ。

１０．地域行事と地域の激変スタート

写真は、私が３，４歳ごろ　父、母、姉

子どものころの地域行事で記憶に残っているのは、秋祭り、正月の左義長(どんと焼き)、８月下旬の「お地蔵さん」の三つだ。

秋祭りがもっとも盛大だった。年齢別の御神輿を出した。子ども若者人口が多い時代だからできたのだろう。小学生ぐらいから、学年別の神輿があり、順に村内を練り歩いた。神輿行列の最後は青年団の大きな神輿。なぜか、女性用の赤い襦袢を着て、派手にやる。一晩中練り歩く。無礼講的でもあった。その際に唄われたのは「おばば」だった。私の記憶に残るただ一つの地域民謡だ。歌詞の「おばばどこきゃるも（おばばどこに行くのか)」が、私の記憶に残る地域方言だ。

家々がご馳走を作り、親戚の人を招いた。この時の「ぼたもち（もちを甘い小豆で包んだもの)」「きなこもち」が、私にとっても、年間で最高のものだった。

左義長は、正月の八日か九日ごろだという記憶だが、大きな藁人形めいたものをたてて、そこにしめ縄などの正月用品を投げ込んで燃やす。おもちを入れて、焼きもちにもした。

「お地蔵さん」は、地蔵が置かれている辻に大人たちがたって、太鼓をたたき、集まる子どもには菓子を与えた。

普通の家では、家族単位の行事として盆と正月があったが、我が家は家業のために、繁忙をきわめ、子どもが楽しめる時ではなかった。それでも、祖父母など親戚の家に何日か泊りにいって、従兄弟たちと遊んだという楽しい思い出がある。従兄手作りの畳一畳の大きな凧を飛ばす、長良川を泳ぐなど、大変強烈な思い出がある。大都市の建設ブームに入る１９５０年代半ば以降は、石・砂採取のため、川は遊泳禁止になっていくが、それ以前のことだ。

これらの行事は、１９５０年代後半に劇的に消滅した。あっという間だった。そして、私も、事実上、村から離れて行く。村の産業変化も著しかった。勤めに出る人が増え、農業をする人も兼業化していった。田んぼには、強力な農薬が投入され、虫だけでなく、エビガニが激減した。田んぼに立ち入り禁止の札がたち、冬場の絶好の遊び場がなくなった。

１９５０年代半ばまでは、まだ蒸気機関車の時代だった。ある時、遠くの東海道線の線路脇まで、学校からかどうか

は記憶にないが、遠足のように徒歩で出かけた。天皇が乗った列車が通過するというので、線路脇から「遥拝」した。小学校入学前かもしれない。記憶がはっきりしない。戦前なら、そういうことは、よくあったと聞くが、戦後の私まで、そんなことを記憶している。

１１．切り紙　折り紙　幼児期の遊び

私の幼児期は戦後間もない時期で、おもちゃなどが少なく、いろいろなものを遊び道具にした。

我が家の家業、婦人服仕立屋には、ハサミがいろいろとある。ラシャばさみとよんでいた、大きなハサミが私の愛好品だった。新聞紙を、いろいろな形に切って遊んでいた。3~4 歳からか。

今では何を切ったか、頭では覚えていないが、手先が覚えている。１９７０年代半ば、長男が長期入院した時に、長男だけでなく入院中の子どもたちのために、いろいろなものを切ってあげた。その時、幼児期の体験が生きたのだ。その時、私の得意技が「切り紙」であることを発見した。

その後、大人の集まりでの余興でも、いろいろなものを切った。ある時は、参加者に「注文したものを切る」と言ったら、「5 匹の猿が木のぼりしている」と言った感じの注文が出た。苦戦したが、切った。時には、世界地図、日本地図を切る。小学校時代、地図が大好きで、フリーハンドで世界地図や日本地図が書けるようになったので、それを応用したものだ。

プロの切り絵師がいるが、あんなにうまくはいかない。でも、素人としてはまあまあだ。

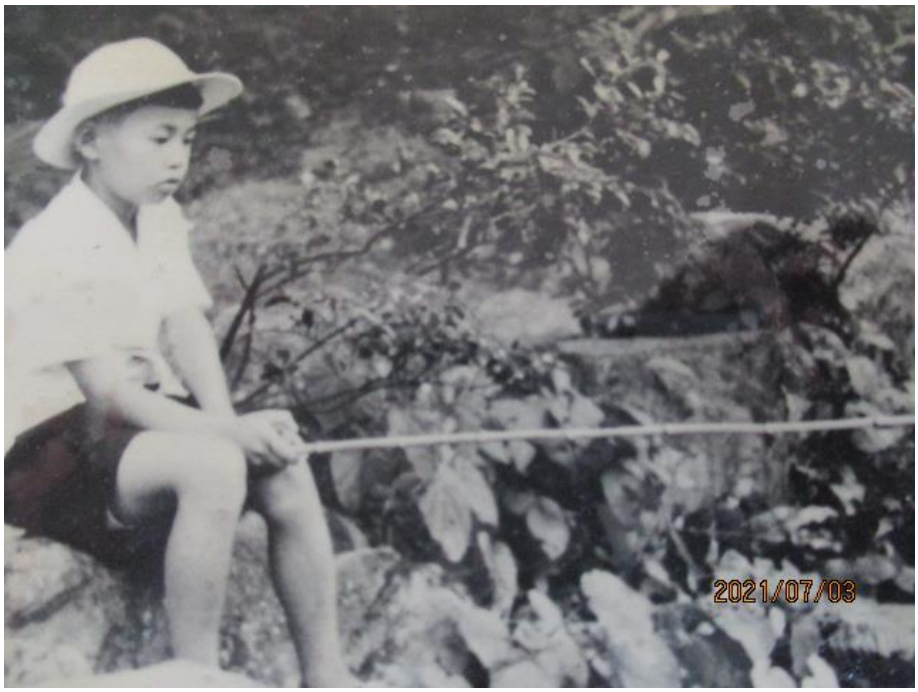
切り紙のほかに、新聞紙を使って折り紙もしていた。「舟」や「飛行機」が中心で、部屋一杯に船を「浮かべて」自己満足していたことを覚えている。5~6 歳のころだろう。

おもちゃが少ない時代だったが、こんなことを発展させて、自分で遊び道具を作るなど、作ることを楽しむ時代だった。時代は下るが、次男が幼児期を迎えたころ、ＮＨＫ教育テレビの日曜大工をみて、いろいろなものを作ってやっていた。傑作は、でかい飛行機で、地面を走るものだった。

笑いとひんしゅくを買ったのは、保育園が保護者に遊び道具作りを要請したときのことだ。自分の古ズボンを二着使って、巨大ヒトデを作った。中にはこれまた古布を入れ込んだ。子どもは恥ずかしくて悲しかったらしい。これまた、私の自己満足だった。

こんな私の影響か、息子は色々なものを作るのが上手い。巨大パチンコ、部屋一杯使ってのゴルフコースづくり。障害物ゴルフコースというべきか。

今思い出せば、笑い話の多い遊びだ。



１２．家族のお出かけ　鉄棒、登山、海水浴、相撲・野球観戦、スキー

小学校入学前年の秋、小学校運動会を見に行った際、運動場にあった鉄棒で遊んでいて、鉄棒から落ちた。それ以降、鉄棒恐怖症になる。そのため、高学年になっても、逆上がりさえできなかった。

今から思えば、たわいもない話だが、幼児期の私には、重大だったのだろう。

家族などでお出かけした思い出。５～７歳ごろのことだろう。

養老の滝へ、母と出かけた。自転車でいったような記憶だが、電車かもしれない。生家近辺では、数少ない観光地だ。そこの釣り堀で魚釣りをした。頭の記憶よりは、写真の「記憶」だ。

父親には、伊吹山登山に連れて行ってもらったことを覚えている。夜、家を出て、国鉄にのって、山腹の駅まで行き、そこから真夜中に登っていくのだ。月が出ていた。頂上近くで小休憩した後、日の出を待つのだ。その時は、雲が出て見られなかった。

知多半島の海水浴場に家族で出かけた。初めて海を見た。今では、そこは埋め立てられ、工場になっている。

当時は金山体育館といっていたが、大相撲の名古屋準本場所にも連れて行ってもらったことを覚えている。羽島山という力士がいた時代だ。

名古屋の中日球場に、野球観戦に行ったことも覚えている。ちょうど中日が優勝した年で、杉下・杉山といった選手が活躍していた。1953 年ごろだった。

試合開始前、ネット近くで、練習風景をみていたら、雑誌記者が近づいてきて、『坊や、杉下選手のサインをもらってあげるから』といって、サイン場面を写真に取られた記憶がある。彼がフォークボールを日本に持ち込んだばかりのころだ。そのサインは、関心のない人が見たら、いたずら書きのようで、我が家で裁縫をしている人が、それを台紙にして作業をしたものだから、ずたずたになってしまった。

これが縁で、中日ファンになってしまった。もっとも東海地方の住民は、ほぼすべてが中日ファンだった時代だ。

叔父がスキーに従兄弟たちといっしょに連れて行ってくれたことも覚えている。それまで竹スキーをしたことはあるが、はじめての本格的スキーだ。と言っても、駅からスキー場まで、長距離徒歩、そして、リフトがないころで、歩いて登ってから、滑るという具合で、トータルで 3～4 回、転び転び滑るというありさま。でも、雪一面の光景が忘れられ

ない。汽車に乗って出かけた。

小学校２年の大病までは、『健康優良児』だったようだ。この大病が、私の人生を大きく変えたようだ。伝染病で、数日間意識不明状態だったが、当時使われ始めた抗生物質の効果があったようだ。長く学校を休んだようだ。後遺症はなかったが、病弱になってしまった。その後はいつも何かの病気を抱えながらの人生となった。

病名は伝えてもらえなかったので不明なのだが、「小児麻痺（ポリオ）」ではないかと推測している。後遺症はなかったようだ。

１３．食べ物の思い出

食材では現在とは比べ物にならない戦後期に生育したせいか、量質ともに乏しい食料事情の思い出が多い。それでも、戦時下に生まれ育った姉よりは恵まれていたかもしれない。

食事は、麦飯やサツマイモご飯が多かった。おかずは毎回一品であり、同じものを何度か食べることが多かった。よく覚えているのは、３～４センチぐらいの厚みで切った丸いままの大根を煮たものだった。一回目は美味しかったが、何回も食べると、飽きてくる。でも、その味は私の原感覚だ。今でもおなかがすくと、大根の輪切りをおやつ代わりに食べることもある。

父親が、岐阜の繊維問屋街に仕入れなどで出かけた帰りに、たまに牛肉小間切れを買ってきて、すき焼きを食べたのが最高の食事だった。そして正月の「ぼたもち」（あんころもち）が、私にとって最高のものだった。年末に家族で餅つきをしたのは幼児期までだった。その後は、家業繁忙の年末に餅つきはしなくなった。正月には、角餅を年齢の数だけ食べるものだと言われたが、６個か７個が限度だった記憶だ。２５歳ぐらいの従兄弟が２５個食べたのには驚いた。

小学生中学年になると、時々お小遣いで１０円もらった。１０円で買える「かんかんぼう」25 個は割安感があった。りんご３個が 10 円だった。アイスキャンデーは、５円ぐらいだった。

森永ミルクキャラメルは高級品で２０円して、なかなか買えなかった。おまけ付きグリコが記憶に残っている。柿はどこの家の庭の木で取っても、叱られなかった。中学時代、名古屋のお店で売っているのを見て驚いた。

中学時代、名古屋に出て、友達の家で、初めてスパゲッティを食べたが、食べ方が分からず苦労したことが記憶にある。豚肉もそのころ初めて食べた。

いつも『おなかをすかしていた』ころ、食べ物の思い出のなかで一番は、麩（ふ）の話だ。

とっても空腹のとき、台所の食糧保管場所に「ふ」一本を見つけた。４０センチくらいの細長く、丸いもので、それを一本食べた。のどが渇いたので水を飲んだ。「ふ」がおなかの中でふくらんで、腹痛をおこし、親にばれてこっぴどく叱られた。

１４．履物の思い出

衣の思い出は、ほとんどない。なぜだろうか。対照的に、履物のことはよく覚えている。手足のアカギレやシモヤケで悩んでいたからだろう。原因は、冬でも裸足が一般的だったことにある。たまに「よそ行き」の際に、靴・下駄をはき、足袋をはいたことがある。靴といっても、当時ズック靴と呼んでいたものだ。今、インターネット情報で検索して出てきたズック靴とは全く異なる。現在５００円ぐらいで売っているプラスティック製でゴム状の簡易に作られたツッカケ風のものを思い出すのが一番手っ取り早い。調べていくと、「クロックス風サンダル」というのだそうだ。

それを履きだしたのはいつのことだろうか。小学校中学年ぐらいか。足先が丸くつくられているので、小指が全く機能しないようになり、現在に至っている。小指の爪は、伸びずに固まっているので、爪切りを何十年もしたことがない。

ぜいたく品扱いだった足袋を履くのは、まさに「よそゆき」であり、その際は下駄をはいた。足袋を履いて学校に行くと、クラスメイトからからかわれるほどだった。

靴下を初めて履いたのはいつだろうか。多分高学年だろう。常時履くようになったのは、中学入学後だと思う。

そんな具合だから、冬になれば、シモヤケとアカギレに悩んだ。シモヤケでは足が腫れて膨らんだ。アカギレは、痛かった。手はたくさんの赤い線が刻まれたアカギレに満ちていた。でも、周りの子どもは皆そんな調子だから、これが当たり前と思った。アカギレ・シモヤケがないのが普通だと気づいたのは、中学に入って、クラスメイトにそれがないことに気づいたからだ。そして、手足をいつもきれいにし、湿気を減らせば、治ることも知った。

このことは、まさに「田舎人と都会人の文化の違い」にまざまざと気づかされたことでもあった。同じことは、中学に入って、クラスメイトに、「耳の後ろを洗わないのか」と言われた時だった。その時に、はじめて耳の後ろも洗うことを知った。

１５．住と動物の思い出

生家はこじんまりしていたが、多くの面積は、家業の婦人服仕立て業のための客応対空間、採寸空間、たくさんの布を並べた空間がある店と縫製作業場に取られていた。ほかは、寝室兼居間、台所だった。

トイレ風呂場は、家の外に作られていた。トイレはポットン式で、汲み取ったものを田畑の肥料にした。高学年になると、それを運ぶ仕事もやらされた。まさに汚い嫌な仕事だった。

井戸は、手動ポンプだった。生家周辺は低湿地であり、少し掘ればすぐに水が出てくる地域で、どの家にも手動ポンプ式の井戸があった。水道が普及したのは、１９６０年代だろう。

風呂は、木製桶に水を入れて、石炭を燃やして沸かした。風呂焚き担当は私だった。加えて、朝のご飯炊きも私の仕事だった。カマドに、ごく普通の羽釜だ。いずれも３０分余りの仕事だ。みそ汁とかおかずを作った記憶はない。土間掃除の仕事を担当した記憶も残っている。

記憶がはっきりしないが、幼少年期に簡易な増築をしたようだ。農業用の倉庫ができた。そして、家業繁忙のため、住み込みで働く人、通いで来る人の作業場をつくるための増築だと思われる。倉庫には、農業用のリヤカー、自転車、父が仕事用に使った原動機付き自転車があった。当時は、まさに「原動機付き」の自転車だった。

倉庫には、一時、事情があってだろうが、薬用ヘビの販売で生計を立てていた人が住んでいた。かぶっていた帽子からヘビを取り出して、子どもの姉や私を驚かせていた。私はその倉庫の中二階から飛び降りて、膝を痛めた記憶がある。

倉庫は、私の中学入学に合わせて、私の勉強部屋兼寝室に改造された。

常時、動物を飼っていた。まず犬。私は犬が好きで、犬の係は私だった。幼児期に飼っていた「シロ」（雑種の中型犬）が、記憶に深く刻まれている。番犬ではあるが、農業用の資材を載せたリヤカーを引っ張る役目をおおいに果たした。パワフルで、労働力として随分の働きだった。

他に、モルモットを何匹か飼っていた。ウサギを飼っていたかもしれない。加えて、十姉妹を何羽か飼っていた記憶もある。縫製の人達の癒しになっていたのだろう。そんな鳥を狙って、長いアオダイショウが、ゆうゆうと侵入してきた時には驚いた。

１６．親戚の家にお泊り　「お経」

幼少期の楽しみの一つは、親戚の家にお泊りすることだった。夏休みを中心に、年に１，２回あったかどうか。従兄弟と遊びあうことが最高だった。

母の実家に住む従兄弟が、なかなかの遊び上手だった。畳一畳の大凧を作り、上げる。近くの長良川で泳ぐ。経済の高度成長期以前で、川からの砂利採取以前だったので、危険はそれほどではなかった。しかし、子どもにとっては急流であり、泳ぐのは大変だった。幼児期だった私にとっては冒険じみた屋外遊びは記憶に残っている。室内遊びの記憶は少ないが、はさみ将棋の記憶が残っている。

この年上の従兄弟と最近語りあうことがあったが、いまではカラオケ指導など、音楽関係では地域の有名人になっている。アコーディオンの名手でもあり、世話してもらったこともあった。

他にも、叔父伯母の家にいき、従兄弟たちを遊んだが、それも楽しい思い出になっている。

この地域は、浄土真宗地帯である。母方の祖父母宅に泊まりにいくと、朝晩の「お勤め」、つまり仏壇前での「お経」読みがあった。小学生のころは、日曜学校といって近くのお寺に通い、「お経」を暗記させられた。かなりの長さであるが、暗記した。いまでは最初の３行しか記憶していない。「きみょうむりょうじゅにょうら～・・・・・」というものだ。

浄土真宗の熱心な信者であった母方の祖父は朝晩の「お勤め」を欠かさなかった。われわれ孫は、後ろに並んで正座していた。足がしびれるのが嫌だった。祖父は、いつも「太閤記」の話を聞かせてくれた。地域の人気物語といったところだろう。私が生育した地域は、秀吉（藤吉郎）の岐阜城攻略の重要地点に近かったこともあったろう。

当時、ほとんどの家には、真宗の仏壇があった。半畳大のかなり立派なものだ。分家だった私の実家に仏壇でできるのは、１９８０年代のころだったろうか。
ということで、浄土真宗は生まれて以来の付き合いだ。

親戚近隣の葬儀には、地域の家々から一人ずつ手伝いに出ることになっていた。小学生時代のある時、両親とも風邪で寝込んで、代理で私が出たが、大変な戸惑いだった。
父方の祖父の葬儀が、私が出会った最後の土葬であった。戦後数年のころだ。
親が法事から帰ると、法事用のお菓子が食べられた。当時滅多に出会えない甘いものであり、大喜びで食べた。成人した後、食べてみて、この味でそんなに喜んだことが信じられなかった。

１７．低学年期のいくつかの思い出

私が小学校に入ったのは、１９５３年のことだ。保育園とか幼稚園とかには行っていない。近隣にはなく、電車でしか通えない隣の笠松町にしかなかったからだ。そして、よほど裕福な家庭の子どもが通うものという感覚があり、通っていた知り合いはいない。
小さな子どもたちは、家内外、道路、空き地、田畑など、あちこちにいた。親たちは、近くの田畑で働いており、自宅から離れた勤め先に通う人の記憶は、幼少期だった私にはない。

母の実家には、名鉄竹鼻線の電車に乗り、途中でバスに乗り換えて、出かけた。戦後間もないころで、途中故障の記憶もある。木炭車であったかどうかは、記憶がはっきりしないが、そんなこともありそうな時代だ。エンジンをかける時、運転手が、車の前で大きなものを回していた記憶がある。

親戚の家では、当時盛んであった養蚕をすることが多く、蚕棚のある部屋で寝ることもあったが、「ざわざわ」という音は気持ち悪かった。近くの堤防の中州は、桑畑ばかりであった。時々、桑の実を食べたことも記憶にある。
その養蚕は、１９５０年代末になると、激減していく。

「浅野洋装店」の客である紡績女工さんたちが、小学生低学年の私を可愛がってくれて、彼女たちの寄宿舎まで遊びに行ったことも覚えている。東北や九州出身の人が多かった。父は、それらの『方言』を多少は使って話していた。彼女たちが故郷への帰省後、お土産をもって我が店を訪問してくれた。土産の代表的なものが鹿児島のボンタンアメと兵六餅で、私は何度も食べた。いまでも販売している長い歴史のものだ。

当時の我が家には読書の習慣はなかった。たまに、偉人伝の類の本をプレゼントされた記憶が残っている。太閤記やリンカーン物語だった。当時は、立身出世をあおるものが多かった。たまに、「小学３年生」といった学年別の雑誌を買ってもらった記憶が残っている。

おもちゃを買ってもらう習慣は稀だった。記憶に残っているものに卓上ピアノがあるが、楽しんだ記憶はほとんどない。

１８．低学年期の遊び

エビガニ(アメリカザリガニのことを、こう呼んでいた)取りは、よくやった遊びだ。あちこちの小川（どぶ）に沢山いた。竹に糸をつけ、先に蛙を結んで、釣るのだ。エビガニのしっぽを結んでも釣れた。共食いだ。蛙を結び付けるには、蛙を取って殺さなくてはならないが、気が小さい私には、これができなかった。

ある時、バケツに半分ほど釣った。それを母親が食事に出した。その時から、エビ類を食べるのが大嫌いになった。さっきまで生きていたものを食べる、ということができなかった。３０歳以降になって、ようやく食べることができるようになったが、それでもエビの仲間は今でも好きではない。

エビガニが、１９５０年代末に農薬の急激な普及で、劇的にいなくなったのが印象深い。

他に遊びと言うと、こま（なぜか、「ごま」といっていた）、凧揚げ、メンコ、びーだま。釘さしといって、地面に向かって釘を打ち込みあい、お互いに相手を追い込んでいく遊びもよくやった。

ほかには、軟式テニスボールまがいのものを手で打ち合う遊びが流行っていた。

近所の同学年生か一年ぐらいの年齢差がある子どもたちと遊んでいた。腕白なガキ大将について遊んでいた。その頃、どちらかというと弱虫の私には、リーダー性はなく、ついていくばかりだった。

遊ぶのは、放課後が多いが、学校から帰ってきて、父親が気づくと、家業を手伝わされるので、見つからないようにしていた。みつかると、刀のようなものさしでよく叩かれた。遊びに行くのも「必死」だった。

小学校時代の流行は、野球だった。周りは、熱狂的な中日ドラゴンズファンばかりであった。とはいっても、グローブやボールをみんなが持っている時代ではない。自分たちで作った。素材は古新聞である。なかには石を入れて作ったものがあったが、危険だった。

野球をするのは空き地だが、一番記憶に残っているのは、「八幡様」とよばれていた近隣の氏神前の広場だった。幅５メートルほどで長さ２０メートルで、横にボールが飛んでファウルになると、木々の中に入り、探すのが大変なので、ファウルはアウトというルールだった。

その広場の横に、養蚕の集荷場の建物があった。そこに卓球台が置かれており、卓球をした記憶もある。

５年生ぐらいになって、父親が珍しく気前よくキャッチャーミットを買ってくれた。当時としては大変珍しかった。今思えば、本格的なものではないが、一応キャッチャーミットではあった。私のポジションは、キャッチャーだった。なぜかというと、やり手がいなかったからだ。

５年生６年生か記憶がはっきりしないが、学校で字対抗の野球の試合があった。私の字は、メンバー人数がそろうかどうかさえあやしい弱小チ―ムだった。くじ運悪く、初戦は強豪チームと当たる。我がチームのピッチャーは仲良しのウーマク君だった。最初から暴投で、ワンバウンドした球が私のオデコにあたった。怒った私は、彼とバッテリー交

代した。なぜか、私の調子はよく、バッタバッタと三振をとった。ただ低めに速い球を投げるだけだった。番狂わせで勝利した。すぐに二試合目で、次も強豪チーム。もう疲れた私にピッチャーは無理だった。

これが、その後３０年ぐらいはやったろうか、野球での最大の出来事だった。

１９．そろばん

小学校時代のお稽古ごと・習い事の機会は、そろばん塾があったぐらいだった。学習塾もなかった。隣の笠松町のそろばん塾から先生が出張して、小学校内でそろばん教室があった。婦人服仕立てが家業の我が家では、そろばんを習っておく必要はあったようだ。そこで、放課後の校内そろばん教室に通った。２年生か３年生かぐらいだった。ほかに習字教室もあったが、記憶が不鮮明だ。これらの授業料がどうなっていたかは記憶にない。同級生のかなりが出席していた。

私は、そろばんを結構得意にしていた。学校のそろばん教室だけでは満足できず、自転車で１０分余りの隣の字公民館で、週１～２回のそろばん塾に通った。３年か４年の時、３級合格したので、郡の大会に出ることになった。大人も混ざっての大会だった。

そこでの読み上げ算競技は、間違えたら脱落していく形だったが、何十人もの参加者のなかで、なぜか、私はベスト３に残っていた。その後は緊張のあまり指は動かなく、３位になった。しかし、小学校４年生が大人も混じっての競技で、その成績を収めたので驚かれたようだ。

そこで、村のそろばん塾ではなく、隣町の笠松にある本校に通うように言われた。そのころの笠松は、私にとって映画館もある大きな町というイメージで、田舎の柳津村から通うだけで、大変なことだった。今思えば、わずか２～３キロぐらいの距離だが。

町のそろばん学校の本校に通う最初の日、私は緊張の余り授業中おもらしをしてしまった。そんなことがあり、街の本校通いは、一回でやめた。そろばんは習い続けたが、暗算が苦手で、暗算の代わりに商業計算を選択して２級をとった。当時、２級は珍しかった。

私には、そろばんは苦い思い出の方が強い。

２０．家業手伝い

私の実家は、先に書いたように、婦人服仕立て業だった。

客は１０００人以上もいる村内の二つの紡績の女工さんで、村の人口の男女比が大きく変わるほどだったが、彼女たちは、中卒就職だった。彼女たちは、三交替の仕事の合間に、これまた三部制の定時制高校に通った。そして、盆と正月に帰郷するが、その際に仕立てた洋服を着ていくのだった。

紡績業が盛んだった１９５０年代から６０年代にかけて、家業も繁忙を極めた。そこで、私の家業手伝いも忙しかった。学校から帰って、２時間ぐらい手伝うことが多かった。寸法を測る際の記帳、仕付け糸取り、そして、縫製を手伝ってもらっていた近隣の家までの自転車での運搬の仕事などなど。冬の寒い日は辛かった。片道３０分余り、耐えながら運んだ。岐阜や尾張一宮の生地問屋までの電車に乗っての用足しもあった。

仕立て業のルーティーンを紹介しよう。客からの注文。盆正月に帰省する際に着用することが多いので、その前１ヶ月ほどがピークとなる。客は、店に備え付けの女性服装関連誌である「装苑」「若い女性」などから、希望のデザインを選ぶ。店に置いてある生地から希望の布地を選ぶ。採寸は母が担当し、私が記録係だった。

注文を受けて裁断するのは、父の担当だった。縫製は生家での数人（親戚が多かったが、住み込みの人もいた）だけでは足らず、裁断した布地を各地に運んでやってもらった。これまた親戚が多かったのだが、そこへの運搬が私の仕事だった。７月後半～８月前半、１２月は毎日といってよいほど、運んだ。片道１０キロほどの所が多かったが、暑い季節と寒い季節で大変だった。

我が家は、稲作を中心にした兼業農家でもあった。田植え、草取り、稲刈り時期は忙しかった。記憶に残る嫌な作業は、下肥の運搬と散布、７～８月の田の雑草抜きだった。暑いうえに、稗と稲の区別が難しく苦労した。田植え期には、学校の農繁期休暇もあった。中学生期になると、一日一反の稲刈りができるまでになった。それが当時の一人前の基準の一つだった。

家業手伝いの痕跡が、私の手に残っている。左手の小指に稲刈りでの鎌による失敗での傷跡がある。薬指の爪の根元には、ミシンで縫ってしまった跡がある。これは手伝いではなくて、幼児期のいたずらの痕跡だが。

実家にいた中学時代までは、家業手伝いは結構多かった。高校時代に家を出てそれは終わった。

この時代、こんな手伝いをすることは、近隣の誰もがやっていたことだった。

２１．音楽

家族生活のなかに音楽の蔭は薄い。父の浪花節を聞くぐらいだった。廣澤虎三の国定忠治を語りながら、仕事をしていた。母や姉については記憶がない。歌っているのも聞いたことがない。姉は、４０代５０代になって絵や皮工芸で花開く。母は、６０代以降書道・俳句が得意になったが。

地域に伝わる民謡は「おばば」だけで、祭りの時に聞くだけだった。記憶にあるのは、２年生の時、クラスメイトが「お富さん」を歌って、担任に厳しく叱られたことだ。

５年生のころか、熱心な若い教師が学校に音楽クラブを作るというので、入部をすすめられた。多少の迷いがあった。というのは、「音楽は女がやるもので、男がやるものではない」という風潮が周辺に強かったからだ。入部して、男の同級生からからかわれた記憶がある。だから、部員の男女比は、１対５ぐらいだったろうか。

入部したら、たしか当時子ども会（児童会）役員をしていたこともあって、音楽部長にさせられた。

※　通常児童会というが、私が通った小学校では、子ども会といっていた。

音楽部は創設した担当先生の指示通りの活動だったように覚えている。部長になったことは、よりいっそう男の同級生からからかわれる要因をつくったし、後に書くが、女の子にいじめられる遠因にもなったようだ。

熱心な先生だったので、部活動も大変だった。瀧廉太郎作曲の「春のうららの隅田川」で始まる「花」の混成二部合唱をした。当たり前のように、男は低音部だ。必死だった。いまでも、この低音部の一部は脳裏に残っている。そして、うまくいかなかったことも。そして、それが、私の低音部トラウマのスタートだった。２０１０年ごろの中山合唱団でもトラウマが「復活」してきた。

楽器演奏もした。当時皆が身近に演奏できるのは、６穴のリコーダーとハーモニカぐらいしかない時代だった。私はハーモニカをした。村の公民館での発表会で、女子１人の木琴と、私のハーモニカで、「森の水車」の二重奏をした。スピーディ・リズミカルな曲で、なかなか大変だったが、合唱とは対照的にこの方はなんとかなった。

ハーモニカに少々はまった。親に頼んで、普通のものより、音が大きくてよい「宮田響鳴ハーモニカ」というのを買ってもらい、ハーモニカ独特の楽譜を使ったりもした。

ずっと後の話になるが、他に演奏に挑戦したのはアコーディオンだったが、初歩的なところで終わった。従兄にアコーディオンのプロがいたので、少し教えてもらい、２０才前後に多少練習したが、伴奏するレベルには至らなかった。その従兄はＮＨＫのど自慢の伴奏もしていたし、カラオケ教室のような長く音楽教室を開いていた。そして、別の従弟の子どもは、プロの弦楽器奏者として、外国のオーケストラに属して活動をしている。

私の音楽とは「月とすっぽん」の違いであり、そんな血筋を私の中に見つけるのは不可能だ。そして、楽器というと、音程はずれを気にしなくていい鍵盤楽器を選んだのだった。

２２．写生・版画　学級委員　子ども郵便局

４年生の時の話。毎年ある写生大会で、学校近くの風景を描くことになった。私は家々を描いた。屋根瓦がすべて灰色でつまらなくなって、家ごとに屋根の色を変えて楽しみ出した。

全員のものが壁に貼られた。後で伝え聞いた話だ。例の音楽熱心教師と、私のクラス担任との間に、私の絵をめぐって論争がおこったとのこと。リアリズムでないので駄目、カラフルで面白いという論争だった、とのこと。私は灰色ばかりでつまらなくなって、カラフルにしたのだが。

この時の担任教師は楽しい教師で、いろいろとエピソードがあった。誰かが掃除をさぼったので、「連帯責任」ということで、クラス全員「運動場百周走れ」と命令された。一万五千メートルだ。全員が走りきった記憶がある。私はへ

そ曲がりで、コースではなく、大周りになる運動場のヘリを走った。三倍の距離になるが、一〇〇周にならないうちに、ＯＫということになった。その後、教室掃除。足ががくがくだった。

「さんまは全身三口で食べる」「ミカンは皮ごと一口で食べる」なども覚えている。

当時の小学校としては珍しくプールが作られた。担任教師は元国体水泳選手。指導は単純。ともかくプールのなかにぶちこむ。一番覚えが悪かった私でもすぐに２５メートル泳いでいた。冬の体育の時間は、いつも学校周辺のマラソンだった。雪の中を走った記憶が残っている。

ともかく豪放磊落な担任だった。

五，六年と連続して担任だった教師は、画家でもあり、美術指導熱心だった。大判の板に版画を彫らせた。当時の岐阜県では版画指導がはやっていた。私は教室掃除光景を彫って、朝日新聞主催の第一回学童版画展で入賞し、作品が冊子に印刷されたことを覚えている。

運動場の隅に窯を作り、陶芸をやったことも覚えている。当時としては珍しかった、と思う。焼き始めると、誰かが当番で火を見ている必要があったが、授業に出なくてよかったので、この当番は人気があった。

学級役員のことを学級委員とよんでいたが、選挙での選出ではなくて、教師の任命だった。ということで、私は学級委員、字単位の子ども会の会長をよくやらされた。６年になると、通常は児童会と呼ばれる組織が、「子ども会」と呼ばれ、子ども会長をさせられた。これらは、戦前型の「級長」職に近く、戦後民主主義の「香り」を感じるものではなかった記憶である。学級会で何かを話し合って決めたことに取り組むといった記憶は残っていない。

変わった体験は、子ども郵便局長をしたことである。そろばんができるというので、任命されたという記憶である。郵政省主導で、各地の小学校に郵便局が設置され、地元の正式の郵便局とつながって、貯金業務を、週一回行った。子どもたちが貯金する現金を受け取って，記帳し、集めた金を地元郵便局に届ける業務だった。その額が大変多くて、大臣表彰された。その賞品にたくさんの文房具をもらったことを覚えている。貯金を奨励する宣伝効果をねらう政策に基づくものだろう。

２３．学校風景いろいろ　賞状　運動会　学芸会　米軍ヘリ

なんでも賞状を与えるのが、当時の学校風潮だった。たとえば、皆勤賞は学期ごとにあるだけでなく、夏休みラジオ体操１０日間皆勤というのもあった。学級委員の任命状も賞状のようなものだった。写生大会表彰状、運動会表彰状と、なんでも賞状だった。だから、小学校のうちに１００枚ぐらいはもらったかな。低学年の時は嬉しいものだが、高学年になると冷めてくる。

あのころは、子どもだけでなく大人も賞状をもらって喜んでいた。あの頃だけでなく、最近でもそんなところが多い。父も、自宅にいくつかの賞状を額に入れて飾っていた。

教室の机は二人掛けで、男女がペアになって座るものだった。これなどは、戦後の風潮を示す一つだろう。

給食はまだなく、弁当を持って来るのだった。冬場は冷たくなるので、弁当箱を保温する装置があり、それを使った。冬場には、教室にストーブが置かれたはずだが、記憶が薄い。

小学校の途中から、脱脂粉乳をお湯で溶かした飲み物が配られた。後々には味が悪いという評判になったが、当時の私たちは美味しいと言って飲んでいた。「コッペパン」が配られることもあった。今売られている長く丸いパンに似ていた。

学校行事では、運動会と学芸会が人気で、家族が見に来た。運動会では、競走、団体競技、フォークダンスなどがあった。私は、単純な１００メートル走では遅かった。不思議なことに、同じメンバーで走る障害物競争、パン食い競争などでは、障害物やパンがあるところまでもトップで走り、１位になることが多かった。

学芸会は、なんといっても学級でやる演劇？が人気だった。なぜか、私は主役をすることが多かった。３年の時は、孤独な鳥の役で、その時の BGM を聞くと、今でもなぜか泣けてくる。「白鳥の湖」だったような記憶だ。５年か６年の時は、主役ではなく大人役だった。当時から「老け役」だったのだ。（写真　左端が私）

ある時、運動場に米軍のヘリコプターが着陸したことがあった。米兵と教師が英語を使って話しているのを見て驚いた。その時初めて、外国人を見た。

運動場のもう一つの思い出。ボール遊びをしていた時、上を向いた途端に落ちてきたボールが、私の右眼にぶつかった。その時以来、ぶつかった傷が残り、いまでも気づくことがある。それ以来、右目の視力が、左目より悪いが、白内障手術の後は治っている。

２４．映画　テレビ　地図　ケンカ

当時の娯楽の一つは映画だった。しかし、映画館は隣町にしかなかったので、大人に連れていってもらうしかなかった。総計で２～３回ぐらいしかなかったろう。運動場（小学校と中学校に挟まれて運動場があった）に大きな白布を張って幕にし、そこに映し出される映画を見た記憶がある。幕の前からも後ろからもみられた記憶だ。何を見たか記憶にはない。

当時はラジオ全盛期だった。父が、野球中継を聞きながら仕事をしていたので、それを私も聞いていた。もっぱら中日ドラゴンズの試合中継だ。他に、「笛吹童子」だったと思うが、連続ドラマが記憶に残っている。
テレビは、近くの紡績の事務所にあり、時間を限って、近隣の子どもたちにも開放していた。夕方５～６時になると、連れ立ってでかけた。相撲（千代山　栃錦　若乃花　羽島山が活躍した時代）、プロレス（力道山の時代）、月光仮面（子ども向けドラマ）を楽しんだ。自宅にテレビが入るのは、６０年代に入ってからのことで、記憶には残っていない。
漫画は、裕福な家の子どもが買ってもらった少年雑誌を回し読みした。人気は赤胴鈴之助などだ。
新聞は、小学校高学年から時々目にしていた記憶だが、一番記憶に残っているのは天気図だ。

小学生時代に夢中になったこととして地図があった。日本地図世界地図をいつも見ていて、地形を紙で切り抜くこともしていた。３０歳代になっても、指定されて地域の地図を切り抜くことができた。いわば地図人間だった。加えて、ラジオの気象情報を聴いて、天気図を作ることもしていた。
地図好き、気象情報好きは、今もなお続いている。

つかみあいのケンカの記憶。一回だけ、教室の床で激しくやったことがある。ケンカしそうにない私がやったものだから、クラスメイトは驚いて見守っていた。相手が誰だか覚えていないが、彼もびっくりしたようだ。

JRC（青少年赤十字友の会）というのが、クラブ活動のようにして存在していたが、日常活動の記憶は残っていない。だが、たしか６年の時に、各学校から子どもを集めて、多治見の寺院で宿泊学習のようなものがあった。そこで、はじめて他校の友達ができた記憶だ。
修学旅行は、京都奈良の神社仏閣めぐりだったが、記憶にはほとんど残っていない。

２５．いじめられた私

ケンカもできない私だったが、小学校５年か６年の時、クラスメイトの女の子に、私はいじめられていた。ほとんどのことは忘れてしまった。もしかすると、記憶の外に追い出してしまったのかもしれない。
一つだけ覚えている。運動会かなにかの予行練習でオクラホマミキサーなどのフォークダンスの際、ペアになった女の子と手をつなぐように、先生から厳しく指導されていたので、手を握ったら、その女の子から叩かれたことだ。
この事件を含めていろいろあったはずだが、すべて私の胸の内に取っておいて、誰にも話していなかった。

その事件から４０年ほどたち、５０代に入ってからのことだが、小学校の同級生から電話があった。「同窓会をするから、おいで。〇〇さんもくるから」。

どっきりだ。〇〇さんは、私をいじめた人。しかも、電話した人は、私が〇〇さんにいじめられていたのを知っていて、わざわざ再会の場を作ってくれたのだった。

私以外の同級生は全員が地元の同じ中学校に進学した。私一人だけ、名古屋の私立中学校に移った。小学校の同窓会イコール中学校の同窓会であり、私以外の人たちは、しばしば同窓会を開いて集まっていたようだった。事実上、中学校から地元を離れた私は、同窓会に出たことがなかった。

その電話がきっかけで初めて同窓会に出た。〇〇さんも含めて、４０年ぶりの方々が多かった。そこで初めてわかった。同級生たちはみんな、私が〇〇さんにいじめられていたことを知っていたのだった。私は「誰も知らない」と思っていたのに。

そして、〇〇さんが小さく見えた。４０年前小学生だった時、彼女は私より背が高かった。しかし再会した時には、私の背の方が高くなっていた。

その日は、４０年前の「いじめ」のことには、ほとんど触れないで歓談した。まさに「時が解決していた」。

当時、純農村に大規模の紡績工場ができ、そこに勤める社員家族が、『社宅』に住んでいたが、そこだけが『都会』で、農村との文化的生活的断絶があり、『社宅の子』は地元の子に「田舎っぺ」的対応をしており、地元の子は、『社宅の子』に近づきがたい距離を感じていた。〇〇さんも『社宅の子』だった。そんなことも背景にあった「いじめ」のように思う。

とはいっても、そのことで苦しんだ私は、記憶の多くを封印してしまったので、何があったのか、ほんの少ししか覚えていない。女性に出会うと「恐れ」を感じてしまうという、その後何年も続いた私の反応の一因も、ここにあるように推理している。

思い出せば、弱虫だった私は、それ以前から「いじめられっ子」的な性格をもっていたようだ。

２６．そのころの家族

父は家族の中では無口であったが、お客さんとは話し上手で人気があり、客商売をうまくやっていた。また、地域の会合などでも活躍し、晩年は地域の小売店組織の代表を務めたりしていた。世話好きな人で、悩み事対処の手伝いもしていたようだ。母は、おしゃべり好きであったが、「自慢話」などが多くて避けられがちで、沢山の話仲間を作っていたわけではなかったようだ。

性格的には、対照的ですらあったし、「すれちがう」雰囲気もあった。それでも、二人で結婚話をまとめ、仲人を務めたりもしていた。

意見が違う時は、家父長制時代の名残が続くころで、最後は父が決断をしていて、母は、父への愚痴を重ねていた。父は涙もろかった。そんな父を見て、母は「男らしくない」と愚痴を言い、姉の早逝の際も「私は涙を出さない」と語った。

その姉は、私とは二つ違いで、戦争中に生まれた。私との関係は、とても薄く、記憶に残ることも少ない。それでも、いくつか書こう。

身長が低く、成人してからの私との身長差は４０㎝近かった。原因は不明で、両親はそのことが不憫でたまらなかったようだった。しかし、戦後の状況の中で、手の打ちようがなかったようだ。

頭がよくて、地域のエリート高校に進学した。自転車で通学していた。高卒で、家業をひきつぐべく家業に励み始めた。美術関係の才能に恵まれており、中年期になると、絵画や皮細工などで旺盛な制作をしていた。

身長のこともあるが、不憫でたまらない両親は「箱入り娘」のようにしていた。１９６０年代末に、婿になった義兄と結婚し、終生を実家で過ごした。

幼児期に、姉とケンカとなって「ばりかかれて」以降、姉とはせいぜい口喧嘩ぐらいだった。いっしょに遊んだ記憶は思い出せないし、会話の記憶もゼロに近い。

兄弟姉妹数が多い当時としては珍しく、私たちは二人姉弟だったのだが。

このように家族四人の生活だったが、夕方時間には来客が多く、父母はその対応に追われ、一家そろって食事をして団らんすることは少なかった。時には夕食時間が遅くまでずれ込むこともあった。結果的に、子どもだけが先に食べることも多かったという記憶だ。

例外はある。父親が岐阜市への商品仕入れの帰途に小間切れ牛肉を買ってきて、すき焼きをすることがあった。その時の印象が強烈で、「一家団欒」願望が私の中に強く残った。

当時、その際の牛肉を食べる以外には鶏肉を時々食べたが、おおよそ菜食だった。豚肉は、中学入学まで食べた記憶がない。

２７．高度経済成長へと時代が激変するなかでの私周辺

１９５０年代初めまで、道も田んぼのあぜ道も曲がりくねっていたが、そのうち「耕地整理」があちこちで行われ、農道を含めて、道路が碁盤の目のようになった。当時、実家のある集落の周辺から見えるのは、田んぼばかりで視界を遮るものがなく、どこからでも伊吹山や木曽川の堤防が見える景観だった。

１９５０年代半ばに、我が家の前の道路は、当時の田舎にしては珍しく、コンクリート舗装された。アスファルト舗装が普及する前のことだ。その道路を一日に何千台もの砂利運搬トラックが通るようになる。長良川や揖斐川などから、名古屋周辺の土木建設工事用に運ぶのだった。のどかな田舎だったが、交通事故が多発する危険な時代に移っていた。コンクリート舗装も、トラック重量に耐えられず、すぐに亀裂が走った。

トラックの大量の排気ガスもすごかった。それが私の気管支を弱めた最初の原因だろう。

同じころ、子どもの遊び場だった田んぼに、立ち入り禁止の赤札が立つようになった。強力な農薬の散布のためだった。あちこちにいたザリガニが消えるなど、世の中と同様、私の生まれ故郷も激変していく。

社会の激動は、ちょうど私の人生の激動の開始でもあった。家業の婦人服仕立て業と農業を継ぐ以外のイメージがなかった私も、それ以外の道を歩むことになり、私の生活も激変する。それは、私自身の希望から始まったのではなく、外から飛び込んできた。

５０年代終わりに近づくころ、繊維景気に陰りが出てきて、地域の繊維産業に黄信号が灯り始める。それに代わるようにして、高度経済成長期が始まる。若い人々の生き方として、農業をはじめとする家業を継承するのではなく、被雇用者となり、農村から都市への大移動が始まる。我が家近辺でも、高校進学率が五〇％を越える。そして、近隣の紡績工場に務める女工さんたちは、定時制高校に通えるという条件で勤めていた。それにも変化があり、１９６０年代後半になると、都市近郊の紡績では短大に通えるという条件へと移り始める。

私個人も、こうした時代的流れの中で生きてきた。小学校高学年までは、将来どんな仕事につくかには選択があるというイメージを持てる時ではなかった。そろばん学校に通ったので、将来は家業の仕立屋をつぐのだろう、そして兼業の農業をつぐのだろう、といったことが、どこか頭の片隅にあったのだろう。将来の職業などということを考えることが広がっていなかった時代だといった方がいいのかもしれない。そして、仕立屋にしても農業にしても、すでに私自身が子どもながら労働力の一端を担い始めていた。親も、そんなイメージだったろう。

近所の子どもも親戚の子どもたちも大半がそうだった。従兄妹たちも、高校進学するのが増えていったが、高卒後農業をはじめとする家業継承以外の事例はまだなかった。例外は、薬局に嫁いだ伯母の息子が大学薬学部に進学したことだけだった。

小学校６年の正月まではそうだった。それが突然大変化となり、変化に富んだ私の人生が始まる。

Ⅱ　中学高校時代

２８．私立中学受験・入学

１９５９年1月のある日の夕刊に、私立中学の受験日程一覧が書かれた記事を見た。ほとんどが名古屋にある学校だった。そこで、父に「中学には、私立があるのか」と尋ねる。その時、私立中学の存在を初めて知ったのだ。父は、「受けてみるか」という。村のなかに一人だけＡ中学に通学していることを知っていた父が私に問い返す。面白そうと感じた私は、「受けてみたい」と応える。

私立中学がどのようなもので、私立中学に通うこと、卒業後のことなどのイメージは全くもっていず、興味本位で、そう応えた私。親が、私立中学校受験問題集一冊を買ってくる。そこには、全国にある沢山の学校の受験問題が並んでいる。その問題を解くことで、一か月足らずの「受験勉強」を始めた。

親は、周囲には内緒にして、担任教師に願書記入を頼み、願書を提出。提出先は、すでに村から通っている生徒がいるＡ中学。だから、合否のイメージもなしに受験。

そしたら、合格。結果的に通うことになる。おそらく、親はほぼ１００％大学進学のその学校に通うことの進路上の意味を了解していたはずだが、私は何もわかっていない。

入学後の一学期末のテスト成績がクラスで一番になり、それをみて、中学担任教師は、「この成績ならＢ大学にいけるよ」という。家に帰って、そのことを父に話しながら「俺は大学に行ってもいいの」と尋ねる。父は「いい」という。その時、初めて大学進学するのだという進路選択を意識する。

仕立屋＆農業という家業継承ではなくて、高校大学進学を経由して、別の進路を歩むということが、その時、事実上決定したわけだ。

その１９５９年、それは近隣での高校進学率が５０％を超えた年だが、大学進学率はまだ１０％台のころだ。だから、身近な周囲を見回しても、大学進学のイメージは、とても貧弱だった。

７，８年後、私が２０歳になるころ、姉が婿を取り、「家業を継がせるから、あなたは家にでることになるが、それでよいか」という親からの問いかけがあり、私は喜んでイエスと応えたが、それが、私が実家そして家業から離れる最終的な確認となった。

２９．遠距離通学など生活の激変

自分からよく考えた結果というよりも、自分以外のところからやってきた人生選択というのが、中学１年段階の私だった。それは、高度経済成長、離農、農村から都市への移動という社会変動の流れに、私が乗り、「かけのぼり」人生を始める時点の物語だ。

Ａ中学は、名古屋市内にあり、愛知県だけでなく岐阜県三重県からの通学者がいる男子の６年制私立中学高校だった。卒業生のほぼ１００％が大学進学だった。そのことを私が知り認識したのは、入学後かなり時間を経てからだった。

同じ中学生の同級生たちの多くは、この学校に入るために、塾通いをして激しい受験学習をしていた。そして入学後は、入学できたことにほっとしていた。そんな前歴のない私はというと、中学教師たちの受験勉強への激を飛ばす声に忠実に学習をしていた。他の生徒が一息入れている時に、私は、教師のいいなりにがむしゃらに学習したから、クラスで一番の成績を得たようなものだ。

だが、人生の大変化は、私にさまざまな問題を突き付ける。

一つは、今述べてきたような人生上の大変化であり、もう一つは、岐阜の農村地帯の「田舎」から、名古屋の大都市の世界のなかに入り込んだ、生活・文化上の大変化だ。そしてそれらは身体的変化を伴う。それらについて書いていこう。

まず遠距離通学。岐阜から名古屋の学校まで、徒歩→柳津駅→電車（名鉄竹鼻線）→笠松駅→電車（名鉄本線）→名古屋駅→バス→徒歩という経路で、１時間３０分かかった。

朝６時３０分ごろの電車に乗るのだが、冬はまだ暗い。単線の電車の線路の上が通学路だったので、遅れそうになっても、電車の前でプラットホームによじ登り、電車に乗る。支線電車に自動ドアがない時代だ。電車の運転手が線路を歩いてくる私に気づいているので、一度も乗り遅れたことはない。まだ悠長な時代だ。大正時代の木造電車が残っていた。１０分後には支線終点に着き、本線に乗り換える。通勤通学の満員電車で、座席に座ることはありえない。

名古屋駅でバスに乗り換えるが、すでにそのころは、巨大ビルで名古屋駅周辺は埋め尽くされている。あたり一面水田ばかりの田舎の農村から大都市に出てきたことを実感する。中学入学以前に名古屋に来たことは、東山動物園にきたこと、相撲の準本場所があった金山体育館にきたこと、中日球場で野球観戦したことぐらいの記憶だ。

３０．生活激変へのとまどいと身体症状

中学入学後、クラスメイトとの付き合いが始まるが、言葉が違う。岐阜言葉と名古屋言葉は、距離の違い以上の違いがある。名古屋言葉に慣れるために、岐阜言葉がでないように極力注意する。自分を出さないようにする訓練だった。ある時、友達が、「耳の後ろに垢がたまっているよ。耳の後ろを洗わないのか」といわれた。とても恥ずかしい思いをした。それからは、いままで洗ったことがない耳の裏を洗うようになった。

友達の家に遊びに行ったこともあるが、スパゲッティを出されて、食べ方がわからなくて困ってしまった体験もある。豚肉を初めて食べたのも、そのころだ。爪先は黒いものだと思っていたが、きちんと管理していればそんなことはないことも知った。あかぎれとかしもやけは当たり前だと思っていたが、そんな人はいない。「岐阜の田舎者」「岐阜の山猿」といわれることをとても警戒していた。

それまでの農村生活とは全く異なる都市生活だったのだ。だから、日々のごく普通の生活での気づかいは激しかったと思う。

入学して１～２か月で、激しい瞬きをするようになった。母親が近くの病院に連れて行った。医師は、顔面神経痛と診断する。いまどきなら、チックだということが、素人でもわかるような症状だが、当時は医師も含めてだれもが見たことがない症状だったのだ。1分間に１００回近く瞬いていた。この症状は、その後２０年間ほどつき合うことになる。沖縄生活をはじめて、やっと軽減し始め、３０年後には消えていた。

そのころは吃音（どもり）も伴っていた。これも、チック同様、長い付き合いを経て消失していた。

中学一年の冬になるころ、気管支炎の症状もではじめた。田舎生活者が都市生活にかかわり始めて、汚染空気に接触し始めたことが一因だろうと思う。精神的なストレスもあると推理している。その後毎年、季節替わりに痰・咳を伴って高熱を出し、数日休むという症状とは、５０年近くつき合うことになる。

３１．中学生時代　授業　部活

学校の授業は、中学時代から大学受験に焦点化されていたと言っていいだろう。中三の早い時期に中学教科書を終え、高一の教科書での授業が始まる。高二で、高校教科書はすべて終え、高三は受験対策授業ばかりだ。受験に関係のない表現系や実技系の授業は縮小される。理科の実験もほとんど記憶にない。理科については、中学ではあった地学や生物も、高校ではなくなり、物理と化学に絞られた。

小学生時代からあった「オンチ」傾向は、中学に入って修正されるどころか拡大した。高校では音楽授業はなかった。そんな中で、中学時代に授業で記憶に残るのは、地学だった。名物先生で、実物を見せながらの化石の話は人気があった。刺激を受けて、私も化石取りに山の中に出かけたこともあった。

受験にかかわるというので、漢文が早めにあり、中学時代には、すでに大学受験レベルにまで進んでいた。大学院生になった後に歴史研究で、近世や近代初期の文書を読む際に役立った。

そんな学校生活だったが、気分転換になったのは、野球部に入ったことだった。3時から5時近くまでの短時間練習だったが、電車時刻表の都合で、私は4時30分には帰宅の途についた。

野球は、小学校の時に楽しんだ流れで選んだのだった。1年から2年に上がるころ、レギュラー候補を選ぶなかで、ポジションはセカンドかキャッチャーかということになった。しかし、そのころ膝関節痛に悩まされ始めた。ということで、退部しなくてはならなくなった。そのうち、歩くことさえ痛みを伴ったので、体育授業も見学するようになった。

それも医者にいったが、関節リュウマチということで当時売り出され始めたアリナミンの大量投与とかカルシウム注射を受けた。膝関節痛については、原因不明のままだった。後に、私の息子も中学時代にそうしたことがあったので、成長期によくあるタイプのものかと推理している。ずっと後、知人の整形外科医に、それはリュウマチではないと教えられた。

寒い時期に痛みがひどくなったが、年とともに徐々に緩和していく。沖縄生活を始めて大幅緩和するが、５０歳ぐらいまでつきあった症状だ。

こんな風に病気とつきあう人生を長く続けたのだが、そのスタートの多くは、中学時代だった。

膝関節痛が少し緩和した中学２年生の後半からは、足への負担が少ない弓道部に入部する。しかし、しばらくして生徒会副会長になったために、弓道部は、一か月半ぐらいの活動にとどまった。でも、基本の流れは学んだので、今でもテレビなどで見ると、基本姿勢を思い出すことができる。

３２．伊勢湾台風

中一だった１９５９年９月、大型台風が襲う。伊勢湾台風だ。名古屋近辺では、何千もの人が亡くなった歴史に残る大災害だった。岐阜も大災害で、通学電車が止まり、２～３日間通学できなかった。

台風が近づくなか、木造の弱々しい我が家が倒壊しないように、家族で力を合わせて対応した。畳をすべてあげて、床下に風が吹き込まないようにする。稲を干す「はさ」の木材を支点にして、肥桶に水を入れて、家を縄でひっぱった。夜中に２階の窓が風で吹き飛びそうになったのを、父母が押さえていた。停電で真っ暗なので、私が自転車をこいでランプに明かりをつけ、その光を姉が鏡で反射させて、父母の作業を照らした。随分長い時間、私は自転車をこいでいた。

台風の眼からそんなに離れていないところに我が家があり、風速４０ｍ近い風を受けたようだ。翌朝、風が収まって外に出ると、近所の大木が折れて飛ばされ、我が家の寸前で落下していた。あと数メートルも飛んでくれば、我が家は倒壊していただろう。

経験したことのない風だった。もっとも、沖縄生活を始めて以降、それくらいの風にはしばしば出会ったが。

輪中地帯で、歴史的には浸水には「慣れて」いる地域だが、私が生まれた以降は減っていた。それでも、中学時代だったか、床下浸水があり、家のなかを泥水や汚水が流れていくのを体験した。その後、私が岐阜を離れて以降も、近くでは水害の体験が、何度かあるようだ。

それに比べると、伊勢湾台風は、タイプの違う大災害だった。他に災害というと地震があり、祖父が濃尾震災で頭に傷を作ったことは、以前に書いた。

自然にかかわって書くと、雪は年に数回積もった。一度数十センチも積もり、竹でスキーを作って、坂を滑ったり、秋田あたりで有名な「かまくら」を作ったりした。伊吹山や関ケ原あたりから、日本海からの寒風が吹きこみ、あたり一帯に寒気が吹き込む地形的な関係で、名古屋あたりと比べて、太平洋側にありながら、寒さが強い地域だった。

３３．生徒会長

中学時代のエピソードの一つに、生徒会長になったことがある。そうした役割に就く流れが周囲で強くなり、それを受けて、リーダー的役割を取ろうとする行動が私の中で大きくなっていく。

多くの学校で児童会といっていたものが、私の小学校では「子ども会」と呼ばれていたが、その子ども会長をした。他にも、子ども郵便局長、音楽部長、地域組織の長、学級委員などを、小学校高学年の時に経験した。

こうしたものには、大人の世界でいう「はく」をつける、肩書をつけるといった類に似ている。その証拠品として賞状形式の任命状がある。生徒が選出したから、生徒の総意名ないしは選挙管理委員会名での「当選証書」が当然だろうが、そうした任命状は校長名なのだ。そこには、「模範生」としてのふるまいを求めることが示唆されている。こうしたトップダウン式のものは、人々の意思を代表するという民主主義的要素が弱い。あるいは、人々を指導する指導者としての意味も薄い。戦後１０年ほど経った時期なのだが、戦前的なものが残っていたのだ。今はどうであろうか。

各地の小学校から集まってくる中学になって、リーダー的役割をとることのイメージはなかった。

しかし、それまでとは少し異なる形が存在していた。受験専門校の性格が色濃い学校であったので、学業成績による秩序、今どきの言葉でいうと、偏差値秩序が強力に存在し、そのことが教師にも生徒の間にも、成績優秀者をリーダーに推す空気を強力につくりだしていた。成績序列は半ば公然たるものだった。ということで、その流れに私は乗っていく。

中学校２年の時、生徒会役員は３年生がやるものという慣行を破って、副会長に立候補した。数名立候補した３年生の票が割れて、唯一の２年生立候補者の私が当選した。その流れで、３年になった時には生徒会長になっていた。

といっても、目立った政策・方針・公約、そして活動などがあったわけではない。生徒会長としてやったこともよくは覚えていない。

それでも、一緒に役員をした友だちの中で、その後も友人関係を保った人がいた。関係は高校大学だけでなく、６０歳代になるまで続いた。

こんな「模範生」「成績優秀者」型「リーダー」のイメージを変えるのは、高校２年の後半からだった。社会情勢の大きな変化と並行していたようだ。それは後で詳しく書こう。

３４．友だちつくり

生徒会役員よりも、私の記憶にあるのは、友達欲しさでいろいろとさまよったことである。思春期のさまよいというものだろう。

田舎から大都市の学校に入ったものだから、入学前からの知り合いはゼロだ。だから、必死の思いで、友達つくりをした。その友達の家を訪問したら、家事手伝いの方が玄関に迎えに出てこられて驚いた。食事に出されたスパゲッティは、食べるどころか出会うのが初めてだった。世界が違うという印象だった。そんなことばかり覚えている。

友だちの家に遊びにいくといっても、電車に乗って１～２時間かけなくてはならなかった。小学生時代からの近隣の友達との関係は、通学校が異なって、出会うことさえ激減した。

毎朝同じ電車に別の駅から乗る女子中学校の生徒に、ほのかな思いを寄せたのが、初恋めいたものだ。といっても、声をかけたわけではない。それだけのことだ。男子校生活が長くなる中で、知っている女性は限りなくゼロとなり、中学３年生ごろには、狭い道路で女性とすれ違うだけでポッとなる状態になっていた。

学年が進んでいくと、それなりに友達ができ始めた。そのきっかけには、学校主催宿泊行事があった。水練会（１年、３年の時は助手として参加）、修学旅行（３年、四国）、「山上の家」（仏教関連施設での宿泊学習）などがあった。

そんなきっかけのなかで、すこしずつ友達が増えていく。中学３年の頃だと思うが、友人たちと３人での京都奈良の仏像めぐりをした。そういうことに詳しく、宗教研究会というクラブをたちあげた人物が中心だった。その時は、友達関係も深まったが、仏像の世界にいっきに引き込まれた。その後大人になるまで、たびたび仏像神社寺院めぐりを繰り返す。

中学生向けの雑誌にペンフレンド募集欄があった。そこに登録をしたら、１００通を越すほどのペンフレンド希望の手紙が舞い込んだ。その中の一人とは、数回手紙交換をした。そのうち、手紙が一通も来なくなった。母親がすべて処分してしまったのだ。それが、母親との距離ができ始めるきっかけにもなった。

同様にして、海外とのペンフレンド交換にも挑戦した。カナダの女子中学生だったが、写真を同封していたので、私も送ったが、それ以降、手紙はこなかった。私の通学する中学は丸坊主だったので、その丸坊主写真が嫌われたのだろうと、推理した。英語が英語になっていなかったのかもしれないが。

３５　小説の乱読

中学一年のころだろうが、近くの書店の勧誘があって、父親が筑摩書房版の世界文学全集（約50巻）の定期購入契約をした。月に２冊ぐらい配本されたものを、通学電車のなかで、３年間かけて読み切った。とにかく読むだけだったので、かなりの本が意味をつかめなかった。そんななか、理解できたのは、武者小路実篤、島崎藤村、夏目漱石あたりであった。そこで、それらの作家の新潮文庫版を何冊か自分で買って読んだ。藤村や漱石は、おのおの１０冊ぐらいは読んだだろうか。

最初に「好きな」作家になったのは、実篤だが、甘ったるさを感じて、藤村に乗り換える。印象に残ったのは「夜明け前」だ。後に、小説の舞台となる馬籠・妻籠にも訪問した。強い衝撃を受けたのは、「破戒」だった。社会問題に目を開くきっかけになった。藤村をかなり読んだのは、自分の生き方を探ろうという気持ちがあったからだろう。

生き方ということでいうと、小学生時代に親が買ってくれた本は、何冊もの「偉人伝」だった。生まれ育った地域に根強くあった立身出世主義と結びついていたのだろうか。祖父がいつも語り聞かせてくれたのは、太閤記だったから、立身出世の象徴として秀吉があった。

そんなことをひきついで、藤村のような私小説風の自伝めいたものが理解しやすかったのかもしれない。それでも、「くどさ」めいたものを感じたのか、漱石に乗り換えていった。でも、その世界がわかったのかというと、そうでもなく、ひょうひょうとしたものを感じたのかもしれない。芥川もそうだった。また、堀達雄にひかれて、サナトリウムの世界へのあこがれめいたものさえ抱いた。

それでも、石川啄木・宮沢賢治・小林多喜二の世界は理解可能であり、惹かれるものがあった。

外国文学となると、理解できるものが限られた。カフカなどは、わからなさの極致だった。そんななか、具体的に社会的なものが出てくる、スタインベックとかパール・バックとかが理解できたが、とくにひかれたものがあったわけではない。

とにかく生活習慣としての読書であったので、私の人間形成にどれだけ資したかは疑いのあるところだ。それでも、将来希望として小説家を考えるほどであった。

３６　仏教　水練会

中学高校は浄土宗が経営する学校だった。だが、宗教上の理由なしに入学した私にとっては、入学してみたら浄土宗系であることを知ったという具合だ。他の入学生も宗教が選択理由ではなく、大学受験に有利だということが最大の理由だった。愛知徳川家とのかかわりが深い寺、浄土宗の建中寺が学校の隣にあったが、そこに高校入学したての３ケ月余り下宿したことがある。

法然・浄土宗が中心だが、浄土宗に限らず仏教との関りが多い学校であった。教師のなかには、浄土宗以外の僧侶が結構いた。とはいえ、学校の幹部教員は、ほとんどが浄土宗僧侶であった。のちに、浄土宗本山の幹部になる方も多かった。「月影」をはじめとする浄土宗儀式の歌を学校行事で歌ったり、学校から本山である京都知恩院などに行ったりした。

そんななかで、宗教的雰囲気に、少しは浸っていた。印象に残っているのは、映画「親鸞」だった。そして自力本願か他力本願かといったことにも関心を持ち始めた。また、学校の企画で、諏訪湖の北にある鉢伏山で行われた「山の集い」にも参加した。これは、その後の数限りない「信州通い」の最初だったと思う。

教師宅でもある寺院に訪問懇談し、泊めていただくこともあった。ある禅宗系の名刹の住職をしている教師を訪問したことがあった。お経のレコードを聴かせてもらったことが印象に残っている。黛敏郎作曲のものだった。こんな世界があるのかと驚いた記憶がある。もう一人の教師で浄土宗住職のお寺には宿泊までさせていただいた。その部屋が大相撲名古屋場所で横綱柏戸の宿泊部屋と聞いて驚いた。その後からは、柏戸ファンになった。

こう書いてきたが、深い仏教信者になったというわけではない。親戚一同が、浄土真宗の檀家であったので、生活習慣として、仏教に馴染んでいたことの継続であったといった方がよいだろう。キリスト教を含め、他の宗教との出会いは、ずっと後のことになる。

修学旅行は四国だった。モノクロだが、カメラを買ってもらい、カメラ撮影の記憶が残る。高知では、当時流行り始めた「南国土佐をあとにして」の曲が流れていた記憶だ。

友達つくりが思春期時代の大きなことの一つだったが、少しずつ幅が広がっていく。その一人の自宅がある多治見を訪問したことがあり、その彼は、２０１４年ごろ、沖縄の我が家を訪問してくれた。

夏休みには、一年生対象の水練会があった。三重県の二見ヶ浦の海岸で、泳力に応じた取り組みだった。私は３０００メートルの遠泳に加わった。正確に距離を測っているわけではなく、４５分泳いでいれば、そう認定される。

中三になると、生徒会長をしているということで、水練会の助手に任命された。水泳指導の助手というわけではなかったが、水泳指導の助手の補助もして、遠泳の際に、支援ボートを漕ぐ役目もした。その時の体験で、ボート漕ぎはそれなりの腕前になり、その後、いろいろと役立つエピソードのもとになる。

３７　社会激動　生家周辺の変化　家業を継ぐのではなく、離農し進学就職することへ

私の中学入学は１９５９年、高校進学は１９６２年だったが、そのころは社会激動の時期だった。生家のある岐阜柳津でも商工業の諸施設ができ、新築住宅が立ち並び、一面田んぼのそれまでの風景の中に視界を遮るものができ始める。そして、１９６４年には、新幹線「岐阜羽島駅」が誕生する。

１９６０年代も半ばになるころには、柳津は岐阜・名古屋の近郊地域となり、通勤者の比率が高まっていく。そして、名古屋・岐阜へ通勤する人々を中心に住宅建設がすすむ。また岐阜・岐阜羽島・名古屋・笠松・大垣を結ぶ道路網が整備されていく。私の生家も、岐阜と岐阜羽島を結ぶ道路新設にひっかかって移築する。

３０数名いた従兄弟従姉妹も、私と同年代からは高校進学が普通になり、大学進学するものも増えていく。職業では、１９５０年代までは、農業を中心にした家業を継承するのが普通だったが、勤め人になることへと大変化していく。地元に生まれ育った人が、岐阜や名古屋に務めに出るのが増えていく。それだけでなく、勤め先は名古屋岐阜といった都市地区の人々が、住宅地を求めて移住してくる。名古屋岐阜だけでなく、郊外地域にも大きな工場などが増え、雇用が激増する。東北九州をはじめ全国各地から仕事を求めてくる人が激増する。集団就職の人達が工場の寄宿舎などに住む。しばらくすると、工場周辺で家族を作り、住宅を作る人も増える。十数年後に結婚する恵美子の親戚知人にも沖縄から来てこの地域で生活を始めた人がいる。

そして、７０年代に近づくと一億総中流といわれはじめ、経済的に豊かな生活の登場の中で、生活の激変がすすむ。テレビ、洗濯機、冷蔵庫、自家用車などが象徴的存在だ。

とくに車社会化の進展は著しい。生家の前を通る道路は、少し裏手にある幅２～３メートルの旧道に代わった二車線道路で、１９５０年代半ばにコンクリート舗装された。そこを一日に数千台のトラックが、揖斐川などで採取した砂利を名古屋周辺の土木建設工事現場に運んでいく。しばらくすると、激増する交通量をさばききれずに、バイパス道路が建設される。

１９５０年代までは、一面に広がる田畑を縦横につくられた農道がつないでいた。しかし、道路建設がすすむにつれて、一般道路が縦横に走り、それらを補う農道が走るという光景に変わっていく。

３８　競争原理の典型として点数原理の学校が、若者子どもをおおい始めたころ

前回述べた社会変化を貫く原理として、競争社会化が例外なしの参加を前提に進行し始める。

子ども若者にとって、学校教育は、そうした競争原理の中心土俵となる。日常化するテスト、その頂点にある入学試験の時代に入るなか、管理主義教育という言葉が生まれてきた。愛知は管理主義教育で有名になっていく。管理主義は、厳しい校則などで力づくで生徒を管理するだけでなく、点数・偏差値で生徒を管理していくことを中心的なものとして位置づける。

私の記憶に強く残っているのは、中学入学後の教室の座席指定が、入学試験成績順だったことである。１クラス６７名のすし詰め教室での座席が、競争を促すものになっていた。それに誰かが愚痴をこぼすと、「他の学校では、期末テストの成績順で、クラスが変わるシステムがあるが、それよりはましだ」と言われたそうだ。

そのころの大人たちには、空気のように強い差別感覚が存在していた。男女差別、被差別部落差別、外国人差別などが溢れており、いまでは「差別用語」として禁句になっている言葉が、大人から耳に入ってくるのだった。都市と田舎との間にも差別感覚があったようだ。中学入学後、私が恐れていたのは、「田舎者」と見られることだった。そうした差別感覚には沖縄に対しても存在していた。そのことは、後で書くことになろう。そうした差別感覚には、優生的発想も含まれていた。それにしては、従兄弟従姉妹結婚が多かった。

また、差別感覚と結びついて、立身出世主義発想が、広く存在していた。それもあって、秀吉の「太閤記」がよく語られていたのだろう。立身出世主義が、学校成績を中心に展開するようになったのが、この時期の特徴だろう。親世代のなかには「末は博士か大臣か」という言葉を使う人が多かった。また、「故郷に錦を飾る」という発想もあった。私の親に私の将来として「何になるのを期待するか」と尋ねると、「官員様」という言葉だった。つまり高級官僚だった。

同級生のなかにもそうした空気が強く、成績順で人を見る発想が充満していた。今日いう能力主義が、競争という形で差別を日常化させていたのだ。その中では、自信喪失・劣等感に悩むものを大量に生み出す。

こういう空気の中、私にはまったく知らない世界があった。性の問題である。誰にも教えられなかったことだった。思春期の第二次性徴が現れる時期に、わが身に生じたそれを全く理解できずに、「病気」ではないか、とひそかに悩み続けた。理解できたのは、かなり後になってからだった。

男子だけの中学だったので、女性に出会うのは、通学電車のなかでの他校生徒と家族だけだった。だから、中学から高校２年のはじめまで、女性の友人どころか知人さえいない状況が続いた。ある時、細い道を歩いていたところ、向こうから同世代の女子高生が歩いてきた。恥ずかしくて、なぜか涙が出てきた。女性恐怖症とでもいえるのだろうか。

３９　反抗期・親子分離　高校入学　下宿生活

中学２年生ごろから思春期に特徴的な親との分離志向が芽生え強まっていく。親の過剰な管理監督への拒否反応をし始めたのだ。

連載３４回に書いたが、文通を始めて届いた手紙を、母親が「勉強に差しさわりがあるので、全部処分した」ことがあった。母親による管理監督は強烈で、息子である私のすべてを掌握していないと落ち着かなくなっていた。小学生時代までの「素直な」私が、自分から離れていくにしたがって、力づくで管理しようとする行動が増していく。過保護＝過管理であった。それが、「将来の成功」の可能性期待と結び、他の人への「息子自慢」としてあらわれていく。「息子の成功は自分の成功」となっていく。

こうした過保護＝過管理が、私の親への反抗を拡大していく。文通の手紙処分は、ここに書けるが、書けそうもないことを繰り返し始める。

そんな反抗心は、自立心を高めていく。その実行の重要な一つとして、親元を離れて下宿することだった。中学高校と６年一貫なので、高校入試はなかった。高校もこれまで同様、１時間３０分の電車通学をすることになっていた。電車通学がきついことを口実にして、高校入学に合わせて、下宿することを強く要求した。強い母親だったが、父親まで抑え付けることはできずにいた。父親の OK で、下宿生活が始まった。

親がどこからか紹介された学校のすぐ隣の寺に下宿することになった。そこでは、数人の同じ高校生の下宿者がいた。まかないのおばさんが作るどんぶり飯風の食事が記憶に残っている。そこは巨大な敷地をもつ由緒ある寺であり、その一角に私が通う学校も建てられていた。だから通学時間は数分となった。

ある時、寺の大広間で、百人一首の全国大会があった。まさに競技であり、取った札が数メートル先まで飛んでいき、どちらがとったのか、見学者にはよくわからない光景に驚いた。

他に記憶の残るようなものはなく、印象の薄い日々だった。恐らく、ゆとりができた時間は、中学時代から始まった世界文学全集をはじめとする小説などの読書に費やしただろう。そして、小説を書くこともした。私小説風だった記憶が残っているだけで、現物も残っていないし、どんな内容だったかも、記憶から消えている。

記憶に残るのは、時間のゆとりもでき、体調もよくなってきたので、柔道部に加入した。愛知県内で連続優勝をしている強豪部活であった。高段者の体育教員数名が指導していた伝統部活だった。部員も有段者がずらりと並んでいる。初心者だし、体格も柔道向きではない私だが、強さにあこがれたのだろう。

練習は、毎日１時間３０分余りの短時間だが、中味はみっちりだった。「学業も柔道も」という建前のなか、「学業

優秀」という意味合いで、私を歓迎してくれた。いつも投げられ、「締め技」の相手になってばかりで、辛い思いばかりしたが、体力は確かに大幅についたと思う。だが、結局は一学期末に退部する。

４０　仏教体験

連載３４回で少し触れたが、中学２年生ごろから高校１年の終わりころまでで記憶に強く残るのは、京都奈良の寺社めぐりだ。最初は友達に誘われて出かけたが、そのうち、一人でも出かける。数回は出かけただろう。記憶に残るのは、印象深い仏像などとの出会いだった。並べてみよう。

興福寺　阿修羅　　広隆寺　弥勒　　中宮寺　如意輪観音　　秋篠寺　伎芸天　室生寺　五重塔　　東大寺　お水取り

気に入った仏像の前に３０分ぐらい座り込んでいたこともある。龍安寺の石庭なども長時間座っていた。しかし、「よくわからないなあ」「何か感じるものがあるというが、そんなものが薄いなあ」などとつぶやいていた。そんな仏像の写真を、自分の部屋に飾っておくことが数年続いた。

時には宿泊したが、当時一泊二食１０００円以下の安宿で、大学生たちが利用するところだった。お水取りの日とは知らなかったが、そんな大学生に誘われて、お水取りを見にいったのだった。

といっても、仏教の教義などに深入りすることなく、見聞型だった。それらの見聞を積み重ねつつ、体験もいろいろとしたが、そのピークは、高１の夏休みの学校主催の永平寺での一週間の「修業」への参加だ。そこでは、いろいろな体験をするが、私の一生の中でもっとも仏教にハマった頃である。一時期禅坊主になろうかと思う程だった。

朝３時半起床から始まり、朝夕の参禅、作業、講話の一週間だ。食事も僧侶たちと同じ精進料理だ。

みんなが恐れる警策（きょうさく）で肩を打ってもらって、緊張を高めることがあるが、素人の私たちには、希望しなければ、してもらえなかった。それを自ら進んで打ってもらうこともした。その写真がなぜか残っていて、書籍に掲載されている。

その参禅体験のなかで、担当僧侶が、「頭の上の天と、そして坐っている足の下の地と、自分自身が一体になる」と語った言葉通りに感じる体験をしたことがある。そのことが強く印象に残っている。ここでも「模範生」だったのである。それでも、自分についての問いが強く芽生えていた。

この時期は「自立」へとさらに進んだのだが、未熟で甘えたい気持ちもまだあり、一人ぐらしに辛さを感じることもあった。そこで、２学期からは下宿生活をやめ、岐阜の生家からの通学に戻る。

４１　受験体制下の「うっぷん晴らし」的事件のなかでの「模範生」

高校になると、中間テスト期末テスト以上に、大学入試に直結する実力テストが重視された。その順位結果は、校舎内の目立つところに貼りだされた。秋の実力テストで、私は学年一番になっていた。ということで、私は、A校の受験向き看板の「模範生」となる。「受験派教師」が、私を事例にして他の生徒に語ることもあった。

当時は、全国学力テストや能研テストなどが社会的な話題となり、高校間の大学受験実績競争が激化し、生徒は、それに巻き込まれていく。と同時に、高校生まで巻き込んだ安保闘争の政治の嵐の後で、高校生の政治活動は厳しく抑え込まれ、愛知の管理主義として、当時から著名になる事態が強まっていた。

当時、受験校という顔だけでなく、比較的自由な校風を誇っていたA校でも、そうした社会的雰囲気が流れ込んでいた。その象徴的事件が学年全体を巻き込んで起った。

高校入学と同時に、中学校の成績をもとに、生徒全体がA群とB群に分けられた。そのなかで、B群のなかに不満気分が立ち込めていた。そして、大量の生徒が集団万引き事件にかかわった。その事件は、個々に「生活指導部」に呼び出された関係生徒への物理的心理的制圧で、鎮静させられた。と同時に社会的にはもみ消し策がなされたようだ。そんな話は、公式にはなにも報告されないが、漏れ出てくる。

生徒の中には鬱屈として気分が沈潜していた。一年上の学年のなかには、そうした受験体制を批判した生徒が批判ビラを配って、力づくで抑え込まれた話も伝わってきた。そんな気分を晴らす、つまり「うっぷん晴らし」として、学園祭の火祭りがあった。学園祭の仮装行列などの廃棄物を運動場中央に集めて燃やし、その周りを生徒たちが大声を出しながら駆け巡るのだ。

こうした事件と関係はなかった私だが、いろいろな思いが渦巻いた。憤りと同時に、向けどころのない気持ちに満ちた。読書傾向も社会的なものを含むようになった。そのころ読んだ一冊は、岩波新書の宗像誠也「私の教育宣言」だった。教育問題に関心をもつようになったのはそのころだ。「世の中には、多くの問題がある。政治家の責任は重大だ。だが、それを許している国民自身の責任は大きい。そこで、国民の子どもたちの教育が重要だ」という「教育による社会改造論」的発想をもちはじめた。その中で、将来進路として、政治だけでなく教育も視野に入り始めた。

４２　教師いじめ　音楽・オンチ

前回書いたような事態のなかで、有効で生産的な何かができるわけではなかった。２年生になって、新たな展開が始まるが、それ以前は、何かの形での「うっぷん晴らし」をするしかなかった。私の場合、授業の際、担当教師を質問攻めすることだった。連続質問によって教師が立ち往生し、試験範囲が短くなるということも手伝って、クラスの生徒は、拍手喝さい状態だった。教師側も、「模範生」扱いをしていた私からの質問に、むげな対応はできなかった。質問を考えるための予習に、毎日１時間はかけた。なかには、まともな質問もあったろうが、へりくつ質問が多かった。たとえば、「I walked in the morning at the park」と教科書にあるが、その逆の「I walked at the park in the morning」ではまずいのか。なぜこの順なのか、といった質問だ。

それは、若い非常勤講師や優しい教師をターゲットにした「教師いじめ」でもあった。２年になると、それにドンデン返しが起こるが、後で書くことになろう。

今から思えば、馬鹿なことをしたのだが、それが一種の遊びであり、「うっぷん晴らし」にもなった。クラスメイトの拍手に英雄気取りだったし、そのなかで、エリート主義的心理が増幅していった。

それにしても、自立した生活に向けて自信がついてきたのか、３学期からは再び学校近くの民家での下宿生活が始まった。

もう少し、高校１年生ころの思い出を書こう。

中学に入って以降、音楽とは無縁の生活だった。そのため小学生のころから少しその要素があったオンチが激化していく。先に書いた小学校時代の苦い体験もあって、音楽から距離をおいた時期が長く続く。中学時代の「音楽」授業はレコード鑑賞中心だったので、苦労はなかった。高校では音楽の授業そのものがなかった。

そのころ、歌うというと、せいぜい旧制一高や三高寮歌ぐらいだった。一高寮歌「ああ玉杯に花うけて」といったエリート主義丸出しのものに気分が合っていたのだ。

ある学校儀式の際、校歌斉唱があった。その時、歌っている私に向けてたくさんの同級生が振り向いた。その時は、私の声が大きいからだろうと思っていた。それから１０年以上たって、数名の友達と二重唱を遊びでしようという時に、低音部を歌うのに私は大変な苦労をしたので、友達が断念したことがあった。その折、１０年以上前に皆が振り向いたのは、私の音程はずれが目立ったためであったことに気付いた。

こんな具合の私だから、そのころは、自他ともに認める「変な奴」「変わり者」になっていた。

４３　高校２年生へ　物理

毎年、クラス替えがあり、新しい担任との出会いがあったが、高校２年生の担任は、名古屋大学大学院を経て高校教師になった物理担当だった。そのころの名古屋大学の物理は、著名な研究者を輩出したところだ。そうした専門研究の話を織り交ぜながらの授業に、私はとりこになってしまった。研究の世界に接した最初の機会となった。劇的に物理科目が好きになり、得意科目になった。授業外で予習復習したわけではないが、授業に集中したおかげで、それ以降の

テスト、大学入試も含めて、ほぼ満点続きだった。高三の全国模擬テストかなにかで、トップクラスの賞品をもらった記憶がある。

その教師の自宅かどこかに出かけて、相対性理論について質問したが、全く理解不能で、悔しい思いをした。ということで、大学選択分野の一つとして物理学を候補に挙げたこともあった。

高校２年生になって、いよいよ私にとって大きなドラマが展開し始める。その話については、すでに２３歳の１９７０年に書いたものがある。その原稿は、ある教育書に公開予定のものだったが、印刷直前の段階に出版社の倒産かなにかの事情で日の目を見なかったものだ。だから、５０年以上眠っていたことになる。今読むと、２０代前半の青年期らしさに彩られて、気恥ずかしいものだが、実際にあった事から数年後に書いたもので、当時の雰囲気を伝えてくれるものとなっている。

そこで、原稿を何回かに分けて紹介しながら、補足文を加える形で、連載をすすめていこう。表現を多少加除修正しているが、ほぼ原文に近いものだ。

「＜受験体制下の高校生たち＞

Ａ校は、「名門」私立受験校である。中高一貫６年制男子校で、１００％大学進学である。生徒数は高校だけで１８００名、専任教員は５０余名。１クラス５４～６３名。生徒の家庭は中小企業経営者、医師、教師など中の上である。学園経営には宗教団体があたっていた。

すべてが大学受験に向けられていた。成績別学級編成（ＡＢ群分け）がおこなわれ、テストごとに上位「五十傑」が貼りだされる。カリキュラムも大学受験科目の五教科に極端に絞られていた。まさに「予備校」であった。

成績別クラス編成のなかで、生徒の中には優等劣等意識、あきらめムードが蔓延していた。生徒の抵抗といっても、せいぜい鬱憤はらしである。学園祭に、二階建て校舎と同じ高さの「ダッコちゃん」（当時流行した「おもちゃ」）を作ったり、火祭りと称して、火の回りを倒れるまで駆けまわったり蹴ったりして旧制高校の真似をしていた。成績劣とされ、Ｂ群に入れられた生徒が中心になった大量万引きに一年生の二割近くが加わったこともあった。その一方禅に入る生徒がいる。ホームルームも発言が少なく「自習」の時間になったりした。生徒議会も低調で、生徒会解散出直し動議が出る状態であった。」

４４　若い教師との出会い

前回紹介し始めた旧稿の続き。

「こうした状況をなんとかしなければと、十名足らずの生徒ではあったが、「処分」をふりかざす管理主義的生活指導部批判のビラを早朝生徒の机のなかに入れた。生活指導部はそれを知ると、疑いのある生徒を一人残らず呼び出し、暴力まで含めておどしつけ、さらに家庭にまで行って抑えつけてしまった。

教師は公立校を定年後赴任してきた受験ベテランが多いため、平均年齢５０歳弱であった。教師と生徒の結びつきはほとんどが受験を通してであった。教員組合にはほぼ全員が加入していたが、経済闘争中心にとどまっていた。

＜新任教師とサークル活動＞

この高校に曙光が射し始めたのは、大量万引きした学年が二年に進級してからであった。

当時、高校生急増期のため、新任教師を新卒から採用せざるをえなくなり、数人の新卒が入り、学園に新風をまきおこした。生徒に新しい刺激が与えられた。ある新任教師は、新任いじめをしようとした生徒を逆に組織し、学校を越えた高校生や労働者のサークルを作った。サークルでは、受験体制下のやりきれない高校とちがった、のびのびとした雰囲気があり、狭い高校の殻を破った世界があった。また、同じような悩みが形を変えて他の高校・職場にもあることが知らされた。もっと重要なことは、そうした学園・職場をなんとか変えていこうとしている仲間の存在を知ったことである。そして、初めて友情・仲間ということを感じる。

教師は、サークルの楽しさを、サークルの枠のなかに閉じ込めるのではなく、サークルで学んだことを自分の学園・職場の仲間に広げ、学園・職場を変えていくことが必要だと強調した。サークルに参加したＡ高生は、目からうろこがおちたように生き生きとして、学園でクラスづくりを始めた。

この新しい動きと、細々としたものであったが、それまでもあった学園を民主化していこうとする動きが合流するようになる。」

ここで、「新任いじめをしようとした生徒」とは、連載４２回で書いたようなことをしていた私である。私の質問に「受けて立つ」どころか「逆襲」し、授業後、さらに議論を続ける中、私はその教師にすっかりハマっていしまった。当時、学校には交代制の宿直制度があり、ベテラン教師は若い教員に交代を頼んでいた。そこで、彼は頻繁に交代を引き受けていた。その宿直室に遊びに来るように誘われて、学校のすぐ近くに下宿していた私は何度も宿直室に出かけて、多くの話を聞いた。

そして本を紹介され、読書していった。務台理作「現代のヒューマニズム」などが記憶に残っている、

彼のような若い教師だけでなく、在職している教師たちに多様な取り組みをしている教師たちがいた。１９７０～１９８０年代と全国的に知られるようになった愛知私教連、私学助成金運動、高校生フェスティバルなどの前史を作り上げていた教師たちだった。たとえば、後に書くことになる生徒会顧問をしていた教師は、結成された愛知私教連の委員長を務めたと記憶している。

４５　クラス作り　私の世界の転換の始まり

前回までと同様に旧稿の続き。

「＜クラス作りと学園祭＞

そうした生徒は、まずクラスの核づくりをはじめる。あるクラスでは「そんなことをしてもしょうがない」「そんなことできっこないよ」と言われたが、粘り強い説得を繰り返して、10 名近くの仲間を集めることに成功した。ただ「クラスづくり」をしようでは、はねつけられるから、全員でいろいろな角度から発言して、「あいつもそう考えてい

るなら、なんとかできそうだ」という雰囲気を作りだし、椅子の配置を丸くして堅苦しさをなくすなどの作戦を練った。その結果、ホームルームで「まあ、なんとかやってみよう。できるかどうかわからないが」ということになったが、歌う事、コンパをやること、クラス水泳大会をやることを決めた。

このクラスの歌声が響くや、他クラスでも次週からはじめ、またたくまに全校に広がった。こいつはおもしろいというわけで、水が砂にしみこむようにクラスつくりが運動化していった。はじめてのコンパで級友についてよく知り合うようになり、しらじらしさが少しずつ消えていく。」

文中の「クラス」は、私が所属していたクラス。

一つ上の学年の少数生徒による異議申し立てが力づくで抑え込まれたのを見聞していたので、生徒の大半が参加するような活動を企画していったのだ。それには、何人かの教師たちのアドバイスがあった。

そして、教師たちから紹介された高校生活指導関連の書籍を読み、参考にしていた。それらの本のいくつかは全国生活指導研究協議会（略称全生研）が編集したものだった。そのなかの高校教師たちはしばらくして高生研を結成した。その後、何十年とつきあってきた全生研高生研との最初の出会いは、それらの書籍だった。全生研が数十年にわたって展開してきた学級集団づくりは、生徒であった私には、教師としてではなく生徒としての実体験の形でスタートしたのだ。

その年の夏休み、前年同様、永平寺に一週間滞在した。私のように、２年連続参加者は珍しかった。だが、前年にように禅に心酔している状態ではなく、社会に目覚め始めた状態だった。参加者全体が集まった場で、寺だったか、宗派だったかの最高地位者に質問して話を聞く機会があった。その質問者に私が指名された。「第二次大戦の折、なぜ戦争協力をしたのか」という質問を出したところ、学校の引率責任者教員によって質問は中止された。

そして、寺の塵箱に、ソーセージの包装が捨てられているのを見つけた。１００％の精進料理であることを信じていた私にはショックが大きかった。　ということで、私の頭は大きく揺らぎ転換し始めていた。

４６　学園祭

「クラスづくりが広まっていくかたわら、学園祭を、学園に新設された女子高校と共催でやるかどうか、口角泡を飛ばす大論議がまきおこった。そのなかで、学園祭のあり方が問われるようになった。これまでのようなうっぷん晴らしでよいのか、もっと前向きでやるべきだなどの声が上がり始めた。何年も男子ばかりの学校生活にとって女子生徒の出現は、生徒一人ひとりにとって重大な問題であった。

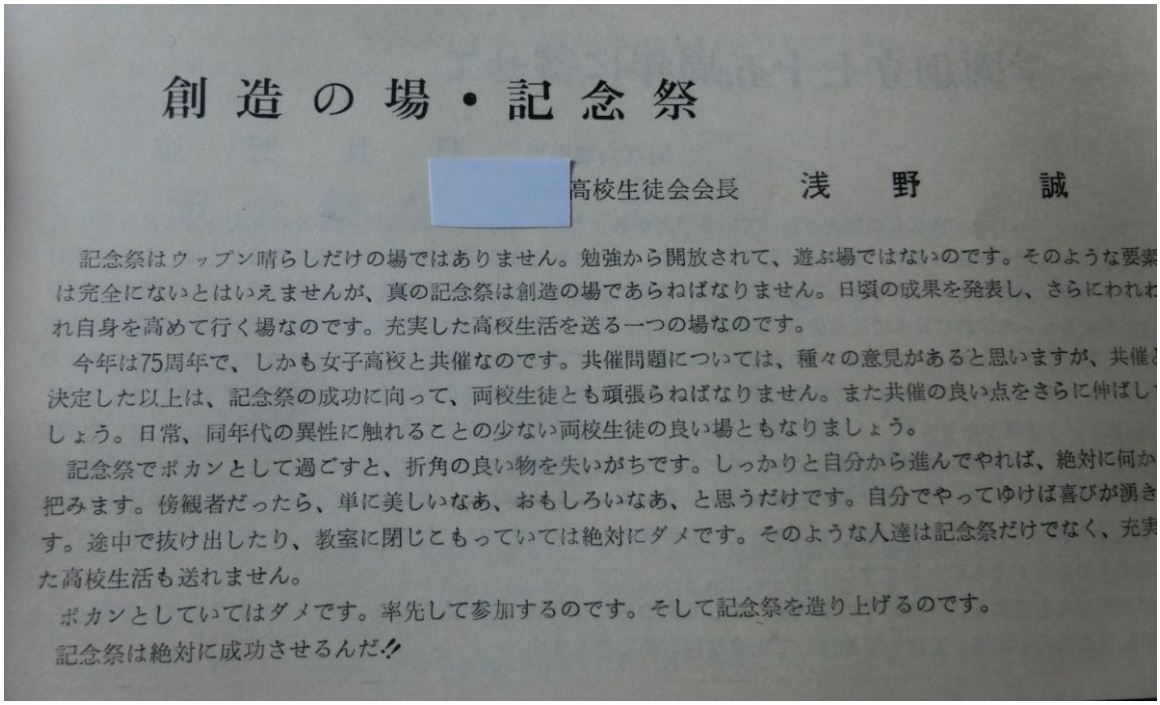
共催問題とクラスづくりがからんで、これまでのマンネリホームルームが吹っ飛び始めた。生徒議会で賛否同数、校長裁決により共催と決まって以降、学園祭の準備に各クラスは集中していった。クラス対抗演劇、仮装行列、新設されたクラス発表等々は、クラスの団結の競い合いの場であった。

クラスづくりの進んでいるクラスは多くの生徒会役員を送り出した。新しく発足した後期生徒会執行部は「学園祭をうっぷん晴らしの場から創造の場へ」をスローガンとして打ち出した。

学園祭では新旧二つの要素が入り混じり、火祭りをめぐる対立も見られたが、全体として新しい息吹にもえ、演劇は生徒自身による創作が増え、社会性をもったものがほとんどであった。仮装行列も楽しいだけではなく、痛烈な社会批判、学校批判が多く出てきた。この学園祭で築かれたクラスの団結、生徒会の新しい方向は、ドラマ性溢れる次の動きの基礎となる。」

Ａ校の生徒たちにとって、学園祭は一年間の学園生活のなかでとびっきり最大の行事だった。それを男子校と女子校と共催で行なうという提案は青天霹靂の印象を与えるものだった。旧制中学以来のバンカラ風に心酔していた３年生の多くにとっては、とりわけそうだった。「女人禁制」感覚さえ漂っていた。共催を希望したのは、新設女子高の経営を視野に入れる校長を中心にした学園側だった。

その議論が始まる時期に、任期交代に伴う生徒会役員選挙があった。学園改革への流れをすすめようとする動きからも立候補者が出、旧来の流れをくむものとのせめぎあいになった。生徒会役員選挙としては、それまでにないものになった。中学校の生徒会長を経験した私が会長に立候補するのは、自他ともに認める既定のことだったので、対立候補はいなかった。他のポストは激戦となった。高校生徒会としては珍しい「左右激突」という様相を帯びたが、私はその時点では、態度を表立てなかった。両派からも「押される」形になり、信任投票となったが、高率の信任票だった。なお「右派」といっても、「受験派」「体制派」とでもいえそうなものだった。



創造の場・記念祭

高校生徒会会長　浅　野　誠

記念祭はウップン晴らしだけの場ではありません。勉強から開放されて、遊ぶ場ではないのです。そのような要素は完全にないとはいえませんが、真の記念祭は創造の場であらねばなりません。日頃の成果を発表し、さらにわれわれ自身を高めて行く場なのです。充実した高校生活を送る一つの場なのです。

今年は75周年で、しかも女子高校と共催なのです。共催問題については、種々の意見があると思いますが、共催決定した以上は、記念祭の成功に向って、両校生徒とも頑張らねばなりません。また共催の良い点をさらに伸ばしましょう。日常、同年代の異性に触れることの少ない両校生徒の良い場ともなりましょう。

記念祭でポカンとして過ごすと、折角の良い物を失いがちです。しっかりと自分から進んでやれば、絶対に何か把みます。傍観者だったら、単に美しいなあ、おもしろいなあ、と思うだけです。自分でやってゆけば喜びが湧きます。途中で抜け出したり、教室に閉じこもっていては絶対にダメです。そのような人達は記念祭だけでなく、充実した高校生活も送れません。

ポカンとしていてはダメです。率先して参加するのです。そして記念祭を造り上げるのです。

記念祭は絶対に成功させるんだ!!

選挙過程で、学園祭共催への賛否への態度表明が迫られたが、私自身も判断をつきかねていて、態度を表に出さなかった。生徒全体の動きに乗るという形で動いていたのである。

写真は、学園祭パンフレットの中の生徒会長挨拶文

「創造の場」という用語を使った点は、私の発案であり、以後長年にわたって私が多用する言葉の最初の使用となった。バンカラ、そしてうっぷん晴らしの象徴として火祭りがあったが、それに生徒会長になった私が否定的であったことから、３年生のバンカラ派から詰め寄られることもあった。

仮装行列では、我がクラスは、アメリカの黒人差別に異議申し立てをする社会運動に響き合う『１＋１＝１？』という仮装を出したが、そういう社会派がいくつか出てきたのが、その年の特徴となった。

４７　施設改善の実現　大きなドラマへのスタート

今回は、旧著原稿の紹介だけで、コメントは次回にする。

「＜ドラマへ＞

Ａ校は授業料が私立高校のなかで県下一位であるのに、設備はひどかった。昭和初期の木造校舎で天井からダニが落ちるというシロモノがそのまま残っていた。諸施設もこの調子であった。学園祭の直前に、３年生のなかから、「①教室内を十分明るくできるだけの電灯を早急に設備してほしい。②カーテンを早くつけてください」という署名運動が始まった。

この署名活動はほとんど進まなかったにもかかわらず、運動の口火を切ることになった。

学園祭後、生徒会は施設改善を要求して署名運動（署名運動は許可制になっていた）を起すことを決めるとともに、署名前に、生徒のアンケートにもとづいてつくった要求で、学校側と話し合い（実質的には交渉）をすることが決められた。運動の結果、署名を集めずして、蛍光灯、カーテン設置などがかちとられた。

生徒会執行部は「いつも皆の生徒会」というスローガンを掲げ、生徒の要求にもとづく活動をめざした。このころになると、生徒の間には、今度の生徒会は自分たちのためにやってくれているようだ。俺たちもやればできるのだという確信が広まりはじめた。

クラスづくり、学園祭、施設改善要求運動を通して、受験差別体制の中でバラバラにされていた生徒の意識のなかに重大な変化が生じ、集団と団結の発見、権利の自覚、行動への確信が生まれていった。

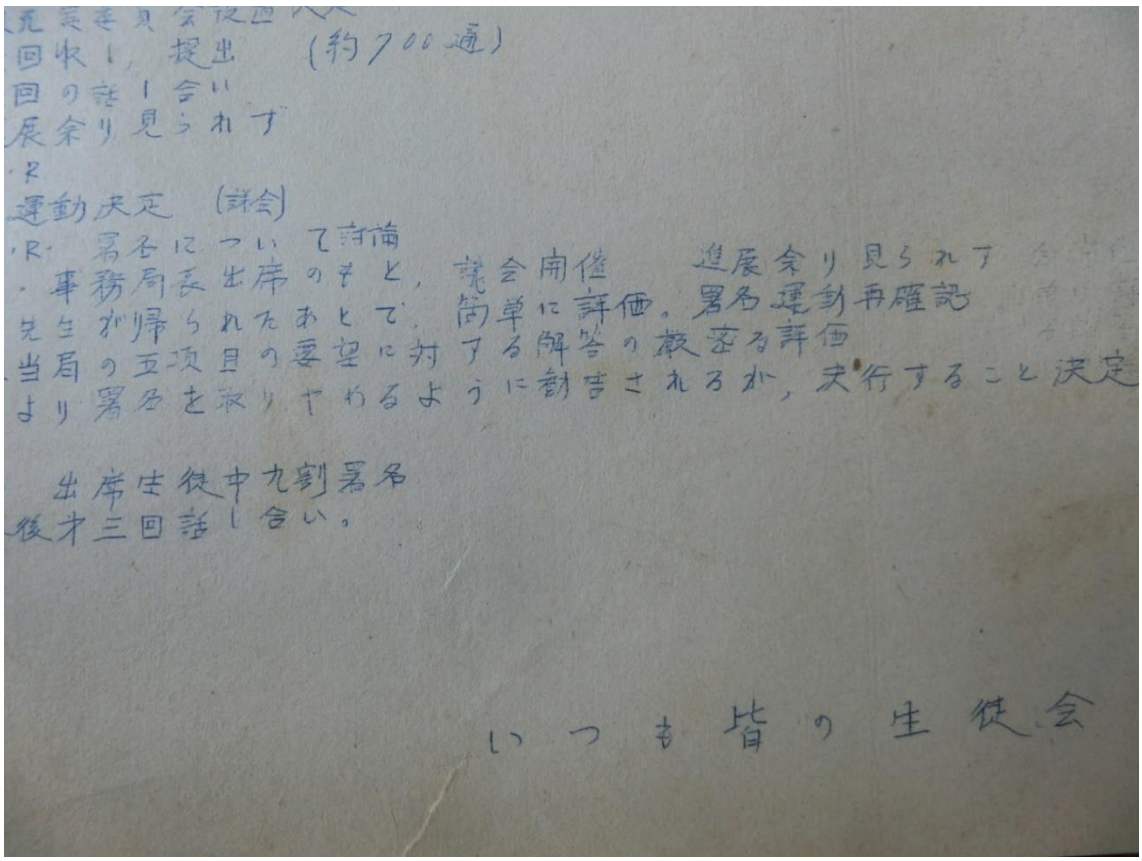
同じころ、近くのＣ校では激しいたたかいがおこっていた。徹底した管理主義に貫かれ、成績を５０人ごとに区切ってクラス分けを行い、教師は組合もなく、二年契約制という学校であった。生徒は、自分たちで運動会をやりたいという要求を出し、学校側に蹴られるや、自然発生的に運動場に集まり示威した。学校側は、わずかな譲歩の代わりに、徹底的な弾圧を行なった。検問し何かあると殴り蹴り、ある生徒は鼓膜を破られた。中心メンバーは退学させられた。（そのころより全国あちこちで同じようなことが頻発した）

この事件は、Ａ校の中心メンバーに大きな教訓を与えた。一揆的にやったのでは、絶対にダメだ。地道な生徒の要求の掘り起しとクラスの団結、たたかいの展望をきちんとつかむこと、生徒会の権威の確立、それらのことなしに勝利はありえない。生徒会執行部は、こうした活動・教訓を踏まえ、自分たちの目標は何か――差別体制の打破、学園民主化等々――どうやってそれを成し遂げることができるか。現在の学園のなかでの力関係はどうか。教師のなかはどうか、さらに教育行政などについて綿密に考え始めた。当時の生徒会顧問は、まじめに生徒の要求を考えようとしていた教師であった。彼は学園の力関係について語り、生徒のはねあがりをおさえ、リアルな認識と地道な努力を教える。このことが以下述べる運動に大きな力を果たすことになる。」

４８　「看板」が「実」を伴い始める　クラスのすごい「団結力」

前回紹介したような動きは、関係者――生徒、教員、経営者――すべてにとって初体験のことで、これらの進行を驚きをもって迎えていた。私も当然そうだった。受験派教師生徒からの推薦の声を看板にしつつも、生徒の要求に押されつつ行動していた。徐々に後者の比重が高まっていくのだった。

それにしても迷いが残り、慎重に行動していた。「いつも皆の生徒会」というキャッチフレーズそのものを胸に、生徒たちに後押しされて動いていた。そして、信頼する何人かの教師たちのアドバイス・支えが貴重なものだった。休みの日教師宅を訪問することもしばしばだった。



写真は、生徒会が配布していたニュース

話は跳ぶが、その後大学・大学院在学中も教師宅訪問をよくした。私自身が大学教員になってからも、学生たちがよく訪問した。それが生涯をとおしての習慣になってしまった。

それらの会話の中で、多くのことを学ぶだけでなく、思春期の不安定は精神状況を落ち着かせるとか、その後の生き方にかかわって多くのこと得たのだ。

一連の動きのなかで、「正しい要求を出せば通るかもしれない」という自信めいたものが、生徒のなかに蓄積し始めた。といっても長年鬱積していた暗い気分がまだ残っていた。そんな中、次のようなことも起きてくる。

「＜ふたたびクラスづくり＞

一方クラスでは、受験中心派教師たちが「もう学園祭は終わったから、大学受験に一目散になれ」とおどかす。生徒のなかにも、動揺・あきらめが生まれ、「もうこれでおしまい。これからは勉強だ」というものも出てくる。だが、多くの生徒は、これまでたくわえたエネルギーを何か発散させないではおれないものを感じていた。

そこで始まったのが、教師への自然発生的抵抗。授業中に小さな紙切れが教師の眼をかいくぐって次々に回される。

「１０時になったら、教室の北半分は、制服を脱いでワイシャツ姿になれ。１０時５分になったら、北半分は制服を着、南半分は脱いでワイシャツ姿になれ。その後、５分交代」

生徒は１０時を心待ちにする。１０時になると、一糸乱れず真っ白と真っ黒になる。１０時５分になると、その反対。授業はそっちのけ。教師がどういう顔をするか、楽しみである。教師は首謀者がわからずお手上げである。その教師は、早速生活指導部に告げる。クラス役員が呼び出される。あまりに統一のとれた団結にむき出しの抑え込みはできない。誰が中心か、何のためにやったのか問い詰められる。答えていわく「知りません。先生の授業がつまらないから、こういうことが起こったのではないですか」

次々に教師がやり玉にあがる。

だが、生徒のなかに、そんなことをしても何もならんという声が出る。その一方、ますますあきらめムードが広まる。」

紙切れを出した張本人は、当時でさえ不明だった。私は呼び出されたクラス役員の一人だった。このアピール文の文案を誰が書いたかも、私の記憶に残っていない。

４９　授業改革の取組みへ　私の人生で初めての授業

再び原稿紹介だ。

「クラスのリーダーたちは集まった。「こんな抵抗は、生産的ではない。授業がつまらないなら、授業をよくしよう。そうだ、俺たちで授業をつくろう」

そこで、ＨＲがもたれ、クラス役員から次のようなアピールが出される。

「諸君！　学園祭における我がクラスの先進的活動と、演劇・仮装の上位進出を祝して乾杯！　その後の授業における○○（抵抗にあった教師のニックネイム）作戦成功バンザイ！　とにかく最近の二年○組の統一と団結には目をみはるものがあるといってもいいんじゃないかなぁーー。

けれども、我々も少しは反省する必要があると思う。我々少し学園祭気分に浮かれていたのではないだろうか。たしかに○○作戦には全員が立派に行ったが、それもやはりどちらかと言えば、破壊的行動ではないだろうか。

破壊的行動も時には必要だが、それと同時に、たとえば○○にみんなで抗議文を出すとかいった正当な行為も行うべきであった。

そうすることが、ＨＲをより充実したものにする一つの方法であったと思う。我々は、今やもう一度、真剣にクラスつくりを考えねばならない時である。

前にＨＲで歌をうたうことや、ＨＲを楽しくする方法を研究しあった積極さが必要だ。
今や我がＨＲは重大な転機を迎えている。学園祭や〇〇作戦で見せた団結の力を。クラス作りの創造力に結晶させよう。そして、すべての問題をＨＲに集中させ、極端な分派的かつ破壊的行動はつつしもう。」

このアピール文の文案を誰が書いたかも、私の記憶に残っていない。
この時期に、後に述べる授業改革に向かう一つのエピソードがある。社会科授業は居眠りが多かったのだが、その一つの世界史の授業で、生徒の声に押されて、私が授業改革の要請を出した。その教師は、いつも左手で板書していたが、私が「どうして左手で書くんですか」と質問。すると軍隊での怪我があってのことだとの返答があった。私は返す。「実は、生徒が居眠りをしないで、関心を深め、生徒の活動があるような授業をしてほしいのです。」
その教師もなかなかの人だった。「じゃあ、浅野君。どんな授業を希望するか言ってみなさい」と返す。そこで、私は「生徒が発表し討論するようなものです」と返す。すると、「じゃあ、浅野君、1時間あげるから、そんな授業をしてみなさい」という返事。私は「1時間では足りませんので、2時間ください」という。「ＯＫ」ということで、私の人生上初めての授業をすることになる。そのころ「ルネサンス」の単元だったので、私は必死にルネサンスについて調べ、授業をする。授業進行は、全く記憶にないので、たいした授業はできなかったと思う。でも、当時としては前代未聞の生徒による授業だったので、生徒は居眠りせず、授業に集中していた。
この懐の深い教師とは、それ以降親しくなっていくが、当時組合の委員長を務めていたことは後に知ることになる。

５０　授業料値上げ情報が入る

再び、原稿紹介だ。長文が続くので、何回かに分けて掲載する。

「「〇〇作戦は破壊的行動に過ぎなく、クラスつくりに相反し、ムード的団結がわれわれを支配し、また一部の人間がクラスをひっぱっていたにすぎない」と総括された。積極的なクラスつくり、授業を先生とともにつくっていく態度の必要性が全員に確認され、〇〇先生には、授業改革の要求が出された。担任には、もっとＨＲに出てこいとの要求が出され、クラス新聞つくり（週刊　座席の列がグループになり、交代で編集　クラス・生徒会・学校のことを中心に、社会や趣味のことまで掲載）、クラスノートをつくることが決められた。他の授業についても、教科ごとに学習委員会がつくられ、生徒による発表授業が企画され、授業と教師への批判も正々堂々と行われていった。
この動きは、各クラスの特殊性をもちつつ、ほとんどのクラスに広まっていった。」

そんななか、経営者は授業料値上げを打ち出す。Ａ校は私学の中でも高額で知られていたが、さらに値上げするという。それはまずは保護者の問題であるが、生徒たちも強い関心をもち、我がこととして受け止め始める。

「生徒の不満の根源が、学園の教育方針、経営方針、さらには文教政策そのものにあることが自覚された時、一連の動きは、新しい段階に入った。だが、こうしたうごきは、生徒集団にとって未知の世界である。生徒集団の力をかけての動きとなり、さらには教師集団の問題にもなってくる。

この新しい段階は、授業料値上げをきっかけに生まれてくる。ここでは、ひとまずその時期の生徒集団の中心メンバーの考えを紹介しよう。

かれらは、これまでの活動を総括し、クラスづくり、生徒会への信頼の獲得、生徒のなかでの統一と団結への確信、やればできるという確信が生まれたことをふまえ、民主的な教師の助言をえつつ、新しい段階を探っていた。

５１　ほぼ全生徒全クラスが参加していく

前回同様原稿紹介だ。近づくクライマックスを前にした慎重地道な取り組みを示す

「当初、中心メンバーたちは、一揆主義的発想をもって、宣伝によって、生徒たちの急激な立ち上がりを考えたが、教師の助言を受け、そういった闘いでは、一部の生徒の立ち上がりにとどまり敗北することを自覚し、地道な組織化に進んだ。

まず前段階として、①施設改善要求を再度全生徒によって出す、②全クラスのアクティヴの組織化、③生徒会のより深い大衆化、④全クラスでの徹底的な討論、④民主的な教師との連携を強め、学園と教師の状況を的確につかむことなどを目指した。とくに、生半可な、あるいはムード的な反対理由では、たたかえぬとして、なぜ反対するかについて、つっこんだ討論を全校的に行い、全校的に深められるまで、値上げ反対決議を各クラスのアクティヴを通して、ストップさせることにした。すぐに闘争を展開して、授業ボイコットなどを主張するものに対して、生徒会執行部は今の力関係では勝てない。それだけのエネルギーがあるなら、クラスの組織化に務めよ、と指導した。

こうして、賛否両論を含む各ＨＲの意見が生徒議会に集約された。同時に、生徒会は、この時点で次のようなことを行う。

①他校の実情など授業料をめぐる事実調査とその発表。役員は休憩時間ごとに各クラスを回り、説明していく。これには各クラスで拍手が起こり、大きな反響があったため、学校側はこれを禁止する。

②学校側に対して質問を出して話し合い、公聴会がもたれる。その結果を細大もらさず生徒全体に報告。このころから、連日のように、生徒会から全生徒にニュースのビラが配布される。

これらにもとづき、ＨＲが何度も開かれ、意見が出され、それが生徒会に持ち寄られるという、徹底した民主主義が貫かれていった。

しかし、生徒の中の授業料反対の理由がまだ皮相なものと判断した執行部は、授業料値上げと自分たちの受けている教育との関連をとらえさせるため、一斉に「教育条件」についての討論を組織し、また、生徒の要求が施設改善に限られているため、再度生徒の要求を引き出すために、全員アンケートが行われた。全員アンケートの結果は、細大もらさず生徒に報告された。生徒はあらためて自分たちの要求を確認していく。

予備校的教育反対　　五科目偏重反対　　生活指導の方針（厳罰主義）を改めよ　　ＡＢ群別反対　　５０傑貼りだし反対　　先生との人間的つながりを　　先生のアルバイト（塾）反対　　先生よ、もっと勉強せよ　　実験しっかりやれ　　クラス定員減らせ　　服装は自由にせよ　　革カバンを認めよ　　ロッカー設置　　などなど

このなかで、教育そのものに眼がむけられていき、授業料値上げと教育そのものについて考えられるようになっていく。

この一方、各クラスのアクティブの組織化がなされ、執行部のもとに各クラス数名が結集した。こうして、全生徒をがっちり組織していく。その一例は、ある時点まで一クラスも反対決議を出さず、某月某日に一斉に議題を変更して反対決議を各クラスで出したことに表れている。」

これらの流れを支えたのはすぐれた教師たちであったことはいうまでもない。教師たちの営みと生徒たちの営みとが響き合っていた。

５２　施設改善や授業料値上げをめぐる生徒会と学校側

私の高校２年の１月から、施設改善や授業料値上げをめぐる生徒会と学校側とのやりとりは、いよいよ山場に入る。これまでと同様、原稿で紹介しよう。

「こうして運動は深く広く潜行していった。学校側は、生徒の動きは簡単につぶせると多寡をくくっていた。学校側と生徒との話し合いでは、生徒の疑問や要求にまとも応えようとしなかった。

生徒会からの質問に対する、学校側の回答を――以下にしめす。

定期昇給分を授業料値上げ分でだすのなら、毎年値上げをしなければならないのではないか。

―――まったくその通りだ。　　（中略）

公聴会の日、

このごろ戸板の隙から寒風がさしこみ、手が凍って字が書けない。どうしてストーブを入れないのか

―――今年は寒い日が多いですね　　（その年は、暖冬異変だった）

これを聴いた生徒の怒りは頂点に達した。

翌日、各クラスで一斉に授業料反対の決議がなされる。

そこで出された要求をもとに要望書が学校側に出される。それをもとに、生徒会と校長・事務局長との話し合いがもたれた。

生徒議会は「校長先生に手紙を書く」運動を決定した。校長は常に、悩みがあったら話に来るなり、手紙をくれるなりしてくれと語っていたことを逆手にとり、全校生が手紙を出すことをきめたわけだ。闘争が生徒一人一人の肩にまでかかることになり、もし失敗すれば、記名式なので、手紙を書いた生徒は弾圧の対象になり、大変難しいことだった。

便箋が配られた。案ずるより産むがやすしで、生徒の過半数が書いた。一つ一つの手紙が要求に根ざして切々と訴えていた。校長は生徒のなかで、相当に人気があった。生徒会役員にもそういう存在だった。だから、校長と対峙するのは困難であった。

だが、手紙に基づく交渉もあまり進展しなかった。生徒議会は、禁止されていた署名運動に踏み切った。署名は、１０分足らずで、全校生の９０％が記名した。

署名をバックにした交渉では、校舎改築が当初回答の数十年後から、二十年後、さらに２～３年後と変わっていく。また、「増築資金を出せない人には強制しない」「食堂建設」などが回答された。

闘いは山場になりかかったが、学年末試験と春休みになり、４月に持ち越された。

この期間、生徒のこうした動きに批判的な教師は、授業で生徒会役員を指名して集中的に質問攻めにした。休み時間は、それへの準備対応で、教え合いがあちこちで進み、そうした教師の意図はくじかれ、授業での学習もすすんでいく。」

５３　動きは新学年になっても続く　生徒会長の私へのまなざし

前回紹介した、校長に手紙を書く、署名簿を手渡す、これらは、生徒会長である私の手を通して、校長に渡される。自分自身の手が震えていたのを記憶している。

新年度に入り３年生になる。授業料値上げ・施設改善などをめぐる生徒の動きはなおも継続していく。生徒会執行部への全生徒からの信頼が厚くなったので、生徒会役員改選の４～５月になっても、後任者の手が上がらず、任期がしばらく延長することになってしまうほどだった。

４～５月の動きについての原稿の続きを簡略に紹介しておこう。

「授業料納付書が配布される時期であるが、決着がつかないままで交渉は続いていた。そして、配布される段階で生徒たちには、それを受け取らない、返す動きもでてきた。生徒議会では、新二年生の主張などもあって、配布された納付書は生徒会に回収することとなった。そして、生徒会規約にある校長の最終決定権を根拠に、生徒議会決議は無効との通告がなされた。

そこで、ひとまずの区切りはつけられるが、それでもこの運動の中で施設改善が数百万円以上（現在の価値でいうと、一億近いだろう）の規模で実施されるなど、大きな成果があった。そしてなによりも、生徒たち自身に大きな経験と自信を与えた。そして、私学助成金運動などと結びついていく。

余談になるが、授業料納付は大きく滞ったようだった。」

私自身は、これらの動きのなかで主役の一人ではあったが、多くの多様な生徒・教師たちのサポートで動き、随分と成長した。この間の動きを先頭になってリードしてきたというよりも、多様な意見や動きに乗っかって、それらをできる限りまとめる役割を担ったというのが、より正確だろう。

周りの眼では、こうした運動のリーダーという見方もあるにはあったが、他方では、受験型学業成績秩序がゆきわたる学校にあって「模範生」扱いされ、さらに中学から生徒会長をしてきたこともあって、「学校側の人物」ではないか、という見方も強かった。受験熱心派の教師たちもそうした期待をもっていたようだ。「浅野はどっち側につくのか」という声も聞こえてきた。

後日談だが、生徒会長だから、事態の責任をとらせて処分しようとするが、「模範生」に仕立ててきた人物なので処分できなかった、という声も聞こえてきた。

どうやら、私は揺れるタイプだと見られていたようだ。自分ではそうでもなく、「学校側」だという気持ちはなかった。それにしても、半年を超える大きなドラマのなか、個人的にも大きなドラマが並行して進んでいた。

この学校は、受験一辺倒というわけではなく、こうした諸活動をはらませる「幅」を持つ不思議な特性をもっていたともいえよう。

５４　教師たち　他校生徒とのつきあい　演劇

生徒会と学校側との激しいやり取りがあった１年近くの過程は、教師集団にとっても試練だったようだ。こうした生徒の動きに、教職員組合は対応できずに、結果的に分裂していく。

教育者が教育されるという言葉があるが、生徒会顧問教師は、「俺は生徒たちの闘いによって変えられた」と語った。そして彼は後に、全国的に著名な愛知私学の組合全体の委員長になる。

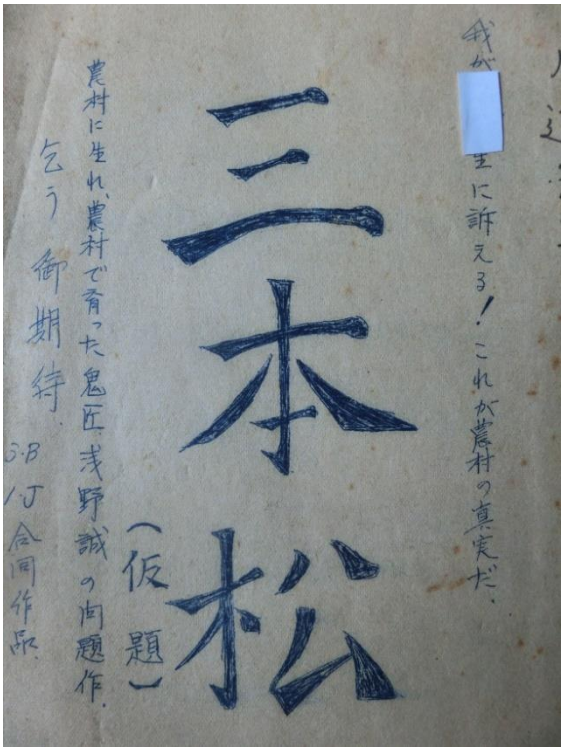
これらの教師たちと私との関係は、「教師―生徒」ということにとどまらず、「仲間」のようになっていく。それらが、私の進路選択にあたって、「教育学」に向かっていく一因になったようだ。

２年生途中から始まった他校生徒とのつきあいは、連載４４で書いたサークルが続いて、そのなかで進行した。さらに私立高等学校生徒会連合を通してのつきあいもあった。１９６０年安保後の当時、高校生の対外活動は厳しく規制されていたなか、このような生徒会連合の存在は全国的にも例外的なものだった。派手な活動をするわけでなく、交流的なものであったが、貴重だった。私個人も、いろいろな高校生と出会う印象的な経験を積み重ねた。

また、原水爆禁止運動も知り、クラスメイトの半数近くが、そのバッヂをつけるほどだった。初めてのデモに参加したのも、そのころだ。沖縄返還運動に触れたのもこの時期が初めてだった。

こんな風に多彩な活動に触れ、３年生の１２月まで日曜日もどこかに外出するほどだった。受験生雰囲気は薄くなっていた。そんな外出の一つに演劇があった。教師にも生徒にも演劇にかかわる人が多く、観劇や演劇創作にもいろいろとかかわった。名古屋演劇鑑賞会の例会にはほぼ欠かさず参加した。民芸、文学座、前進座などといった劇団の演劇が記憶に残っている。学園祭では、クラス対抗の演劇大会が名物だった。既成脚本ではなく、オリジナルなものを作って発表するのが大半だった。競争率が高い予選があるので、本選に出ることさえ難しかった。審査員は、プロ、ないしはプロに近い教員たちだった。

３年の私のクラスは、一年生のクラスと合同で、私が書いた『三本松』という脚本をもとに、私が演出して、本選まで出場できた。素材は、全国的に話題になった、基地建設のための土地取り上げに抵抗する農民たちからとったものだ。生硬さのある脚本で、演出も私が担当したが、主張性は強いが、芸術性に乏しいものになったようだ。



写真は「三本松」脚本と稽古中シーン

このように演劇が盛んな雰囲気だったので、同級生で演劇のプロの道を歩んだものも出た。私も、その後の人生のなかでくりかえし演劇ジャンルとつきあったが、その最初の機会になった。

映画もよく見たはずだが、記憶からは消えている。相変わらず読書をよくした。住井すえ「橋のない川」、マカレンコ「教育詩」がとくに記憶に残っている。「教育詩」は、私の進路としての教育学決断の大きな要因の一つになった。

５５　受験準備

高校三年生なので、受験学習をする時期だったが、中学高校の６年間を通して、自宅学習はほぼ３時間というスタイルが続いていた。高三だから、特別にたくさんしたという記憶は薄い。予備校や塾には全くいかなかった。０時間目とか７時間目とかの授業もなかった。夏休み補習などの記憶もない。生徒の自主学習に任せる雰囲気が濃い学校だった。

といっても、授業では、高校２年生までで教科書はすべて終了し、高三になると受験に焦点化したものばかりだった。例外は、数学Ⅲだけだった。私の数学にかかわる模擬テストなどの受験成績は、大きな波があった。過去問をしたとき、１００点から５０点ぐらいの幅があった。出題傾向による差だった。数学は好きな科目ではなかった。学習の意味がなかなかつかみにくかったからだ。そんななか、微分積分行列といったものに面白しさを感じて、それらを扱う数学Ⅲを授業で扱うのは理系クラスだったので、文系志望であったけど、理系クラスに入った。高三の担任教師は数学担当だったが、「文系には数Ⅲは不要だから、私の授業では、他のことをしていなさい」という指示を出した。

他の科目も、授業では受験対策問題集めいたことをするのが中心で、興味がわかないので、歴史書をよむとか、英語の原著を読むとか、自分なりに工夫してやりがいを感じる学習をしていた。

模擬テストなどをたくさん受ける生徒もいたが、やる気がわかず、結局２回ぐらいしか受けていない。結果判定が、ほぼ安心できる志望校合格率を示していたので、がむしゃらな受験学習とは縁遠かった。

受験に必死になる動機付けに弱かったので、友人たちとの共同学習をできるだけすすめ、励まし合い、教え合いなどで補った。同じ下宿に数人の同級生や下級生がいて、励まし合うのも楽しいことだった。思い出深いのは、夏休みに生徒会仲間とともに一か月あまり、長野県南部の新野の学生村にいったことだ。何軒かの民宿に分かれて学習し議論し遊んだ。

そこでの記憶に残っているものには、遊びが多い。民宿で信じがたいほど大きい五平餅をいただいた。一枚だけで、ご飯５杯分に相当する量に驚いた。集落行事の盆踊りに参加したり、芸能発表に加わった。私は牛の鳴き声の物まねをしてウケた。東京からきていた女子大生にほのかな思いを寄せる同級生までいた。

一泊三食付きで、500 円？800 円？の頃の話だ。

５６　進路　恋と失恋

受験する大学の専門分野をどうするかは、仲間たちとたくさん議論した。進路選択について議論しあい、結論として出てきた志望校・学部の受験に合格するために奮闘しあうというのだった。

そして、１月２月の受験近くなると、学校授業も休みに入るので、当時の愛知県立図書館に生徒会活動を共にした友人たちが朝から集合して、学習を丸一日した。その休憩時間の語らいが楽しかった。

そんな仲間たちは、不思議なほど大学受験に成功を収めた。「生徒会やっていると、受験に失敗するぞ」という脅しが聞こえてきたが、現実は逆になり、「生徒会をやって、将来を見据えているから、学習にも気合がはいって、みんな志望校に合格する」という話が事実になってしまった。なかには、本人想定以上の難関校に合格したのもいた。

私の場合、周囲は、友達も教師も家族も法学部に行くと思っていた。親は「官員様」になってほしいといっていた。今でいう高級官僚だ。ところが、生徒会活動の経験、そして高校一年生あたりから親しみ始めた教育関連の書籍を読む中で、教育学へとシフトしていった。政治をはじめ世の中には多くの問題があるが、それを許している国民を教育によって変えていこうという「教育による社会改造論」的色彩が濃い発想だった。

ということで、その道を歩んでいくことになった。一時期、外国の大学も視野に入ったが、すぐに消えた。

威勢のいい進路のこととは対照的に、恋とかの話になると、全く振るわなかった。生徒会長をして、私立高等学校生徒会連合の会合を通して、ある女子高の生徒会長に恋心が芽生え、初めてデートする相手をみつける。

しかし、恋方面となると、まったくの初心者だった。関係を深めるために、交換ノートを始める。だが、頭でっかちの私は、交換ノートでリクツばかり書いており、恋とはなにものなのか、さっぱりわかっていなかった。情感を豊かに表現することが、全くうまくない。

ということで、握手をすることさえないままに、３，４か月後にはふられてしまった。私と出会っている時に、相手も硬さを感じて付き合い切れないというわけだったろうと推測する。その後も、何人かと付き合うが、こんな調子が数年続く。

このあたりになると、どうしようもなく未熟だった。

５７　寂しさ　友情　恋

前回書いたように失恋体験をしたのだが、以後も初歩的段階から抜け切ることができず、うまくいかないことを繰り返す。数年間で数回の失敗体験を繰り返した後、出会った恵美子との間で、初めての恋愛成功体験をして、その後もつながりを保ち、５０年以上の付き合いとなる。

その恵美子は、私には「愛着障害」があるという。愛情不足による愛への飢えという小さい頃からの体験を引きずったままに大人になっているというわけだ。

対人関係で愛着を感じはじめても、安心感を持ちつつ付き合うことができなかった。常に、「失敗はしないか」「叱られはしないか」「別れるのではないか」などと不安をもち、緊張状態にあり続けた。それは、女性関係に限らなかった。

そのなかで、誰かに支えられないと、寂しくてたまらないという状況が長く続いた。孤立感とも結びついていた。それは、同性間の友情関係でもそうだった。中学２年以降の２～３年間に友達が何人かできたが、その際、私が相手にもたれかかり過ぎたり、逆に「支配」気味になったりして、相手が私を避けることも多く、長続きした例は多くない。

加えて、「成績優秀生」ということで、周りから持ち上げられた結果でもあるが、「エリート意識」を強く漂わせるようになったことも、まわりから避けられる要因になっただろう。そこには、ヨコ関係よりもタテ関係的な様相が強いものだった。中学入学以降、能力主義的な序列競争のなかで人間関係をつくり、どちらが優位に立ち、上の位置を占めるか、という意識で他者と付き合う姿勢が強力に叩き込まれた。高二からの生徒会などの体験で、その修正が図られ始めたが、序列的意識とそれに抑え込もうとする意識との二つの葛藤が長く続くことになった。３０歳代４０歳代になっても、それは続いていたように感じる。それにしても、生徒会活動のなかで、能力主義やエリート主義とは異なる新たな人間関係を築くことは、私にとってきわめて新鮮な世界が開かれる思いであった。

そうした「ややこしい」私に、恵美子はなんとか付き合ってくれた。

女性との関係つくりや恋のことに話題を戻そう。私の育った環境は、家父長制意識が強いもので、男女の序列などが強い。恋愛の参考事例は全くない。結婚も見合い結婚や親決め婚がほとんどだった。そんな環境を振り返れば、周りにモデルになる事例は、ほとんどなかったのだ。ただ一つ思い起こせるのは、当時の私の生徒会仲間の一人が付き合っていた人が、私が付き合い始めた人の友人だったが、その参照例だった。

乱読していた小説には恋愛小説もあったはずだが、そこから学んだ記憶はゼロだ。男子校に６年もいたので、女性に出会う機会が稀で、女性に出会うと、緊張して落ち着きをなくし、恥ずかしさの余り涙が出るほどだった。

だから、女性と会話すること自体に困難さが付きまとった。そこで生じる緊張を、リクツ中心の論理過剰の会話にしていき、感性を伴っていなかった。女性と付き合って会話することも、論理的なものを前面に出した。だから、交換ノートという形をとって、会話するしかなかった。

５８　寂しさ解消へのアプローチ　自己否定　自力と他力

前回書いたように、孤立感にもとづく寂しさから逃げるために見つけた方法の一つは、友人つくりとともに、信頼する教師への依存であった。親のように信頼できる教師と出会うと、過剰に依存していった。最初は、高校２年に出会った新任教師だった。その教師だけでなく、何人もの教師に依存していったことは、すでに書いた。

そのなかでもその新任教師には深く依存する状態が、高校時代だけでなく、その後何年も続き、重要な選択の際には相談したりした。その教師は、私と出会ってしばらくして結婚する。私も出会ったことがある方で、当人よりも私の方が年齢が近い若い方だった。その素敵なカップルに出会い、新婚家庭には何度もお邪魔した。

その教師とは依存―保護の色彩が濃く、一方向的様相が濃いものであった。相手の教師は、私が強く依存し甘えるのを喜んでいたようだ。だから、甘えー甘えられの関係と言ってもよいだろう。そこには、私と母親との関係の引き写しと言える面をもっていたようだ。母親との関係がうまくいかなくなって、代理母のような関係だと言ってもよいかもしれない。

それにしても、その過程で、私は孤立感・寂しさから脱け出していく。時折、顔をだすことがあったが。そして、大学院時代に入ると、新たな依存関係の相手になる教師との出会いが出来た。研究指導の面はあったが、依存―保護の関係をにじませていた。

同じ頃、恵美子との関係が始まるが、そこで、双方向的なヨコ関係を模索していくことになる。

こうしたことを書けるようになったのは、最近のことだ。この連載１～５６回のベースになる第一次執筆をした７，８年前には書けなかったことだ。だから、５７回以降は全く新しい文だ。

以上書いてきた過程で、もう一つの私の特性があることに気付いた。それは、当時の日記のタイトルとして、「克己」「自己否定」などと書いたことに見られるような特性である。恵美子は、二人の生活を始めてかなり年数がったころ、「あなたは自己愛が下手ではないか」と指摘した。「なるほど」と思った。今ある自己を否定し、克己する（己に勝つ）ことが、自分の成長になると思い込んでいたのだ。

余談　中学時代、『道徳』授業のテスト問題として、「『健全な精神は健全な身体に宿る』といわれるが、精神と身体とどちらが重要か」という設問が出された。私は「身体」と答えたが、「正解」は「精神」ということだった。担当教師は僧侶でもあったが、こんな出題をするとは、仏教への信頼を弱めることになろう。私も信頼を弱めた一人だった。

Ⅲ　大学時代

５９　自己否定と自信（過剰）　大学入学

高１のころピークに達していた「エリート意識」は、自己否定と自信（過剰）という、相反する二つとつながっていた。そして、自己否定と自信（過剰）とが繰り返して現れる状態になっていた。そのころ、心理学者の宮城音弥の岩波新書を読んで、自分の性格分析を試みたこともあった。

また、仏教における自力と他力という対照的な二つのアプローチに関心をいだいていた。自力ということでは、今述べた自己否定とからみ、禅にはまる一つのきっかけでもあった。他力は、念仏関連のもので、とくに関心をいだいたのは親鸞だった。本人の意思や行動とかかわりなく、救いがあるという発想に興味をいだいた。と同時に、変化流動を軸にする世界観は、仏教に広くみられるものだが、このとらえ方にも関心をいだいた。

これらの関心は、その後も続き、日本の生活指導研究の草分け存在である宮坂哲文の諸論、それを批判する竹内常一の諸論にもかかわって、その後もしばしば考えることがあった。修士論文をそんな分野でやって見ようかと思うほどだった。結果的には、７０歳代の現在まで持ち越しの作業になっている。

こんな風に、中学高校時代は、青年期らしく精神的に揺れる時代だった。そんな揺れの中で、身体不調、心の不調がくりかえし登場してくるのが、私の人生だったといえるかもしれない。ここまで書いたことでいうと、中学入学期のチック、気管支炎、高校時代の激動期、そして大学入学時期もそうなった。気管支炎は、毎年のように苦労したが、精神的不安定さが引き金の一つであったろう。

高校三年の３月、受験のために上京する。親戚宅に泊まった。寂しさに襲われ、受験の第一次と第二次の間の期間、母親を呼んだ。

第二次試験の数学の際、一問に回答時間の半分を使うも解けず、断念して他の問題を快速で回答した。数学の失敗を予測して、失敗しても他の科目でカバーできる程度に受験学習をしていたので、なんとか合格した。

こうして、Ｂ大学に入学するが、１年余りは、私の予測とは大きく異なる状況に出会い苦戦する。そのためか、記憶に残ることは少ない。記憶にわずかに残るいくつかのエピソードを綴っていこう。

・入学式前のいろいろな手続きなどがあったが、私の場合、健康診断でいくつもの黄信号が出て、数日間にわたって諸検査を受けた。結果として、赤信号はなかったが、身体上のリスクを改めて知らされた。

６０　大学１年生　自治委員　下宿アパート　生活費

大学入学後の一年間で記憶に残っていることを並べよう。

・高校時代の生徒会体験があることから、大学自治会にかかわることになり、一年生ながら自治委員になってしまった。しかし、その活動は、高校生徒会やクラス活動などとは雲泥の差であり、馴染みにくいもので悩みが深かった。その活動をわかりやすく書こう。ベトナム戦争反対をはじめとする当時の政治課題をめぐってアピールするビラを連日のように大量に印刷配布し、集会デモへの参加を呼び掛けることを中心とするものだった。そうしたことをいくつものグループがしていたので、毎朝の登校時にはビララッシュになった。

・そこで、入学１ヶ月後のゴールデン・ウィークには帰郷し、出直しを考えることにした。当時新幹線がすでに走っていたが、費用が高いので往復「準急東海」を利用する。５００円+１００円だったかなあ？　満員で、立ちっぱなしは辛かった。帰郷して、いろいろと相談もした。

・帰京後まず、最初に住んだ寮を出て、３０分ぐらいの通学時間が必要な下宿生活に移った。寮は、２４時間活動体制になってしまったからだ。下宿で半年あまり暮らした後、高校時代の友人と一緒にアパート暮らしに移った。下宿は、京王線下高井戸下車で、アパートは同じく桜上水下車だった。下宿アパート生活では、学食中心の外食と銭湯生活だった。高校下宿の際も銭湯だったので、銭湯は大好きだった。桜上水には２年ほど住んだが、その後友人の親戚宅に二人で引っ越した。中野と高円寺の中間だったが、一年間ほど暮らした。

・B 大学は、２年生の後半から専門学部に進級するシステムだった。それまでは教養学部所属で、第二外国語にもとづくクラス編成だった。私の第二外国語はロシア語だった。資本主義地域は英語で、社会主義地域はロシア語で、対応するのが得策だと思ったからだ。しかし、ロシア語は、英語と全く異なり難関だった。単位取得かなわず留年したクラスメイトは半数近かった。

・生活費は、親からの仕送り１万円か２万円（記憶がはっきりしない）、そして家庭教師のアルバイト代１万円ほどをもとに、総計２～３万円で暮らしていた。授業料年間１万円余りの時代だ。

家庭教師は、大学紹介だ。高級住宅街の中学生を教えた記憶だ。食事つきだったが、体験したことがないような高級食だった。富裕層の生活に触れる初体験だった。

６１　（続）大学１年生　クラスなど

引き続き、大学一年生で記憶に残っていることを並べよう。

・当時、しばしば見られた留年をしないよう、第二外国語であるロシア語学習だけは手抜きをしなかったが、自治委員など繁忙で、他の授業は、適宜付き合った。語学以外は、数十人～数百人という大教室が多いし、出席を取るわけではなかったので、出席率も５０％内外が多かった。丸山政男の政治学も受講したが、数百人の大教室の講義に加えて、モチベーションが高まらず、出席率も低く単位取得だけはした。興味を感じたのは物理学（小出昭一郎担当）で、エント

ロピー概念がよく理解できなかったことを覚えている。

教育学部志望を決めていたので、教育学（堀尾輝久担当）だけは、熱心に受講して、毎時間数ページ以上のノートをとった。とても新鮮な印象をもって、初めて大学で学習しているという感じだった。それだけに力を入れたレポートを書こうとして、結果としてレポートを出さずに単位取得しなかった。入学以前から教育学志望を決めていた学生は、例外中の例外だった。

体育授業は面白かった。最初は、体力テストのような半年で、後は好きな種目を選ぶもので、野球とバレーボールをとった。野球は好きなので楽しんだ記憶がある。バレーは、当時の日本代表のコーチか何かをつとめていた先生で、変化サービスを学んだ。３０代になって、素人バレー試合で活用できた。

・ロシア語クラスは、２０名。　ロシア文学好きが集まっていた感じで、浪人生が半数を占めていた。個性が強く、くせのある学生が多かった。ロシア語は、英語とは全く異なり、苦戦する学生が多かった。

英語授業では、リスニングを重視しており、ディクテイションテストの際、クラスで最低の成績だった。高校まで、リスニングなど一度も経験したことがないから当然だった。それだけにその後の成長度は大きかった記憶だが、リスニングで苦労するのは、５０歳代まで続いた。

そのころから老け顔だし、ふるまいも年長者のようだったので、先輩格として扱われていたようだ。実際は、現役入学だったので、若い方だった。

・そんなクラスで、高校時代の延長線上で、いくつかのことに取り組んだのだが、記憶が薄れている。覚えているのは、他クラスのメンバーも含めて、なん人かで『文Ⅲ新聞』というのを数号発刊したことだ。

・この時期、教師とのつきあいは、授業以外ではゼロだった。マンモス授業だったし、少人数の語学クラスでも、学生との付き合いを盛んにする教師とは出会えなかった。

※　余談になるが、そのころ、東京都知事選挙があり、「美濃部革新都政」が誕生した。少しは応援活動をしたはずだが、記憶は全く薄れてしまっている。

６２　大学２・３年生

大学２，３年生のころで記憶に残ること。

・自治委員としての仕事は続いてはいたが、文化的な諸行事の担当を中心にしていく。記憶に残るのは、新入生オリエンテーション企画、大学祭でのクラス演劇などだった。高校時代の演劇鑑賞の流れで、東京労演がする演劇鑑賞に時々でかけた。

・こんな流れのなかで、２年生になるが、記憶に残るのは、大学祭の役員になったことである。専門学部所属になる３年生の５月開催大学祭の企画を担当した。大規模なもので、パンフレット収入だけで、数百万円になった。そこで、大胆な企画をすすめていった。前年企画で、加藤登紀子が、この大学祭でのデビューで大成功を収めたものだから、関係業界からの売り込みが激しく、逃げ回った記憶がある。

それにしても、今から思えば、不満足だらけだった。

・２年後期から、教養学部から専門学部への移行期に入る。専門学部の授業もあり、入門的内容だが、馴染みやすさを感じていく。

教育学部の中のどの学科を選ぶかのための紹介が各学科教員でなされた。各学科コースを代表する著名教員が登場した。３Ｍと言われた方々と初めてお会いする。宗像誠也は、著書『私の教育宣言』（岩波新書）の高校時代での読書で出会っていたが、豪放磊落の印象だった。同じく著作で出会っていた宮坂哲文は、大学入学直前に物故されていた。勝田守一は、いかにも哲学らしい雰囲気を醸し出す学究タイプの話だった。宮原誠一は、社会教育現場で活躍する卒業生の魅力的な話だった。１０近くある選択肢の中で、理論的探求を軸にする教育史教育哲学コース、現場実践の魅力がある社会教育コースに、まずは絞った。

・最終的には、教育史教育哲学コースを選択した。教員は、勝田守一、大田尭、堀尾輝久、仲新の方々で、助手は横須賀薫のちに楠原彰というメンバーだった。

クラスメイトは、私自身を含めて４名だった。上級生が下級生の面倒をよくみる習慣が強かった。教師よりも先輩からいろいろと学んだ記憶が強い。自主ゼミのようなことがよく行われていた。学科の学生たちの共同研究として、岐阜県恵那の教育実践の調査を引き継いでいた。３年の夏休みには、恵那に出かけた。その研究を、大田尭さんが世話していた。当時国民教育研究所にいた、坂本忠芳、深谷しょう（パソコンにはでてこない漢字）作さんたちにもお世話していただいた。

・勝田さんの授業は、胃を切除されて間もない時期で、自宅で行なわれた。受講生２～３名で訪問して受講した。発刊間もない『能力と発達と学習』についての話だった。興味をそそる内容であったが、当時、関心をもっていた芝田進午「人間性と人格の理論」と突き合わせて、質問したりしたが、思い起こせば、恥ずかしいレベルだった。

雑談の際に、終戦時勝田さんは文部省職員で、「終戦の詔」を秘密裡に運ぶ役目を持たされて苦労した話をされた。

６３　大学３年生のころ　五者協議会　進路選択

３年になり当初の計画通り教育学部所属となり、私自身の居場所ができた感じだった。また、人間関係もいろいろと多彩になると同時に、親しい関係も増え落ち着いてきた。

教育学部は、学生定員が１学年６０名の小さな学部であった。学生数より院生数の方が多かった記憶だ。学部学生は２学年で、院生は５年だから当然のことだ。教員も二十名余りで、職員も多くなかった。だから、学生だけでなく、院

生、職員とも顔なじみになる人が多かった。

３年進級当時、建物増築がすすんでいたが、部屋配分をめぐっての五者協議会（教授会　教職員組合　助手会　院生協議会　学生自治会）が設置された。１９６７年の話だ。７０年代に入って、こうした協議会が持たれるのが広がった。とくに１９６９年の「東大確認書」以降、全学協議会というのが、見られるようになった。とはいえ、８０年代に入ると、再びお目にかかる機会は減った。そんな協議会の「先駆け」ともいうべき存在だった。

私は、学生自治会からの代表として参加した。当時の教授会側の代表は東洋さんだった。大田尭さんとは、このことでの付き合いもあった。ちなみに助手会の代表格は藤岡貞彦さんだった。

そこで、大変友好的で積極的な協議がもたれ、当時としては画期的な案が作成され、教授会・学生自治会を含む各団体の承認を経て、実現していった。学生にかかわっては、学生自治会室だけでなく、各学科コースに学生研究室が作られた。名目は「第二調査資料室」といったものだったが、学生たちのためのこのような部屋が用意されるのは、当時としては画期的だったと思う。そのころは、授業を含めて大学に顔を出す学生は５０％内外であったが、この部屋が学生のたまり場、居場所として大変有効に活用された。

それにしても、学生と教員との距離が近かかったので、教員も参加しての「コンパ」をはじめ、懇談の機会が多かった。

３年生も半ば過ぎると、将来の進路選択が現実問題になってきた。当時の私の前には、二つの選択肢があった。一つは、小中高校などの教師になることで、もう一つは研究者になることだった。現場教師になるために、社会科中学高校教員免許のための教職科目をとっていた。上級生にも、学校教師になる例は少なくなかった。しかし、卒業までに取得できる社会科免許で中学高校の教員になるのは「狭き門」だった。そのため、小学校の臨時教員を務め、その後正式教員資格を取って、教員になる人が多かった。

研究者の道は、大学院に進み、主として大学教員になる道だった。

いろいろと相談し、高校教師から受けた「現場教師への道は広いが、研究者の道は狭く、その道に進む条件があるなら、その方がいいだろう」とのアドバイスがもっとも効き目があった。そこで、大学院進学を意識し始めた。

６４　大学３年生　日常生活　交際など

学生時代、たいていの時期は、大学にいることがほとんどで、アパートへは寝に帰るようなものだった。食事は外食だった。主として大学の食堂を利用し、時に大学近くの食堂に入ることもあった。風呂は、アパート近くの銭湯だ。

学習費用や生活費用は、仕送りとアルバイト（家庭教師）が収入源だった。とくに収入面で条件がよかった家庭教師が大きな助けになった。もう記憶が薄れているが、総計月額２万円余りだった。一番の支出は書籍代で、月額３０００～５０００円ぐらいだったか。一年上の先輩には、食費を削っても書籍購入にあてるという人がいた。かれは卒業後小学校教員として活躍した。

恋愛や異性交際は、相変わらず下手だった。恋心をいだいた人はいたが、うまく伝えられなかった。一つのエピソー

ド。ある女性から相談が持ち掛けられた。男子学生から交際申し込みがあったが、その人がどんな人なのか、わからないので教えてほしいということだった。当時の私は、実はその女性に恋心を抱き始めていたころだった。その女性は、私より年長だったが、私を頼りにしていただろうし、その男子学生を私が知っていることもあって、相談されたのだろう。私は、自分の感情を無理やり抑えて「その男性はいい人だよ」とアドバイスした。

少し後の話になるが、大学祭の学科ごとの研究発表をしていた際に、聴衆の女性が、その後、私にずっと付きまとった。下宿訪問された時には、居留守を使って、下宿のおばさんに頼んで、うまく帰していただいた。

こんな風に、学生時代、うまくいってきちんとした交際まで至ることは、ほぼゼロだった。ある時、親が、見合い話を持ち込んできた。そういう話はよくあったが、いつも断っていた。「そういうことは受け付けない」と繰り返し言っても、らちが明かない。大学院に入ってからだと思うが、某大手新聞社記者の娘との見合い話があって、「会うだけでいい」というものだから、お会いして直ちに「私は、こういう形のものがきらいなので、すみませんが、これで終わりにしましょう」と話して、５分で終わりにした。その後、見合い話は消えた。いつまでも、子どもを管轄しようという親の執念を断ち切るための作戦だった。なぜか恋愛結婚しかイメージしていなかった私だが、恋愛・交際は下手なままだった。

大学の外に出かけたのは、ベトナム戦争や沖縄問題の集会やデモ、そして、先にも書いた学科学生による恵那への共同調査をはじめとする、小旅行や合宿だった。恵那への調査では、調査先の責任者の方から、代表して私にご挨拶があった。引率教員と間違えられたのだ。当時から「老け顔」で、３０歳ぐらいにみえたのだろう。

６５　４年生　教育実習　大学紛争の始まり

４年生になってからは激動の時代だった。新学期そうそうからあわただしくなったが、そのころ教育実習期間がはじまった。私は、東京の目黒区立の中学校で、社会科の実習をした。実習クラスの担任教師から「自由におやりください」といわれ、特別な注文や指導はなかった。

最初の授業は、公民の経済領域だったと記憶しているが、黒板に横線一本を長々とひいて、歴史を概観しながら語る授業をした記憶だけ残っている。「変な授業」だったろう。でも楽しく２週間を過ごした。

写真は、実習後の運動会に訪問した際のもの

実習から戻ると、医学部学生処分に端を発して、学内は騒然とした状態に包まれ始めた。各学部の自治会のリーダーシップをどの派が取るかが、大きな関心事になった。教育学部は、反「全共闘」の数少ない拠点とな

った。

夏に入ると、授業はほとんどなく「紛争」一色となる。そのころまでで記憶に残っているのは、大講堂前の広場に５０００人の学生が集まった集会で発言したことだ。足がガクガクと震えていたことだけ覚えている。

そんななかであったが、夏休みには、卒業論文を「岐阜県恵那の地域変貌と教育実践」にしようと決めて、学科の友人と二人で、現地調査に一週間ほど出かけた。町村合併前には小さな旧村で過疎化傾向が始まっていた、矢作川の上流にある小学校とその地域が対象だった。村はずれの、旅商人が泊まる安宿に宿泊し、調査を重ねた。子どもたちとも小学校教師たちとも仲良しになった。その１～２年後に、かれらが修学旅行に来た時に再会し、いろいろと話した記憶が残っている。

秋に入ると、授業もなく、大学紛争にかかわる活動で日々忙しく動いていた。どちらかというと、裏方的な動きで、学生たちをまとめていくだけでなく、院生・教員・職員などとの協力連携体制作りに動いていた。連載６３で書いたが、３年生の時の学部の五者協議会の経験が生きていて、当時「全構成員自治」と呼ばれた精神が教育学部の中に広く存在していた。

いくつかのエピソード。図書館占拠を主張する全共闘グループに対して、図書館前で阻止する行動に参加した際に、ゲバ棒軍団が押しかけてきた時、後ろの方にいたつもりが、知らぬ間に前面に出ており、怖い思いをした。中高大と一年後輩だった友だちは、ゲバ棒でやられて、頭蓋骨骨折した。

別の日別の場所で、わたしもそのグループに殴られる経験をした。暴力的状態の中で怖い思いを繰り返しする日々だった。

そのころから、鬱状態がひどくなり、大学内の保健センターで処方された抗うつ剤で心身を保っていた。中学１年からのチックも続いていたが、少々大人っぽい症状に変わっていったようだ。薬での治療は、１９７２年の沖縄生活スタートまで続いた。

６６　大学紛争のピーク

わたしが４年生の夏と秋のころは、全共闘系の勢いが強くて、教育学部以外の学部では、彼らがリーダーシップをとっていた。しかし、１２月に近づくと、かれらの暴力的な姿勢で大学に対決する姿勢に批判が集まり、全構成員の自治、全学協議会設置を主張する勢力の勢いが強まり、ほとんどの学部で、リーダーシップが逆転していった。

そんななか、全共闘系は暴力的性格をますますむき出しにし、各学部の建物や行動を占拠していく。それまで反全共闘で孤立気味だった教育学部に大学内外で応援する動きが広まり始めた。学部生だった私たち自身が泊まり込みになるだけでなく、全国から支援に駆け付けるたくさんの学生たちがいた。しかし、宿泊できる場所は、教育学部内の教室や部屋しかなかった。小さな建物が夜も昼も満杯状態になった。

こうした事態の進展の中、教育学部長になったのは大田尭さんだった。おそらくかなりの決意を持っての就任であり、大学執行部内でかなりの活躍をなさっただろうと、推理している。その大田さんが、１２月のある日の真夜中に、私が

泊まり込んでいる部屋を探して、わたしを見つけ、「浅野君、全共闘が教育学部を襲撃する計画をもっているという情報が入ってきた。対処が必要だ。」と秘密裡の情報を持ってきてくださった。学生自治会の代表者ではなく、なぜか私の所に情報を届けてくださった。関係者と相談して必要な対処をして、結果として無事に時間が過ぎた。

それにしても、教職員と学生院生との連携協同関係を培ってきた教育学部の宝物の話だ。

１月に入ると、大学執行部と学生代表との繰り返しの交渉協議の結果、確認書が作成され。全構成員の自治、全学協議会が確認され、紛争の前向きの解決が進んだ。このことの報道はわずかで、全共闘系の占拠と機動隊との「軍事対決」の報道の方が華々しくなされ、世の中には、その情報がもっぱら広がったことは残念だった。

１月初めには、私たちの泊まり込みも終わり、２月に入ると、大学はいつもの姿を少しずつ取り戻していく。この半年余りの空白を埋めるべく、２月からは学業生活が猛然と進む。

※　これらの過程では、先鋭な理論と行動を前面に出すのか、多様な人々から広く合意を集めることを中心にするのか、ということをめぐる揺れ、対立がしばしば表れた。私自身は合意を集めることを重視していた。広く合意を集めることが、１１月から１月かけて成功するなか、状況が雪崩のように変化していくのを実見した。数年前の高校時代の体験と重なっていた。当時、こうしたことを「統一戦線」と言う言葉を使って語っていた。

６７　大学院入学試験

１９６９年２月には、延期されていた大学院入学試験が行われた。まずどの学科にするか決める必要があった。「生活指導」を専攻分野にすることは決めていたが、その分野を担当する教員がどの学科にもいない。学部時代所属していた教育史教育哲学コースにいないだけでなく、かつて担当していた宮坂哲文さんが所属していた学校教育学科では、後任には、教育方法史の稲垣忠彦さんが就任していた。稲垣さんは、もともと教育史教育哲学コース出身で、赴任したばかりであった。

また、教育史教育哲学コースへの進学希望者が、定員を一名越すことがわかり、誰かを押しのけることになるのを避けたい気持ちになった。ということで、私は、学校教育学科を受験することにした。

受験の関門の最大のものは、第二外国語だった。教育学や英語はそれなりに対応できるが、私が第二外国語として選択していたロシア語は、なかなか難物だった。ということで、集中的に学習した。

試験は「案ずるより・・・」であり、問題なく合格した。当時学部内にはロシア語問題を作成できる教員がいず、他学部に出題を委託していたそうで、やさしい和訳問題で「穴場」になったことが幸いした。後に、ロシア語文献翻訳で著名な教員が赴任して以降は、「穴場」ではなくなったようだ。

ということで、学校教育学科に入り、指導教官は稲垣忠彦さんになった。面接の場だったか、どこだったか忘れたが、稲垣さんは、「生活指導は私の専門分野ではないので、指導はできません。修士論文の序論の書き方だけは指導します。そして、就職の面倒は見ません」と率直に語った。自分なりにやっていくつもりだった私にとっては、大歓迎だった。

就職の話がでてくるのは、退職したばかりの教員で、大学院生を早くからどんどん各地の大学に就職させていった方のことが念頭にあったようだ。だから、修士修了と同時に、ないしは博士課程の中途で、各大学に赴任した先輩たちが多かった。私の場合、就職も、後に書くが、教員のお世話にならずに、自分自身の取組みで、沖縄大学・琉球大学に決まった。

そして、「生活指導」指導分野の指導については、ちょうどそのころ非常勤講師選定に、学生たちの希望が反映できるシステムができ、宮坂哲文さんの後継者的存在だった竹内常一さんが、非常勤講師として生活指導関係の授業を担当することになった。ということで、特に不満があるわけではなかった。

そのころは、教員も学生も対等だという雰囲気が充満していて、率直な会話をしていた記憶だ。学生も教員も「さん」づけで呼んでいたような記憶だ。

学科の新大学院生で、学部から進学したのは、私一人だけだったか、他にいたかどうかは記憶がはっきりしない。数年前の学科卒業生で会社員を止めて入学した人、定時制高校の教員の人、他大学出身者２名だったと記憶している。

他の学科も、学部学生時代から顔見知りが多いが、それ以上に、全国の多様な大学から入学してきた人が多いのも、特徴的だった。

６８　卒業論文制作

大学院入試が終わると、今度は卒論執筆だった。提出期日が延期になったが、多分４月だったという記憶だ。それにしても、１ヶ月少々の期間しかない。岐阜県恵那の農村変貌と教育実践を対象とするもので、前年の８月までに現地調査と資料収集を終えていたので、その原稿化が課題だった。

当初は、一緒に調査し討論もしてきた高橋廉さんと共同執筆するつもりだった。しかし、高橋さんが思うところがあって、単独で別テーマの論文を書くことにしたので、恵那の論文を私一人で書くことになった。それでも、二人で励まし合って作業を進めた。場所は、高橋さんが、学部学生時代に活躍していた山谷地区子ども会近くの彼の生活場の一室だった。そこに１～２週間泊まり込んで、執筆作業をした。

資料などをかたっぱしから原稿化していった。そこで書いた下書き４００字詰め原稿用紙１７０枚ほどを清書する時間はなかった。そこで、後輩や高校同級生、さらにはそのお母さんまで手伝って下った。できた卒論の筆跡は、７～８名による。私が直接書いたのは、序論とまとめだけだった。それでも、提出日の夕方５時締切直前の提出となった。最後の一週間は、ほぼ徹夜だった。

終了後直後は、満足感でいっぱいだった。先生方のコメントは、「大変な一年間だったのに、よくやった」「枚数は多いけど、１０枚ぐらいで書ける内容だ」と、慰めを含んだ手厳しい内容だった。それでも、学問研究の世界のスタートラインにたったということで、自己満足はしていた。

大学日程が大きく変わり、５月末卒業、６月大学院入学ということになった。５月は息抜き期間となった。そこで記憶に残るエピソード。学科学生たちとともに、大学の厚生施設で慰労会をもった。私は酒に強く、普通の人ほど酔えない。どれだけ飲むと、酔っぱらうか「実験」してみた。ウイスキーの「レッド」ボトル半分をビール割で３０分で飲ん

だ。その時、初めて吐いた。翌朝は二日酔いだった。これで、自分の限度が分かった。それ以降、吐く体験はもう一度だけある。どうしようもないほど、酒に強い体だ。この強さは、５０代まで続いた。

「老け役」願望の私には、「若い」学生世界に馴染みにくく、早く卒業して学生を抜けたかった。ということで、ようやく学生卒業となった。卒業式はとくにはなく、卒業証書をいただくだけだった。あわせて教員免許状を取得した。中学一級高校二級社会科免許だった。

そして、６月１日から大学院生になった。

Ⅳ　大学院生活

６９　大学院生活スタート　高校非常勤講師になり損ねる　家庭教師と生活費

１９６９年６月に大学院生活がスタートした。生活面でのいくつかの話題。

１）修士１年か２年か記憶がはっきりしない。高校教員をしている２～３年先輩からの誘いで、高校の英語非常勤講師の話が来た。赴任予定先の高校を訪問し、打ちあわせをした。英語は無免許だけど、人がいないので、やむをえないという話だった。待望の教育実践が始められると喜んでいたが、当初 OK を出していた教育委員会が、無免許ではまずいということで、ご破算になった。

現場教師になりたい気持ちをおさえての大学院進学だったので、非常勤講師の話は嬉しいことだった。結局、その後も非常勤にしろ、小中高校の教師になったことはなかった。例外になるのは、アメラジアンスクールの校長を１年余り務めた事だった。有給の専任教員になることはなかったが、小中高校、そして研究会などで、授業・ワークショップを含めた実践をすることは、限りなく多くなっていく。

２）大学院時代の生活費は、家庭教師のアルバイトと奨学金だった。学部時代は、奨学金を受けられなかったが、大学院の時は、私の収入のなかで最大のものとなった。

家庭教師は、「つて」で依頼され、破格の条件で大助かりだった。私の「言い値」だったので、当時考えられる額以上いただいた。受験勉強で必死というよりは、親が著名人の「良家」のお嬢様・お坊ちゃま相手だった。そのうち一人は、家庭教師だけでなく塾通いもしていたので、他はやめてもらった。ひ弱な印象だったので、体力づくりめいたこともした。

依頼されたきっかけのエピソードの一つ。修論執筆で長期にわたり、長野県野沢の民宿に滞在していた時、休憩を兼ねて近くの湖に手漕ぎボート遊びにでかけた。その時知り合いになったばかりの子どもが近くにいて、ボートに乗せ、こぎ方を教える。３０分足らずで漕げるようになる。中学校時代に海での遠泳補助でボート漕ぎは熟練していたのだ。

それを見ていた親が感心して、家庭教師を懇願される。加えて、その知り合いの子どもの家庭教師も依頼される。破格の待遇の家庭教師だった。１９７２年からの沖縄での大学教員生活で得た給与より、奨学金を合わせると多額の収入を得ていた。東京の富裕層の金余りの懐事情には驚いた。

３）学部時代後半は、高校同級生の親戚宅で生活していたが、かれも卒業して就職するので、私も一人暮らしを再開することになった。板橋区の大谷口で、池袋からバスか、東上線大山駅から徒歩での通学で、大学まで４０分ほどだった。数人の下宿生がいたが、そのうちの一人が、同郷の「またいとこ」であることに驚いた。部屋で文鳥を飼い、手乗りにしようとしたが、窓を開けっぱなしであることを忘れて、外に飛んでいってしまった。

自炊を時々したが、魚屋に行って、魚の切り身を買おうとすると、店主が「大将、何切れにしますか」と尋ねるので、切り身一切れと言いにくくて、２～３切買ってしまうことがあった。

７０　スポーツ　健康状態

４）衣類は、仕立屋の家業の関係もあって、母親が送ってくるものを着ていた。着せ替え人形のように扱われるのが嫌で、そのうちにお断りした。

５）生活が落ち着いたこともあって、健康状況は徐々によくなっていった。気管支炎は、相変わらず春秋の季節の変わり目に、高熱を出すことを繰り返していた。でも、対応に慣れてきて、医者通いもしなかったが、大事に至ることはなかった。

卒倒することは依然としてしばしばだった。ひどかったのは学部時代だったが、大学院時代も名残があった。よくあったのは、血液検査のための５ｃｃの採血で気を失うことだった。笑い話になるのは、床屋で気を失ったことである。寒い冬の日、床屋で髭剃り中に卒倒した。寒さ・空腹・疲れの蓄積などの悪条件が重なった時に、注射針やかみそりなどの刺激で気を失うのだ。手のひらを切って出血した幼児体験をもとに、低血圧・貧血状態がひどい時のことだ。３０代半ばまであったが、その後はなくなった。

そのころは、体重が６０キロ未満のやせ型だった。外食で栄養状態が芳しくなかったこともあろう。

６）日常的に運動をすることはほとんどなかった。学生院生時代、学科対抗学部対抗のスポーツ大会に出て、野球をしたことの記憶が残っている。時々ピッチャーをして、ナチュラル・シンカーを投げすぎて肩を痛めた記憶がある。随分後になって、脱臼の痕があると、マッサージ師に指摘されたことがある。

学部の建物下で、クラスメイトたちと卓球をした記憶はあるが、ほんの少しだった。

学科学部の行事などで、合宿・小旅行をし、ハイキング・登山・スキーなどを楽しんだ記憶がある。多かったのは、長野方面だった。大学の宿泊施設があり楽しんだ。

思い出の一つは、高校大学時代と一緒になることが多かった友人と、かれのフィアンセと一緒に尾瀬に出かけたことである。今から思えば、私は単身で、カップルと付き合ったのだ。それでも、尾瀬は大変楽しかったと記憶している。

大学の仲間と、スキーに出かけたが、私がプルーク・ボーゲンで、超スローで滑っている同じ場所で、スポーツ専攻の友人は、スケーティングで降りていき、あっけに取られてみていたことも記憶にある。教師も子ども連れで参加していた。

修論執筆時代、運動不足を防ぐために、夜、下宿の近隣を３キロほどランニングをしていた。犬にほえられて驚いた記憶が残っている。

７）修士時代、娯楽めいたものとして、パチンコがあった。大山駅前でやった。当時は、玉を一つずつ入れて手で打つスタイルで、台の癖の見極めが重要だった。だんだん学習してくると、そのあたりが分かるようになるので、大損もしなかったし、大儲けもしなかった。指に豆を作ったこともあった。パチンコをしたのは、この時期までで、その後は「おさらば」だった。

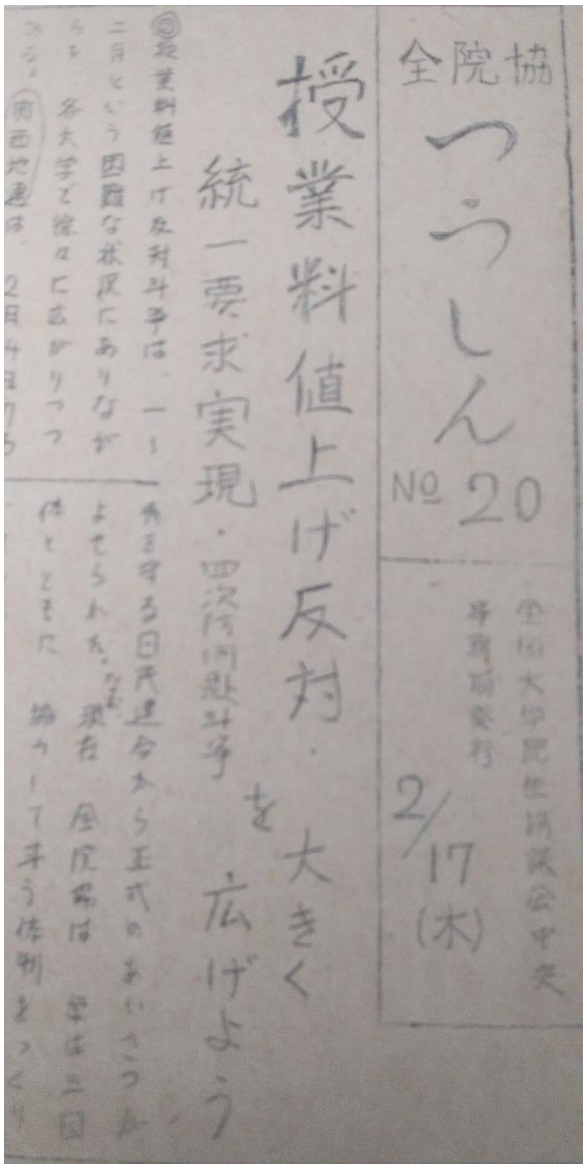
沖縄に来て、「復帰」前の松山で、恵美子といっしょにスロットマシンを一回だけした。それが、大当たりだった。

とくに恵美子は、隣の客が騒いで驚くほどだった。こういうものは、一回だけやるのがいいのだろう。その後はやっていない。当時は、ドル硬貨の現金が出てくる時代だった。

７１　院協活動

大学院時代の学習研究以外の諸活動の中心は、大学院生協議会（院協）の場だった。修士入学直後には、所属する教育系院協の書記長、秋からは全学院協の委員長を半年務めた。修論執筆中心の修士２年の時期を終えて博士課程に入ると、全国レベル（全国大学院生協議会＝全院協）の事務局長を一年間務めた。

学生自治会のようにマスコミの話題を集める派手さはなく、地味な組織で社会的な認知はまだまだという段階だった。それでも、当時は、大学院生（とくに修士課程）の激増期にあり、活動は重要な役割を果たしていた。当時は、旧制７帝大といわれる大学が中心の活動であったが、急増する修士課程院生に対応する活動の創造が求められていた。


全院協
つうしん
№20
授業料値上げ反対・大きく
統一要求実現・四次行問題斗争を広げよう
2/17(木)

当然のことながら、専門分野が多様で全国各地にある大学の院生との出会いは、私個人にとっても充実していた。とくに、激増していた小規模修士大学院の実情と課題、そして組織化を視野に入れて、各地の大学院をめぐる旅もした。

その頃、依頼されて、大学院をめぐる実情と課題について小論を書いたが、発刊直前に雑誌が、別件で緊急特集を組むことになり、私の原稿は、「陽の目」を見ないままになった。参考のために、章立てを記しておこう。

「中教審答申と大学院問題」（４００字詰め４４枚）

一.　はじめに
二.　戦後大学院史概観
三.　大学院の現状
A.　研究教育条件
B.　生活条件
C.　大学院生の進路をめぐって
四.　中教審大学院「改革」の特徴
A.　大学院の「多様化」と人材養成
B.　大学院における研究・教育活動
C.　大学院生の生活研究条件と大学院投資
五.　中教審路線と対決し、大学院の民主的発展をなしとげるために

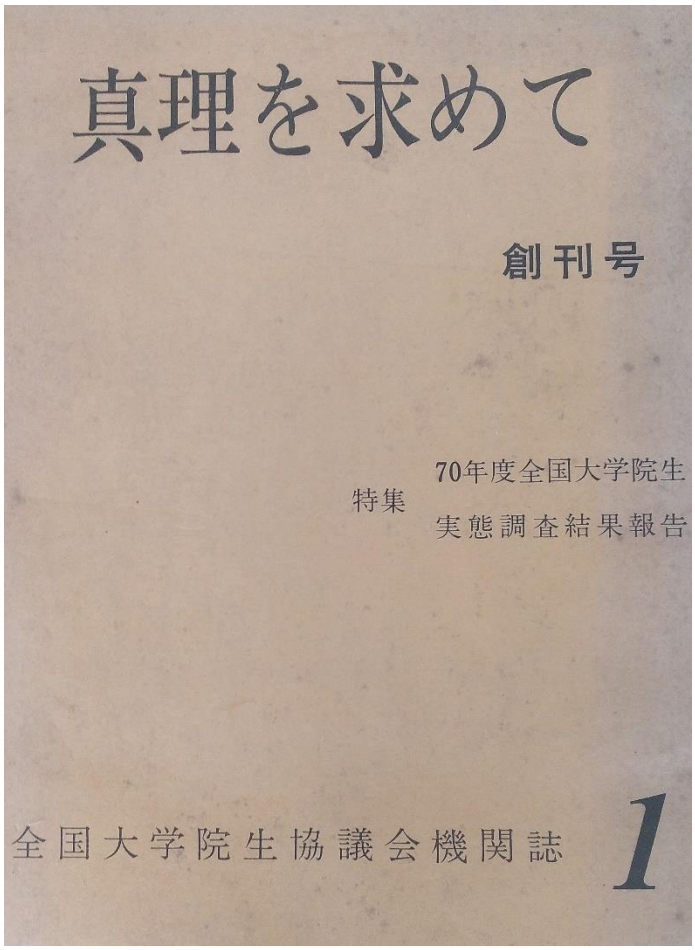
他に記憶に残っているのは、大学院生の生活研究条件の改善のた

めに、当時の文部大臣に直接要請することがあったことだ。一五分ぐらいの短時間だが、大学院生組織が直接文部大臣に要請行動をするのは、その時が初めてのように記憶している。

そんな状況と諸活動を広報するために、全国大学院生協議会機関誌「真理を求めて」（１９７１年６（７？）月）を創刊し、一年間に４号発刊した。その主な記事のタイトルを紹介しておこう。

創刊号　７０年度全国大学院生実態調査結果報告
２号　　８月全国代表者会議
３号　　若手組織の現状と若手研究者の課題
４号　　全院協３月集会基調報告――院生運動第五期建設のために　　研究災害補償制度の確立をめざして

写真は、全院協「つうしん」と「真理を求めて　創刊号」表紙



７２　修士時代の学習研究活動

前回記事の補足　　当時、全院協の事務室は、私が所属する院協に居候していたので、好都合だった。大学に出かけて、授業出席や研究活動と全院協活動を並行してすることができた。

当時出会った人たちには、その後の日本の多分野の学術界を担う重要人物が多く、多彩な人脈ができたこともラッキーだった。

授業と研究活動に話を移そう。

私が属する教育系では、学部から大学院に進学したものは院生全体の半数ほどで、全国から集まってきた院生たちが半数を占めていた。「研究者」になっていくのだという意気込みに溢れた人が多く、自由闊達な議論と交流協同が盛んに行われ、刺激に満ちていた。公式の授業だけでなく、自主ゼミや多様な研究会がいくつももたれ、同じコースの院生どうしの研究交流も盛んだった。諸先輩たちのアドバイスも大変有益だった。

所属する院生協議会で、「研究交流誌」を発刊していた。そこには、学会だけでなく、多様な民間教育研究団体の案内も掲載されていた。１９７０年７月刊行の第一号の執筆者は次の通りである。

箱石泰和、浅野誠、茂木俊彦、谷口雅子、柿沼肇、三村由利子、須藤敏昭、黒崎勲

名前を見ていると、私が20代のころが、どんな時代だったのかがわかるだろう。

では、私個人の学習研究歴を綴っていこう。

進学当初から、生活指導専攻ということで、当時の現場実践を主導していた全国生活指導研究協議会（略称全生研）が展開していた集団づくり論を含めて、日本の生活指導理論と実践論の学習から始めた。

宮坂哲文著作集、竹内常一『生活指導の理論』、大西忠治『班のある学級』『核のいる学級』などの実践書の読書に加えて、『生活指導』『教育』『国民教育』などの雑誌も定期購読し始めた。

あわせて、全生研の研究活動に直に触れるために、１９６９年夏に岡山で開かれた全生研大会にも参加した。熱気にあふれるとともに、これまで見聞したことにない世界で、大きな刺激を受けた。その際に、小川太郎さん、吉本均さんにお会いする機会もあった。

そして、服部潔さん、家本芳郎さんなど小中学校の実践現場に出かける機会があれば、可能な限り出かけた。それらには、竹内常一さんの紹介が多かった。

大学での授業の話に移ろう。授業は、講義もあったが、ゼミが中心だった。講義も少人数だったので、ゼミのようなものだった。学生たちの希望をもとに開講された竹内常一「生活指導論」は、当時、校正段階にあった「生活指導の理論」に基づいた話だった。話にでてくる単語は次から次へと、初めて出会うものばかりで、授業についていくのに精一杯だった。大変難解な世界だというのが第一印象だった。

翌年、院生による自主ゼミに単位付与するシステムを活用して、再び竹内さんを呼んで、自主ゼミを開いた。大西さんが学級集団つくりを構想する際に参照した「国家と革命」を素材に検討討論するものだった。

こんな経過のなかで、竹内さんが、その後１０年近く事実上の指導教官になっていく。

７３　大学院時代の授業の話の続き

本来の指導教官である稲垣忠彦さんのゼミも面白かった。受講生は、数学、技術、授業論などと、多様な民間教育研究団体のどこかに関わっている人が大半だったので、それらの研究団体の研究動向を紹介し合い、検討する場になった。そのころ、どこかの民間研究団体にかかわって研究をすすめる院生が大変多かったのだ。ゼミをとおして、日本の教育研究と実践をつかんでいくうえで、大変有益であった。

大学院時代の授業での最大の難関は、中内敏夫ゼミだった。ボルケナウ「封建的世界像から市民的世界像へ」という私には部厚過ぎる著書を一章ずつ読んで検討していくものだったが、数十ページもあって難解きわまりない一章ずつ読むことが、全く手に負えないもので、ついに受講を断念した。そのころ、中内著「近代日本教育思想史」を読むが、これまた手に負えない。辞書調べと並行する読書だが、辞書にもない言葉の連発で途方に暮れることもしばしばだった。就職して大学教員になってから、ようやく理解ができるようになった。その後も、何かと縁があって、中内さんとは長い付き合いで、沢山のことを学ばせていただき、かつたくさんの叱咤激励をいただいてきた。

修士２年で受講したのは藤田昌士さんの授業で、ヘルバルトやコメニウスを読んで、訓育的教授などといわれる問題

に焦点をあてるものだった。西洋教育史のなかで生活指導論を考える上で有益だった。藤田さんとは、その後生活指導学会でのことを含め、たくさんお世話になった。

授業というよりも、共同研究会的なものとして五十嵐顕担当「ソビエト教育学文献購読」があったが、ロシア語文献の共同邦訳作業でもあり、３年後に出版の形で結実した。コロリョフ、グムールマン「教育学原論」（明治図書１９７３年）で、その中の第一章の翻訳を共同で担当した。ロシア語が読めるメンバーで、他大学からも参加していた。そのお一人が沖縄出身の照屋敏勝さんで、数年後に沖縄で再会し、いろいろなお付き合いをさせていただいた。

五十嵐さんとは、これをきっかけにつながりができたが、私の修士論文作成過程で、長野県野沢温泉の民宿で、他のメンバーとともに、親しくお付き合いさせていただいた。１９９０年に、中京大学に私が赴任した際に、私とは別の学部である社会学部に五十嵐さん、さらに中内さんも勤務されており、ご一緒する機会に恵まれた。また深谷さんも私と同じ教養部所属で、ご一緒させていただいた。さらに学部大学院時代の友人の三上（塩田）和夫さんは、私を中京大学赴任のきっかけをつくってくださり、大学の仕事でもなにかとご一緒させていただいた。

ロシア語文献とのつきあいでは、院生時代に、マカレンコやクルプスカを読む機会はあったが、結局は深めることができなかった。その後、ロシア語だけでなくソビエト教育学とは無縁状態が続き、ロシア語能力は、限りなくゼロに近づいていった。

７４　修士論文執筆

修士論文は、２年になるころにテーマを決めた。宮坂哲文さんの、特別活動をめぐる日本教育方法史研究にならって、児童自治活動の日本教育方法史研究を対象とした。それには、指導教官の稲垣忠彦さんの『明治教授理論史研究 公教育教授定型の形成』 評論社 1966 年の刺激もあった。修論テーマは、特別活動・生活指導分野における児童自治の構図を方法史の視点から解明しようとするものだった。

執筆の思い出としては、国会図書館に通い詰め、史料となる明治後期～昭和初期の教育雑誌数種類の数十年分にあたり、「自治」に触れた記述をしらみつぶしに調べたことがある。この図書館は、ほぼすべての出版資料を保管しているので、それ以上有効なところは他になかった。大学院生には、時間外も特別に活用する体制があり、大いに役立たせていただいた。６月は、開館する朝９時から閉館する夜９時まで、雑誌とにらめっこをしていた。昼食も夕食も、図書館内の食堂ですませた。昼間は、借りだせる資料は数冊に限られていたが、夜になると希望するだけ借りだせた。職員には大変お世話になった。大きな机に１０年分ぐらいの雑誌を並べて調べた。

当時は、コピー機能が発達していなかったので、青版のコピー一枚１０円に時には頼りつつも、大半はノートに転記していった。ノートは１０冊余り、コピーはファイル数冊分ため込んだ。

こうした「しらみつぶし」型研究方法は、その後もしばしば展開した。沖縄教育史、南城市史もそうだし、実践記録を大量に収集整理分析していく生活指導実践研究もそうだった。

こんな作業で、一年分の雑誌を調べても、関連記述を発見するのが、ゼロないしほぼゼロということがしばしばであった。それにしても、一か月ほど、そんな作業をしていると、概況が大まかに見え始め、その中から焦点になる対象と、

アプローチ方法も少しずつ見え始めてくる。

それらの資料をもとに、概況をつかみ、焦点を定めて掘り下げる作業を展開するのは、７～８月の野沢温泉でのことだった。二か月近く滞在したが、８畳ほどの大きな部屋で一人作業を続けた。隣室は、五十嵐顕さんだったが、午前１０時ごろになると、「浅野君、温泉に行こう」と声がかかる。野沢温泉には、かけ流しの公共のものが１０余りあり、それらの湯質が全部異なる。それらを一日一つずつ順番に巡っていった。シーズンオフということもあり、たいていは私たちだけで、３０分～１時間ぐらいのゆったりした時間を楽しんだ。この時に、私の温泉好きが始まったようだ。

ほとんどの日、この温泉時間以外は修論作業に明け暮れた。２ヶ月間で、休日らしい日を送ったのは、スキー場を登っていった時と、湖にボート漕ぎに出かけた時ぐらいだ。ボート漕ぎを教えた小学生の親から家庭教師を依頼されるというおまけまであった。

こうした執筆作業をすすめたが、おおいに役立ったのは、指導教官稲垣忠彦さんによる序論の添削指導だった。大学院入学当初からの約束で、生活指導分野の指導はできないが、「序論」の書き方指導だけはする、ということだった。「序論」だけということだが、それが論文全体の骨格つくりにかかわることで、おおいに有益だった。

７５　（続）修士論文執筆

修論執筆作業は、２月１日締め切りの提出日まで、必死に作業を進めた。修論の章立ては以下の通りである。

児童自治活動の成立過程――明治末より昭和初にかけて――

第一章　教師による専制的児童管理の代替物としての児童自治活動の登場

第二章　日本的公民像と児童自治活動の成立促進

第三章　国家奉仕のための児童自治活動の成立

第四章　戦前の日本における児童自治活動の性格

のちに、この内容を加筆して、浅野誠「戦前の小学校における児童自治活動の形成と性格」『琉球大学教育学部』第一部第７集１９７４年　としてまとめた。

こうして、修士生活を終えて、１９７１年４月に博士課程に進学する。といっても、同じ学科で、同じ教員、ほぼ同じ院生とのつきあいで、大きな変化はなかった。大きく変わったのは、先にも書いたが、全国大学院生協議会の事務局長に就任したことである。それについてはすでに書いたので、それ以外のことを綴ろう。

院生生活で思い起こすのは、院生どうしの議論であり、飲み会（当時はコンパといっていた）でも、議論ばかりだった。といっても、同じ生活指導専攻は、だれもいなかったので、広く教育理論全般をめぐるものだった。院生の合宿などもよくしたが、記憶に残っているのは、国民教育研究所の研究集会参加と、「愛媛・香川教育調査」への参加だ。そこで、国民教育研究所の当時の所員だった森田俊男（所長）、坂元忠芳、深谷しょう作、木下春夫、伊ケ崎暁生さんなどとの出会いがあり、いろいろと教えていただいた。森田さんは、当時すでに沖縄教育研究の第一人者であり、私自身が沖縄とのつながりができて以降、著作から多くのことを学ばせていただいた。

「愛媛・香川教育調査」は、全国学力テストで１，２位を争う両県は、取り組みでいろいろな問題を生み出していたこともあって、そのあたりの調査だった。もう記憶が薄れているが、主として香川を担当し、大田尭、黒崎勲さんなどとチームを組んでの調査だった。その折、大西忠治さんか、どなたか香川生研の方とお会いした記憶が残っている。また、大田さんが、夜９時には就寝して、早起きして仕事をしておられることを知った。その前後大田尭さんの自宅を訪問したこともあった。

院生の時期に自宅訪問した記憶があるのは、他に稲垣さん、竹内さんだった。深大寺の竹内さんの自宅には、その後も通算すれば、１０回以上訪問しただろう。奥様の静代さんにもすごくお世話になった。竹内さん宅に堀尾輝久さんも来宅して、いろいろと懇談した記憶も残っている。（逆に、堀尾宅へ竹内・浅野がお邪魔したかもしれない）

これも記憶の彼方に近づいているが、東洋さん、山内さんと一緒に飲む機会があり、「午前様」になって、終電がなくなり、お二人の自宅までついていって、どなたかのお宅でお世話になった。お二人とは研究上のつきあいはないが、まさに個人的なつきあいだった。東さんは、７０年代終わりに、沖縄の教育センターで授業に関するシンポがあり、パネラーとして同席したことがある。その折、外国留学をすすめられ、「浅野なら、アメリカよりイギリスがよいだろう」といわれたが、そのころは、外国での研究など全く思ってもいなかった。７０年代の終わりには、琉球大学の英文科の先生からも同じような話があり、「紹介するよ」とまでいっていただいたが、私の方は、全く相手にもしなかった。

こんな話に乗っていれば、全く異なる人生になっていたかもしれないが、当時は想定外の外の外の話だった。

７６　全生研常任委員になる

博士課程１年目の１９７１年には、二つの大きなできごとがあった。

一つは、全国生活指導研究協議会（略称全生研）に本格的にかかわりはじめたことである。それまでは一参加者であり、著作や雑誌の読者だったのが、役員として研究活動の当事者としてかかわりはじめ、その後の人生３０年余の研究活動の中心にすわったのである。

４月以降、全生研の研究会参加、会員の実践現場訪問などを積み重ねるなか、全生研常任委員になってほしいという声かけがあり、それに乗ったのだ。竹内さん、服部潔さん、家本芳郎さん、林友三郎さんなどに出会うなかで、話が進んでいった。７月末から８月初めに開かれる全生研大会（神奈川湯河原温泉）で選出される運びになった。２０～３０名いる常任委員のほとんどが現場教師であり、研究者としては春田正治さん、城丸章夫さん、竹内常一さんだけで、若手を補充する意味もあったようだ。

その大会で私の他に常任委員になったのは、神保映、楠正明、大和久勝さんで、その後も長く親しく交流を続けてきた。

常任委員になることは、大会分科会の担当委員を務める事でもあり、最初は全校集団つくり中学校を担当した。高校時代の体験がきっかけである。担当委員になると、討論の中で出てくる多様な質問などに対応するとともに、討論のまとめもしなくてはならなかった。なぜか、難問にたいしても「私にはわかりません」といわずに、真正面から応える「伝統」というか「習慣」めいたものが、当時存在していた。

ということで、全生研の実践理論を深くつかんでおく必要があった。そこで、発刊される直前の『学級集団づくり入門第二版』の見本本をいただいて、くりかえし読んだ。製本のための糊がまだ乾いていず、この本は、数年でぼろぼろになってしまい、再購入したほどだった。

分科会を含めた大会の４日間は、必死で歯を食いしばって頑張った。お陰で、終わりごろになると、歯がガタガタになり、食事も喉を通らなくなっていた。当時６０キロに満たなかった体重が、さらに２～３キロ減少していた。夢中になってやっていたので、討論内容などは記憶のかなたに吹っ飛んでしまった。こうしたことに慣れるのに、数年を要した。

大会だけでなく、月一回の常任委員会出席、諸研究会への参加、講師として派遣されることも始まり、私の生活時間の中心の一つに座り始めた。そして、この過程全体が私の研究者修行の大きな柱の一つになった。

７７　研究者としての役割・居場所の確保

全生研常任委員になるころから、『生活指導』誌などの原稿執筆依頼も始まった。「全校集団づくりについて――四氏の実践記録にふれつつ」『生活指導』１９７１年１０月号、「『学級集団づくり入門第二版』について」『生活指導』１９７２年５月号などが、当時書いたものだ。自信がないので、竹内さんに添削してもらった。

「全校生徒（児童）総会の今日的意義」全生研常任員会編『全校総会の指導』明治図書１９７３年も、当時書いたものである。

全生研だけでなく、他の民間教育研究団体の理論と実践を学ぶ機会も、前にも書いた大学院生のゼミなどといくつかあった。それらで学んだことは、翌年移住した沖縄での諸活動に有益だった。

だが、学会とのつきあいは、日本教育学会に、沖縄行きが決まってから加入続きをしたが、学会の大会や研究会への参加はしばらくなかった。とくに理由があるわけではなく、その機会や誘う人がいなかっただけのことである。とりわけていうと、沖縄から東京周辺で開かれる会の出席にかかる交通費が、当時は一か月給与に相当する額であったから、参加は容易ではなかった。琉球大学勤務が始まった１９７３年には研究費が支給され始めたが、年間１０万円ほどで、半分は授業資料プリント印刷費になり、残りで旅費をまかなうことは無理で、ほとんどが自腹になった。本格的に諸学会に付き合い始めるのは、７０年代末になってからである。

大学院生活は正味３年足らずであったが、それを一言で言うと、過剰な「背伸び」の研究者生活スタートだった。「背伸び」を希望する面がなかったわけではなかったが、そうした雰囲気というか、環境に置かれたからであった。

研究会での発言にしても、原稿執筆にしても、必死の背伸びでやっていた。そのスタイルが数年以上続いた。そうであっても、研究者として自分の役割・居場所といったものができ始めてきた。それだけに１０代末から続いた精神的不安定さは薄れ始め、研究者としての自信が芽生え始めた。

７８　恵美子との出会い

博士課程一年の時のもう一つの大きなことは、恵美子と出会い、結婚し、沖縄就職が決まったことだ。何回かにわけて書こう。

一九七一年四月二八日二一時三〇分に、初めて恵美子にあった。当時、４月２８日は、沖縄デーと呼ばれていた。サンフランシスコ条約で、沖縄が米軍支配下におかれることが決定した日だ。復帰運動・沖縄返還運動の重要な日だった。１９７１年のその日も、「復帰」一年前になろうとする時で、大きな集会デモが開かれ、全院協も参加していた。

その日、全院協の新たな事務局員選任の打ち合わせで、恵美子を含めて四人の方とお会いすることになった。その時の「歴史証人」のお一人は、信田さよ子さんだ。

渋谷のNHK近くで四人でお会いして、新宿でお話することになった。事務局員の話は、ほんの５分で終わり、あと、長いユンタクタイムになった。

私は、恵美子にひとめぼれしてしまった。はじめは北海道出身の人かなと思ったが、沖縄出身ということがわかり、会話はいろいろとはずんだ。ユンタクが終わったころは、終電に間に合うかどうか、と言う時間だった。

２，３日後、もう一度会う機会があった。一目ぼれした私は、もう一度決心を確認し、帰宅して交際申し出の手紙を書いた。そして、連休中の池袋で会い、中野哲学堂まで歩き、哲学堂でイエスの返答をいただいた。

それからは、全院協事務局員の業務の話は、ほとんどせずに、デイトを繰り返した。交換ノートも始めていた。

そして、５月末には、一生をともにしよう、などと決意する。

私からの「押せ押せ」の攻勢に、恵美子はたじたじとなって、ついてきたという感じだったかもしれない。ではいくつかのエピソード

・最初のデート。池袋だったが、私は定刻１０分前到着。恵美子は、３０分後。こんなパターンをその後も繰り返していた。

・恵美子は、持ち物を頭の上に載せて歩く。沖縄女性式。

・最初のころの私からのプレゼントは、果実酒。多分レモンだったと記憶している。驚かれた。

・恵美子は、当時大学の学内寮に住んでいたが、門限を過ぎて門が閉まったため、身体を押し上げて塀を越えさせた。

・恵美子のゼミでは「心理劇」をしていたが、そこに参加させられた。

・恵美子が沖縄出身ということもあって、本格的な沖縄学習を始めた。

７９　恵美子といっしょに生活し始める

８月半ば、二人で、２泊３日（３泊４日だったかもしれない）旅行で、乗鞍高原へ行く。長野側から入って、高山を通り、岐阜の実家に行く。その後、高校時代の恩師宅を訪問。

いくつかエピソード

・ホテルの宿帳記入に、最初に恵美子が「根間恵美子」と書いたので、私も「根間誠」と書く。

・高山で、一位（イチイ）一刀彫の観音像を買う。

・実家では、「沖縄は人種が異なる」などといわれて、怒り飛び出す。

旅行後、二人で一緒に住むことに決める。恵美子の学内寮は、入寮希望者が多く、「一緒に住むことが決まっているから、早くして」といわれたとかなんとか。

当時、私は東武東上線の大山に住んでいたが、恵美子も大山にある大学の大山寮に住んだ経験もあり、東上線沿線に絞り、埼玉県に入って価格が安くなる和光や朝霞付近の不動産屋にあたる。朝霞駅から徒歩１０分余りのアパートを借りる。１万５千円ぐらいだったと記憶している。

最初に私が移り住んで、それから徐々に荷物を持ちながら恵美子も移ってくる。９月２０日に双方の友人たちをアパートに招いて、「お披露目」をかねて、結婚式実行委員会を開催する。

いくつかのエピソード

・恵美子がバイトなどで遅くなると、駅まで私が迎えに行く。当時は携帯などない時代で、終電まぎわの電車の到着時間を予想して出かけた。

・朝、乗車予定時間の電車が来る前には、「あと〇分だよ」と、恵美子に私が声をかけるものだから、彼女は「うっとおしい」と感じたようだ。

・彼女の卒論テーマが「虚しさの研究」というものだから、とても心配した。あとから思えば全くの杞憂だった。

・恵美子は、「国費留学生」で、第一希望の「住居学」に先約があったので、第二希望の児童学にまわったということだが、それがすごくよかったみたいだ。給費奨学生だったので、沖縄に恩返しをしなくては、と思っていた。私は、奨学金と家庭教師のアルバイトで、二人の収入を合わせれば、そこそこやっていけた。

８０　沖縄との出会いと就職活動

一緒に住み始めた９月下旬に、琉球大学教育学部家政科主任の尚弘子先生から、恵美子に手紙が来た。家政科助手として採用予定なので、意向を確認したいという趣旨だった。恵美子はもちろんイエスだ。

即座に私も就活を始める。恵美子が出かける際に、一緒に行って「私にも採用はないか」と打診することから始めようとした。そこでまず尚先生に手紙を出し、教育学科主任の安谷屋先生を紹介していただく。そして、ソビエト教育学文献購読で一緒になった照屋敏勝さんに、教育学科の阿波根直誠先生を紹介していただく。

こうした行動に出たのは、当時、大学院生の就職難の時代であり、チャンスが少しでもあれば生かそうという気持ちと、指導教官の稲垣さんが、かれの前勤務先の宮城教育大学での経験をもとに、地方の教育系大学勤務の良さをしばしば語っていたので、自分もいつかはそうしようという希望を持ち始めたことがある。

稲垣さんは、教育学部には、いろいろな教科の専門家が教員をしているので、そうした人々を付き合うのは大変有益だという話もしていた。それは１９７３年に琉球大学教育学部に赴任して以降、多様な専門の教員たちと色々なことを

したことにつながった。

こうして、１１月２０日過ぎに沖縄行きが決まった。いくつかのエピソード

・旅行社でパスポート・ビザ申請をサポートしてもらう。手書きで出そうとしたら、タイプしないと、ビザが発給されないなど面倒なことになる可能性が高まるから、旅行社が入力して申請書を作成する。渡航目的には、結婚挨拶と就職活動と書こうとしたら、それも面倒なことになるから、「観光」にしなさいと言われる。ビザ発給でいろいろと面倒になって取得できなかった話をたくさん聞いていたので、旅行社のいうままにした。

・こうして、すべて旅行社を介して、パスポート・ビザの申請書を作成し、当時の住所の埼玉県の県庁で申請し、必要だった種痘検疫証明書も取得する。

・あわせて、航空券を購入する。恵美子は、いつも船便で沖縄往復していたが、今回はいっしょに航空機で出かける。往路は、鹿児島経由の全日空便、帰路は、ノースウェスタンの直行便だった。割安航空券などない時代なので、大変な額だった。

・沖縄行の直前が、沖縄協定の国会審議の最終局面で、米軍基地そのままの「復帰」で、県民の声を代表する屋良主席の嘆願書が届けられる前の強行採決であった。その日は、全国的に運動が盛り上がったが、全院協も１０００名と言う空前の参加者で、集会デモに参加した。

８１　沖縄初訪問　就職活動　宮古での結婚パーティ

沖縄には１０日足らず滞在した。エピソードで綴ろう。

・出国手続きは、鹿児島空港で、「入国」手続きは那覇空港で。海外の他の国との関係以上に厳しいものだったが、記憶にはほとんど残っていない。

・到着した最初の晩は、恵美子の先輩が住む佐敷の仲伊保で一泊。ご主人は東京農業大学出身で、農業に打ち込んでおられた。

・尚弘子先生とは、多分首里の琉球大学でお会いした後、那覇のハーバービュークラブで食事を共にすることになった。同クラブは米軍の高級将校クラブで、米国留学した沖縄在住者もメンバーで、尚先生もそうだった。メニュー他すべてが英語で面食らってしまった。ここはのちにハーバービューホテルになり、私にとってもいろいろな物語の場となったところだ。

・尚先生の紹介で、教育学科の安谷屋先生、阿波根先生、芳沢先生にお会いした。その折に、教育学科も助手を公募していることを知った。そこで、私も期限に間に合うかどうか微妙だったが、応募文書を後送することになった。

・芳沢先生は宮古出身で、恵美子の高校先輩になり、弟が恵美子と同級生だった。かれには、就職の可能性のあるいろいろな所を紹介され、彼の車で一緒に回っていただいた。記憶がはっきりしないが、沖縄国際大学（設立前）、沖縄大学、沖縄教育センターなどだ。その後も、近年に至るまで、大変お世話になってきた。

これが、後に就職決定への足がかりになった。

・旅の後半では、宮古まで出かけた。恵美子の家族・親戚に結婚の挨拶をするためだ。宮古丸という５００トンぐらいの船だった。大きく揺れたが、私は船には強く、船酔いしないタイプなので助かった。

恵美子の実家で、家族親族が数十人集まって、大宴会だった。かたぐるしいあいさつなどなしに、恵美子に紹介されたメンバーごとにあいさつしていった。当然「お通り」もあった。ともかく、豪快に飲み食べる。そして歌い踊る。結婚にあたり親の承諾などという話は毛頭なく、本人たちの意思だから、と言うので、皆で盛り上げてくれた。大親族の中で、ヤマトンチュ一号に私はなった。

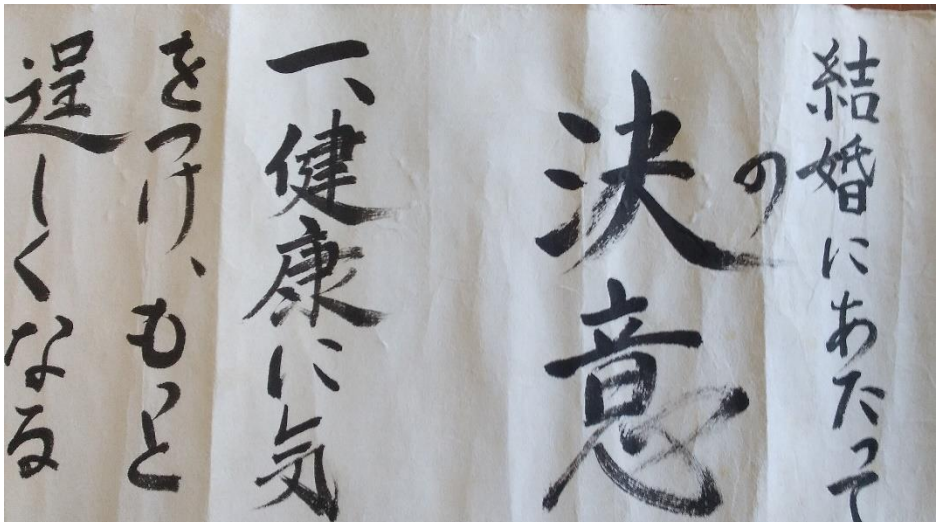
すごくプラスの意味でカルチャーショックだった。宮古口はまったくわからない。義母に「この後、どこに行くべきか」と尋ねられた時は驚いた。ここで「べき」は、単純未来であって、当為の意味ではないのだ。

親戚のどなたかに宮古一周をしてもらった。砂山ビーチだけ記憶に残っている。ビーチへの通路も草が生えて、地元の人にしかわからない所だった。私たち以外誰もいなかった。そこで私は、衣服を全部脱いで、恵美子を監視役にして一人で泳いだ。１１月末なのに、ちょうどいい温度だった。美しい海と砂浜に息をのんだ。

この旅では、驚きを多分に含んだ出会いがたくさんあったはずだが、緊張と興奮で、記憶に残っていることはとても少ない。

８２　難航する就職話　結婚式

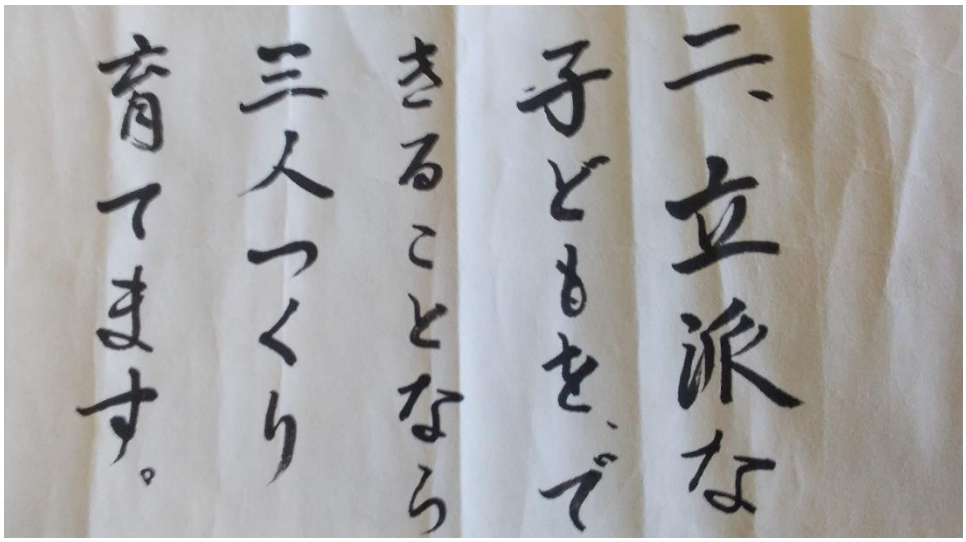
東京に戻ってすぐに琉球大学教育学部助手の公募文書を送った。そんなに時間がかからないうちに、採用の方向を示唆する連絡をいただいた。恵美



子の採用の方は、うまくいってなかった。恵美子が上手くいって、私のメドがたたなかった９月末の状況とはまったく逆になってしまった。

しかし、私の方もまもなく、国の予算の都合で先送りになったことを知らされた。当時は、「復帰」に伴う国立大学移行措置が大変難航していたようだ。このようにうまくいかなくても、いずれは沖縄就職する方向で腹が決まったので、それほど苦にしなかった。翌年予算が下りれば再び公募があるという話を聞いていたので、再び応募するつもりでいた。

そんなころ、医師に恵美子が妊娠したと診断を受けた。ところが、それほど日がたたないうちに流産と伝えられた。本当に妊娠したのかな、と怪しんでいた。



結婚式の準備は着々とすすみ、２月５日に神田の労音ホールで、会費制結婚式を実行委員会形式で行なうことになった。そのころ、そのやり方はごく普通で、他のカップルの結婚式の司会を務めたこともあった。

当日は、私も恵美子も両親がそろって出席してくれた。他は、竹内常一さん、松村康平さん（恵美子の指導教官）など先生方と友人たちで、７０名余りの参加だった。会費は１５００円だったと記憶しているが、全支出は１０万円弱で、その会費で、うまくやっていけた。

写真は、結婚式の誓い言葉（５項目あるうちの最初の２項目）

恵美子の両親は、私たちのアパートに泊まった。翌朝、珍しく雪が降り積もった。義父は満州での兵役体験があるので、雪を見ても驚きはしなかったが、初体験の義母は興奮状態ピークになり、外から室内に雪玉を持ち込んで、義父に見せていた。新宿か池袋の地下道を通る時、義母は、壁を叩いて、「誠、壁の向こう側に何があるか」と尋ねた。本土に来ることが初体験の義母には、すべてが驚きだったのだろう。

結婚式の翌日だと記憶しているが、朝霞市役所に婚姻届けを提出に出かけたが、書類不備で、数日後再提出して受理され、晴れて戸籍上も夫婦になった。

８３　急転直下

就職決定　沖縄行

３月半ば。全院協の全国代表者会議が名古屋大学で開催され、私の事務局長としての最後の仕事をした。その会議中に、沖縄大学の佐久川学長から電話があった。沖縄大学で採用することにしたから、急いで来沖するようにとのことだ。沖縄行の腹は決まっていたので、受諾を即答した。

沖縄大学と国際大学とが合併して沖縄国際大学を創設する話は、既に決まっていて、その準備が進んでいる段階で、沖縄大学の一部が、それに異を唱え、沖縄大学を存続させる動きが、急に表面化したのだ。そのために急遽教員採用を進めており、その一人に私が選ばれた、というわけだ。数日後、上京していた佐久川学長とお会いする。その際、恵美子も採用してもらえないか、打診したところ、承諾の即答を得た。

恵美子は無事、修士論文を提出し修士課程を終えた。私は、博士１年から２年になるのだが、大学院休学にして籍を残した。いざうまくいかない時に復学できる可能性は残しておいた。

急なことだったが、いくつか送別会があったが、記憶は薄らいでいる。そのなかで、全生研役員の皆さんの送別会があり、服部潔さんの、「立派な教師を育ててほしい」という激励の言葉が、印象に残っている。それがその後の教員養成の仕事に打ち込む大きな動因になった。

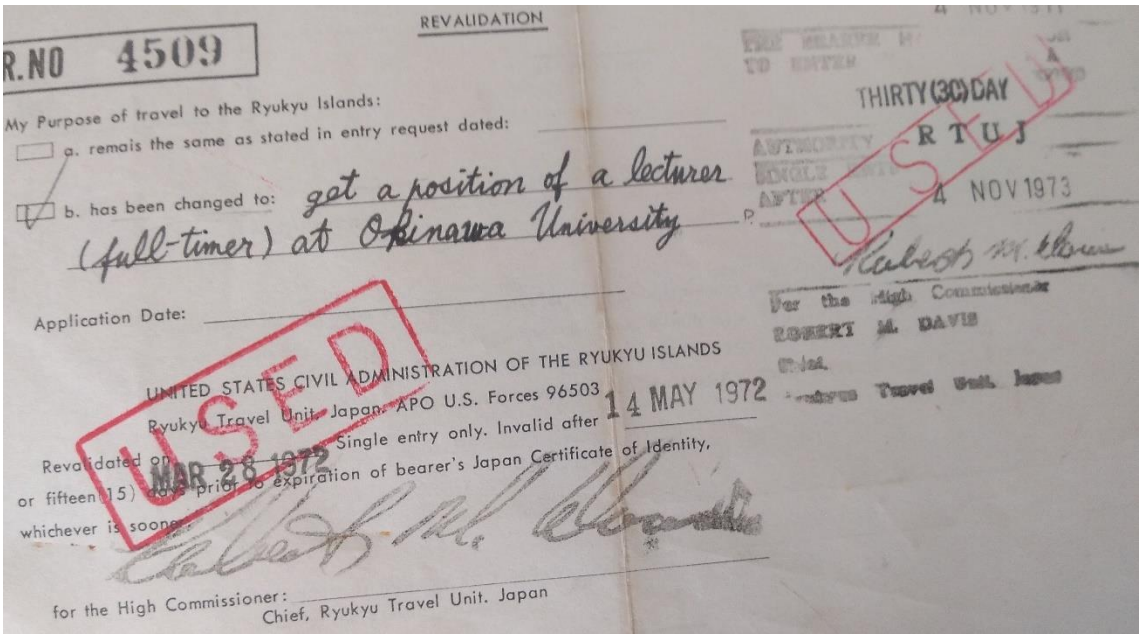
狐につままれたように、事態の急展開だ。再びビザの発給を申請し、引っ越し荷物をまとめ、今度は船便で向かうことになった。幸いなことに、同じ船便で、琉球大学の採用が決まった竹田秀樹さんのご夫妻も、いっしょに向かうことになった。４月８日晴海埠頭発の琉球海運「なは」だ。荷物（６０箱ぐらいの段ボール箱）は、当時合鑑（チッキ）と呼ばれた手荷物で同じ船便で送付した。荷物は、須藤敏明さんに自動車で運んでいただいた。いろいろとお世話になった。こんな旅は初めただというので、一等船室を借りた。持参したお金は、二人の貯金をはたいた総計１０万円だった。当座はこれでしのげると思っていた。

埠頭には、沢山の友達が見送りに来てくださった。まだ五色の紙テープの時代だ。恵美子の指導教官の松村康平先生も来てくださった。

船中では、竹田さんと毎晩宴会をした。船に酔う前に、酒に酔っていた。

４月１０日　那覇港着。竹田さんの迎えの田港朝昭先生は港におられたが、私の迎えはまだだった。「もしかして〜〜、

一連の話はなかったことなのか」などと不安を感じた。３０分後に迎えにこられた大学事務局長とお会いできた。すぐに大学に向かったのか、宿泊先のホテル日光にむかったのか、記憶がはっきりしない。


REVALIDATION

R.NO 4509

My Purpose of travel to the Ryukyu Islands:

a. remais the same as stated in entry request dated:

b. has been changed to: get a position of a lecturer (full-timer) at Okinawa University

Application Date:

UNITED STATES CIVIL ADMINISTRATION OF THE RYUKYU ISLANDS

Ryukyu Travel Unit, Japan, APO U.S. Forces 96503

Revalidated on 14 MAY 1972 Single entry only. Invalid after MAR 28 1972 or fifteen (15) days prior to expiration of bearer's Japan Certificate of Identity, whichever is sooner.

for the High Commissioner:

Chief, Ryukyu Travel Unit, Japan

THIRTY (30) DAY

RTUJ

4 NOV 1973

USED

USED

大学に着いて、佐久川学長とお会いする。「恵美子の採用を決めた日に、別の方の採用を決めてしまったので、もうしわけないが、名義専任ということにしてほしい」という話だった。驚きだが、仕方がないだろう。

大学の紹介でアパートは決まった。松川に新築された七階建て松川郵便共同住宅の７階だ。東向きで、目の前が、沖縄工業高校だった。荷物は翌日受け取ったが、なにか一つ無くなっていた。それが何だかも判明しなかった。

写真は、ビザ。　米軍の高等弁務官のサインがある。

８４　岐阜の生家

那覇に到着した後のことは、すでに公開している連載「第一次沖縄生活スタート」に書いた。なお、この連載の１９７２～１９９２年については、記事全体を集約したファイル「私の人生１」（ホームページ「浅野誠・浅野恵美子の世界」asaoki.jimdo.com 掲載）をダウンロードして閲覧することができる。

ここでこれまで触れなかった、１０歳代半ばに出た岐阜の生家をめぐる、その後のおおまかな経緯を書いておこう。

私が大学生になったころ、親からこんな打診があった。「姉に、婿養子にする男性と結婚させ、家業を継がせたい。それは、あなたが家を継がずに出ることになる。それでよいか」　私には願ってもない申し出であり、私は喜んで承諾した。長男が家業と家を継ぐのが普通だった当時としては、稀な事例だと思う。

そして、まもなく姉たちは結婚し、家業に従事した。

そんなころから、生家周辺をめぐる状況も激変していく。婦人服仕立て業の客のほとんどを占めていたのは、紡績の女工さんたちであったが、その紡績産業が縮小していき、私の記憶には残っていないが、７０～８０年代に紡績は閉業

していた。生家も客が激減し、８０年代終わりから９０年代初めには、休業状態になっていたようだ。義兄は、勤めに出ていた。

名古屋・岐阜の郊外地帯ということで、道路建設、住宅建設がすすむ。生家も道路拡張のために、立ち退き移転をした。さらに、紡績工場跡地には、大型スーパーが二軒もたった。生家の田の一部もいつのまにか、スーパー駐車場になっていた。

結果的に言うと、生家を出た私はラッキーだったかもしれない。こうして、私の岐阜にかかわるアイデンティティはどんどん薄れていき、「ふるさと感」もなくなっていく。